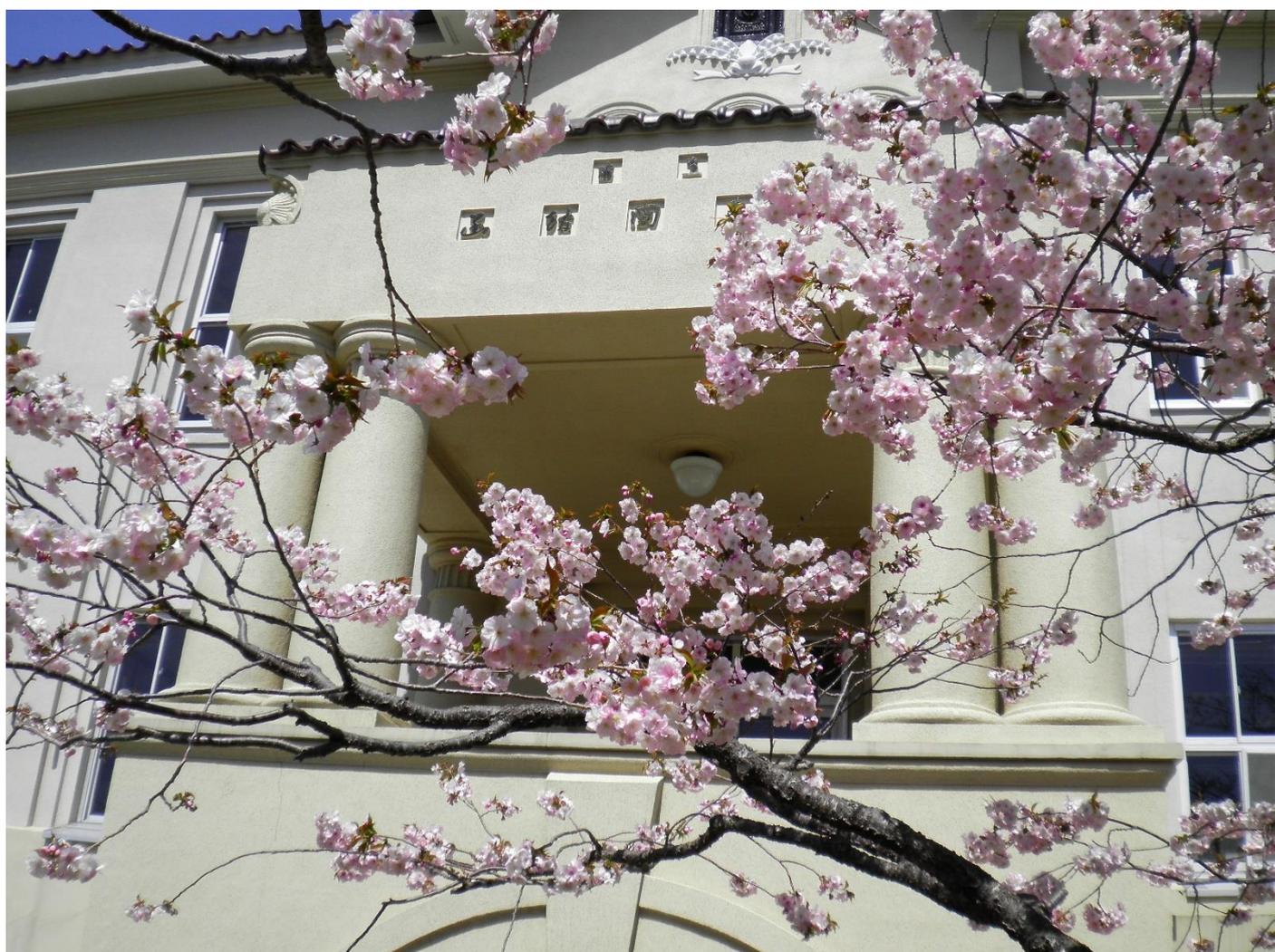


# 市民文芸

平成 29 年度

函館市民文芸

第 5 7 集



函館市中央図書館

指定管理者 TRC 函館グループ



目次

◇随筆(対馬 俊明 選)

【入選】

烈風通過	池田義博	1
老頭兇の戯言	高橋静也	3
「なんまいだ」と「真室川音頭」	谷口敦子	5
船という旅立ちのかたち	水関清	7
帰郷	山野みちこ	9

【佳作】

汐泊川に河童	片岡美智子	11
電車の座席	佐藤健	13
焼き芋	瀧沢鈴	15
合唱団入団!	野口裕子	17
私は、そこにいた	元木いづみ	19
【選評】		21

◇小説(安東 璋二 選)

【入選】

足ほしのうた	畠田実里	26
ドラマー	日高光	42

【佳作】

眠り盗人	洪逸辰	51
昔話	齋藤幹晃	58

◇文芸評論(安東 璋二 選)

【入選】

「砂山十首」から読み解く  
「二握の砂」の世界

【佳作】

「意象言」という分析手法で、夏目漱石の『夢十夜』の特徴を「第二夜」、「第三夜」、「第五夜」、「第七夜」から解析する

洪逸辰	80
-----	----

水関清	64
-----	----

【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

◇ノンフィクション（竹中 征機 選）

【入選】

庸人さんに会った

酒を愛した詩人・片平庸人

・・・・・・・・今田優二 92

曾祖父・・・・・・・・金子智昭 103

歌声喫茶との出逢いから・・・・・・・・高島啓之 112

【佳作】

北海道人はどこから来たのか

・・・・・・・・木村裕俊 122

景福丸の航跡

――玄海の女王から海峡の女王へ――

・・・・・・・・齊藤満 135

エキストラのように・・・・・・・・佐藤健 146

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155

◇詩（鷺谷 峰雄 選）

【入選】

音・・・・・・・・坂本千代光 157

言葉・・・・・・・・斉藤奈央 159

【佳作】

雨・・・・・・・・玉掛公恵 163

環境部・・・・・・・・沼崎洋 167

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 173

◇短歌（山県 庸美 選）

【入選】

菊地利春・小松榮子・石岡繁雄・・・・・・・・ 175

【佳作】

竹田光彦・三橋暁子・柴田泰子・石寄章枝

【選評】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176

【選者詠】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177

水関清・・・・・・・・・・・・・・・・ 175

◇俳句(熊澤 三太郎 選)

【入選】伊藤静子・水関清・大沼洋子……………

【佳作】菅原暘子・田中瑩子・竹田光彦・澤田寛之

欠端一機……………

【選評】……………

【選者吟】……………

181 179 178

◇川柳(池 さとし 選)

【入選】坂本千代光・岩本真穂・塩谷玲菜……………

【佳作】中村宵星・水島悦子・本間総子・白井靖孝

山根裕二……………

【選評】……………

【選者吟】……………

185 183 182

◇審査員紹介・あとがき……………

186

烈風通過

池田 義博

しだいに激しさを増しつつあった風雨は、午後になっていよいよ強くなり、確実に台風の接近を告げていた。

電線が千切れんばかりに揺れ、異様なメロデーをつけて不気味に鳴った。窓の戸がガタガタと音を立てる。築数十年の古い木造家屋を今にも丸ごと吹き飛ばしそうな勢いで風はうなった。

ところが夕飯を終えた頃から、風は序々に弱まりを見せた。やがて、すつかり雨もおさまり、空には星までが瞬き始めた。

誰もが「台風は去った」と安堵した。私たちはいつものように兄妹固まって布団に入り、そのまま眠りについたのだった。

どのくらい経っただろう。突然「起きて、早く」と耳元で母の金切り声でした。

私は驚いて飛び起きた。停電らしく、部屋は真っ暗だった。

緊張した母の顔が、懐中電灯の灯りの中で揺らいでいる。事情がのみ込めなかつたが、何かとんでもないことが起こつたのだと直感した。一瞬、ブルンと体が震えた。

ゴー、ゴー鳴る風に、家全体が絞られるようにキューキューひしめきながら揺れた。どこかのトタン屋根が引き剥がされ、猛烈な勢いで家の前を飛んで行く。トタンの破片が電信柱や、アスファルトに接触するたびにバリバリと音がして火花が散った。

「さあ、これを着て、これを被って」母は矢継早に私たちに指示をした。末の妹を身ごもっていた母は、お腹に時々手をやりながら、身近な荷物を風呂敷に包

んでいた。

突然、屋根が「ドスン」となって、体に衝撃を感じた。私たちは恐怖のあまり声も立てられず、じっと息を詰めていた。翌日見てみると、近所の食堂の看板が我が家の屋根に乗っかっていた。

消防士だった父は、昨夜のうちに非常招集がかかり、末広出張所に出かけていて留守だった。母と私たち兄妹四人は、玄関の上り框に体を寄せ合つて、まんじりともしないで朝を迎えた。

あの時まだ三十代前半だった母は、私たちをどこへ連れて行くかとしていたのだろう。屋根が飛び、玄関が風で破られたとしても、一体どこに逃げられたらいいのだろうか。

翌朝はまさに台風一過、抜けるような青空だった。私たち小学生は一応登校し

たが、グラウンドで校長先生のお話を聞いただけですぐに下校ということになった。

登下校の道々に、昨夜の台風で飛ばされた様なものが散乱し、大勢の人が後片付けに動き回っていた。護国神社の坂下辺りや電車道路沿いに大きな吹き溜まりが幾つもあり、電車は不通になっていた。

家に帰ると、台風で岩内が大火になった事を知った母が、おろおろしていた。岩内には祖父母が住んでおり、夏には毎年私たちが遊びに行く町である。電話が不通で連絡の取りようがなく、状況が全くわからないでは心配が募るばかりだった。

とりあえず、西川町にいる伯父を訪ねて相談することになった。母と一緒に伯父の家に行く途中、西別院の境内に幌を付けたトラックが何台も連なって入って行くのが見えた。

その年に保安隊から自衛隊へと名称が変わったばかりの隊員たちが、敷き詰

められた筵の上に慎重に何かを下していた。境内の入り口近くを覗いて、私は「ギョツ」として立ち竦んだ。遺体だったのだ。

朝、校長先生が、函館湾で青函連絡船が沈んだことを話されていたのを思い出した。

青函連絡船の洞爺丸が沈没し、乗客・船員千余人余りが死亡、行方不明になり、多くの人が七重浜の海岸に打ち上げられたというのだ。その遺体が目の前に次々と運ばれてきて安置されていたのだ。

中に、上着が波で流されたのか、下着一枚の幼女がいた。どこかにぶつかったのだろうか、白い肌のあちこちに青あざがつき、唇を堅く結んでいた。その姿が恐ろしく、私は思わず顔をそむけた。

この子のお母さんはどこにいるのか。なす術もない私たちに台風はなんと残酷なのだろう。無残な何体もの骸の前で、私は只々震える身体を両手でしっかりと押さえつけていた。

タイタニック号遭難以来、最大の海難事故だと新聞は報じた。現代のような気象予報技術があれば、これほどまでの惨禍は免れたに違いない。

不幸中の幸いと言おうか、岩内の大火で祖父母の家は全焼してしまつたが二人は無事だった。火の回りが早く、家財道具は何も運び出せなかったが、祖母は仏壇だけは背に担いで裏山に逃げたそうだ。

昭和二十九年九月二十六日、台風十五号が北海道を襲つた時のことである。当時私は十歳、小学四年生であった。

ろうとる  
老頭児の戯言

高橋 静也

ピンポン。

ドアフォンが鳴る。月末か、ならば新聞屋さんだな、と直ぐに見当がつく。訪れる人など滅多に無い单身赴任生活。錠を開ければ案の定、朝日新聞でくす、といつもの笑顔。

「…ウ、ウン、…お幾らでしたっけ」  
こちらも常套句。でも、本当に思い出せぬのだから情けない。ついでに喉の詰まりと掠れ声。すんなり声の出ないのが癪に障る。

還暦過ぎて单身生活とはついぞ考えもしなかつた。でも、このご時世、六十五歳までは現役でと妻から頼まれる前に覚悟していた。けれどこの年でのデビューダは辛く、職場に溶け込むのもかなりしんどい。その上、家事には能力も興味も無いと来てるから、快適さはかなぐり

捨てていつそ清々しいか。  
そんな没理想の生活の中でも発見することが多々ある。

土日、誰とも話さないでいると、月曜朝の声が出にくかったり掠れたりするのだ。思えば二日間声を発してなかったことに気付く。使わねば声も錆び付くのだ。若い頃と違って出不精になった。せめて立ち上がる際にヨイショと掛け声出すだけでもよいのだろうか。年寄ればいつかしたら独り言を言うようになるとも言われるが、私にその癖は無いようだ。ばかばかしいTV番組を見て笑うことはあつても、後片付け嫌さに片手鍋ごと掻っ込む食事を前に「いただきます」とは言わぬ。ましてや無人の家に帰って

「ただいま」では怖気が走ろう。  
運動不足で体が思うように動かぬ、下

手すりや首すら回らぬ(おっと、別義も成立するか)、声も常態復帰には結構手間取る。さらに、独り言は側に誰かがいるのを意識して発せられるものだと悟り得た時は何だか嬉しくなつた。ピーマンを縦横いずれに切るか迷つた末に、初めて中身の構造を知つた時よりよほど感動した。

それで初夏の日曜、青天に誘われたこともあつて軽登山を思い立った。子供が小さかつた頃何度か山に連れて行つた。すれ違う人毎に挨拶し合う良き慣習があるからだつた。翌日に備え喉を調える為との理由は秘めて目指すは恵山。頂近くが見えるまで車で行けるのが有り難く、楽な運動不足解消になろうと目論んだ。登山に適した服装・装備が不要そんなのも打つて付け、体力に自信無く、そ

れていて体裁は気にするさもしさが、本  
格を嫌いさり気なさを装わせるのだ。

「火口原駐車場」から見える硫黄の山  
は今も噴煙を立ち昇らせている。でも  
随所に人の手が施されている観光地だ  
った。岩がごろごろの山道にチト難儀す  
るかと思っても二キロ弱の距離表示に  
決意は鈍らなかつた。

ゴツゴツと風化した大きな黒岩群の  
間を登る。昔観た西部劇が蘇る。何せ独  
り、声は出せぬとも思考はころころと迷  
り出る。先程、「こんにちは」と交わし  
た二人連れが「まるでゴジラみたいな岩  
ね」と言つてのを後ろに聞いて納得す  
る。胸突き八丁のような勾配に変わって  
汗をかき始める。一歩ずつ確実に登らな  
いと膝を痛めるかもと不安がよぎる。踏  
み板が朽ちて鋸が飛び出ているところ  
もあり下を向きながらの登山である。苦  
痛は面に出さぬよう努めても、所々で小  
休止、実は根性無しの証しなのだが、そ  
の度に眺める空と海のパノラマは独り  
では勿体ないと感じさせる。「山頂まで

千メートル」との標識があれば岩を登る  
道は三百メートルでも辛い。登り始める  
時、高さにして三百メートルかと侮って  
いたのが悔やまれた。首にタオルを巻き  
バッグに入れて来たコーラを飲みなが  
ら登って行くと都合50分ほどで頂上  
に着いた。

登るほど蝦夷春蝉が喧しく鳴いてい  
た。眼下に見る海は青く深く、雲を透か  
し見るところもあつた。昼の用意をして  
来た人が思い思いにシートを広げる。若  
いカップルが山頂の標識で写真を撮つ  
ていたので、「お二人揃つての写真、撮  
りましょうか」と声を掛けた。スムーズ  
に声の出たのが嬉しかった。あいにく函  
館山は雲で見えなかつたが、好天の下、  
頂上には既に二〇余名の登山客がいた。  
腰を下ろす気になれなかつたのは独  
りだったから。もう少し景勝を拝んでい  
てもいいかなという思いを一蹴した。登  
ってくる人が多く登りより何十回も多  
く挨拶した。そう言えば十時も「こんに  
ちは」だったな、とふと気になった。

水曜日になって片脚のアキレス腱が  
腫れ上がった。足を引くのが治らぬので  
病院に行き痛み止めと湿布剤を貰う。登  
山が原因か、あるいは単なるきつかけか。  
そんなことすればこうなるかもと思  
うことが増えた。随所に綻びある老体を  
今更託つわけもない。周囲をのんびり眺  
めている気でしたら、万事が「暢気」に  
支配されている。多くを望まぬ年ゆえに、  
これで案外「生」を楽しんでいるのかも  
知れない。

「なんまいだ」と「真室川音頭」

谷口 敦子

以前読んだある作品の一場面がふと気になって、久しく脳裏から離れなくなつた。主人公が保養地の路地を歩いていて、小唄の師匠が弟子に教授している声が聞こえてきた、という場面だったが、その歌詞が「うめーのーはなー」で「真室川音頭」そっくりだったのだ。

真室川音頭はお座敷歌の1つにかぞえられるが、そもそもは労働に結びついて歌われたもので、口伝えで何通りもの歌詞が伝わっている。仕事の合間、あるいは仕事中に歌われる鼻歌のようなもので、月謝を払って習いに行くような種類の歌ではないはずだ。

この作品で芥川賞を受賞したのは、フランス文学者一家出身で慶応大出身の若い女性だった。そのせいか何かそぐわない感じがしてしまったのかもしれない

い。もつとも、それは作品の主題からは決して重要ではない部分だ。しかし私はどうにも気になったのだ。

「真室川音頭」は私の子ども頃の記憶に結びついている。父方の祖母が、三男である私の父の家に時折りやってきて数日滞在することがしばらく続いた。その折、針仕事などしながらうたっていたのが真室川音頭だった。

祖母は、本州からやってきた両親のもと、貧しい開拓農家に生まれた。やはり貧しい開拓民の息子である祖父と結婚し、厳しい寒さや冷害と貧しさに耐え6人の子を産み育てた。

私が少し大人になってからのことだが、母からこんな話を聞いた。祖母が若い頃、祖父が家庭を顧みず博打にうつつ

を抜かし、耐えきれずに子どももの手をひいて何里も離れた実家に帰ったことがあった。実家も貧しかったから、いつまでもやつかにはなれない。そんなとき、親戚に付き添われた祖父が祖母を迎えにきたのだそうだ。後にも先にもたった1度の家出だった。働き者だが口の重い祖母から、母が聞き出したエピソードだ。農家を継いだ長男の家から、町場にすむ父のもとへ足繁くやってくるようになったのは、隠居してまもなく祖父が亡くなり、家を出やすくなっていたからかもしれない。

働きづめでこれといつて趣味など無かつただろう祖母の、楽しみの1つが日本酒だった。夕食のとき、女学校仕込みの母の手料理に舌鼓を打ちながら、父の

お酌する熱燗の酒を大事そうにおいしそうにする祖母の顔が脳裏に残っている。しわだらけの頬がそのときだけぽつと赤くなつた。

隠居してからは、寺参りと町場の父の家に来ることが祖母の楽しみだった。信仰を杖に厳しい労働に耐えてきたこの地の農家の人々同様、祖母も何かにつけ「なんまいだ、なんまいだ」と念仏を唱えた。日本酒を飲むときもやはり「なんまいだ」は小さくつぶやかれた。うれしいうるときかなしいとき、感謝を表すとき「なんまいだ」は生活のあらゆる場面で祖母とともにあつた。それとともにあつたのが、真室川音頭だったのだ。寡黙でめつたに口をひらかない人だったが、ちんまりとかがんで針をうごかしながら歌つたのが真室川音頭だった。

わたしや、真室川のうめのはな  
あなたまた、この町のうぐいすよ  
花の咲くのをまちかねて

つぼみのうちから通うてくる

子どものことだから歌詞の意味などよくわからず聞いていたが、大人になつて聞くとなまめかしい内容なのだとか。祖母はこの歌がよほど気に入つていたのだろう。くりかえしこの詞だったから、あるいは1番しか知らなかったのかも知れない。

辞書を見るとこの歌は「山形県真室川町の民謡で花柳界の騒ぎ歌」であり「明治末に北海道で流行したナツト節を、昭和のはじめに真室川飛行場造設作業員たちが伝えたもの」とある。北海道にも縁のある歌だったのだ。ここでいう作業員は北海道からの出稼ぎの人々だろうか。

口うつしに伝わっていくものだから、いつのまにかさまざまな歌詞が流布するのだろう。中には春歌と銘打つものもあつて、厳しい境遇や労働の辛さをいつとき晴らすためのものだったことがわかる。

祖母が亡くなったのは40数年も前のことになる。当時は希だった92歳という長寿を全うした。

檀家寺を中心に結末の強い地区で、皆が親戚のような関係のせいかな、通夜では遠慮のない本音が飛び交つた。「ばあさんは大往生だ」「めでたいめでたい」。中には茶碗酒を片手に歌い出すものもいた。そのとき真室川音頭が歌われたのだつたかどうか、残念なことにもう記憶がない。

船という旅立ちのかたち

水 関 清

大学生活への期待を胸に、生まれ育った田舎町から乗り込んだのは、夜行の座席急行だった。五時間の乗車の後、深夜の連絡船に乗り継いで本州入りし、残りの旅路も座席急行だった。大宇からの往復をはじめ、何度連絡船のデッキを踏みしめたことだろう。

当時の連絡船の出航風景といえは、色とりどりの紙テープであった。「蛍の光」の演奏とドラの響き。そして送る人と送られる人を結ぶ、五色の紙テープ。往く者と残る者とが、双方の思いを色とりどりのテープに託した見送りであったが、宇高連絡船でも、青函連絡船でも、危険防止を名目に禁止されてしまった。現在その光景が見られるのは、豪華客船の出航時や、離島航路の一部など、ごく一部に限られた状況になっている。

こうした見送りに、なぜ紙テープが活躍していたのだろうか。そのはじめは、一九一五年のサンフランシスコ万博での客船出航時の見送りである。この出航の風物詩には、紙テープを介した「別れの握手」という意味があるという。離岸した船が遠ざかっていくとともに、テープはどんどん伸ばされていき、それが無くなると「お別れ」の時が来る。離岸時には、表情が読みとれた船上の人の顔は、すこしずつ船の輪郭と重なり、やがて水平線と一体となってその彼方に溶け込んでいく。

働き盛りの三〇代の数年間、離島診療所の運営を命じられ、家族を引き連れて赴任した。船便が運ぶ本土からの物資以外は自給自足の島の生活。酒屋はあるが本屋がなく、宅配便もタクシーも救急車

を呼んでも島の中にはやって来なかった。多様な需要に応えられる総合医活動に奔走する毎日であったが、救急医療にも島内完結が求められたことは、非常な重荷であった。特に夜間、本土への救急搬送は、いつも綱渡り。往診し、搬送が必要と診断すると、まず搬送のための担架と、担架を担ぐ人員の確保を自治会役員に要請する。次に、急拵への搬送用漁船と港の潮位を見ながら搬出する港を指定し、本土側の入航港への救急車の手配をする。船に乗りこんでからやと本来の医師としての仕事に専念し、本土側の救急隊や医療機関に引き継ぐ。

帰りの漁船の中では、搬送を手伝ってくれた島民とのしばしの語らい。関心は搬送された患者さんの安否が中心だが、いつも話題になるのは、救急車さえ患者

に呼べない離島生活の不便さ。船が、本土から突き出す岬の突端を回り、朝ぼらけの中に島影が見えるあたりに差しかかる頃になると、そんな暮らしの不便を乗り越える気持になる、島の素晴らしさ、

住民の気立ての良さが、口を突いて出てくる。曰く、鍵を掛けずに外出できる治安の良さ、大漁で分けあう魚の新鮮さ、島の斜面を拓いた果樹園でとれる柑橘類のみずみずしさ、などなど。そして、船が島の港に戻る頃には、話はいつも、「一人暮らしでも急病の時には駆けつけてくれる島民の気立ての良さ」などの島自慢になっていた。

そんな離島勤務の時代に、連絡船で送る側と見送られる側、双方の経験をさせていただいた。島から出ていく人は、転勤になった小学校の教員、駐在所の巡查さん、そして就職・進学先へと羽ばたいていく卒業生たち。

なかでも、学校の先生方の見送り風景は感動的だった。最初のうちは、先生を取り囲んではしゃぎ、走り回っていた子

どもたちも、船が岸壁を離れ、繰り出されていくテープが残り少なくなると、おとなしくなり、ついには泣き顔になって、船影に手を振る姿には、胸に迫るものがあった。

島の診療所から本土の医療機関に転任するために、家族そろって連絡船に乗った時のことは、さらに忘れがたい。テープを手に見送ってくださる方々の姿が小さくなっていくのを、今度は船上から見つめたのである。

埠頭から離れた船が、港を画する灯台の間を抜けて向きを変え、島と本土とを隔てる海峡に進み入ろうとする頃、どこからか聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。目の前の海を隔てて、出航した埠頭は遠く、かろうじて人の顔の輪郭がわかる程度である。

声のした方を探すと、先ほど抜けてきた灯台のたもとの消波ブロックの上の人影が見える。埠頭から伸びる堤防の上を、倒けつ転びつして近づくと子どもたちの姿がそれに続く。

校医を務めていた小学校の子どもたちだ。なるほど、こうすれば堤防に並行して航行する連絡船に、もう一度近づけるのだ。呼びかけに応えようとしたが、どうしても涙でつまって声にならない。手を振ることも出来ず、ただ頭を下げるしかなかった。

見送りのテープが尽きても、いきなり見えなくなるのではなく、視界の中で少しずつ小さくなっていく船。それを、いつまでも見送る。船での別れにいつも寄り添っているのは、思いやりという影なのである。

当時の往診靴に常備していた潮汐干満表は、今も手許にある。

歸郷

山野 みちこ

山下澄人さんの、第一五六回芥川賞作品「しんせかい」は、富良野塾・塾生だった体験を基にした小説だと知り興味深く手にとった。簡潔な文体に引き込まれながらページを繰っていくと、『音を立てて立ち木が裂けた。温度が下がっている。温度が下がると立ち木の中の水分が凍って裂ける。』という文が目飛びこんできた。

「凍裂」のことが書かれている！胸がおどった。気になっていたことがようやく分かる！だが——期待は叶わなかった。つぎの行は仲間との会話で、『音を立てて』のその音が、どういう音であるかは書かれてなかった。

わたしの夫は道央・下川で生まれた。日本で気温がもっとも下がるところの一つだ。毎冬ニュースで一度は、今日の

最低気温は下川、マイナス××℃でしたと四十に近い数字が報じられる。函館生まれには、その温度がもたらす寒さの実感が湧かない。

「朝起きると掛ふとんの縁が白くなってるんだ、吐いた息が氷になってへばり付いて……」

夫の口調はどこか得意気だ。

酒も氷るし、そして、木だつて割れてしまう。なかの水分が氷つて膨張し木を割ってしまう、割れる音がするんだよ、と夫は続けた。

「ほんと？」

あわただしく朝食をとりながら話題にしていたとき話はそこで終わつたが、高齢となり、ゆっくり食卓にいるようになった今、もっと具体的に酷寒のなかで割れていく木のことを聞きたいとわた

しは思うようになった（その現象を「凍裂」というと知ったのはいつだったろう）。

「木が裂けるところ、見たことがある？どんなふうなの？どんな音がするの？」

「その瞬間は見たことない。学校に行く途中、亀裂が入っている木を見て、あ——と思うんだ」

兄たちと雪原を列になり一時間かけて小学校に通つたという。よほどでなければ吹雪いた日でも休まない。寒いとか辛いとか思わなかったという。それではどんなことに腕白坊主の関心が向いていたのだろうと想像しながら、わたしは重ねて尋ねる。

「気温がもっとも下がるのは夜明け前だよ、じゃあ、その音は家のなかで聞いたの？」

「……そうだよ」

「どんな音だった？ビシビシツツとか、グ  
ワーンとか？」

劇画っぽい擬音をならべた問いかけ  
に、夫は戸惑ったようにくうを見上げた。

若いときから難があった夫の聴覚は  
加齢とともに度が強まっている。苦手だ  
ったのは鈴の音のような高い周波数域  
だけだったのに、今は、全体に聞こえづ  
らいといって画面に文字が付かないテ  
レビ番組は大音量にして見ている。外国  
映画は吹替え版は敬遠する。日常会話を  
成立させるためには、二度三度ゆっくり  
大きい声で繰り返さなければならな  
いから正直こちらは疲れる。近ごろは他  
人と会うことを避けるようになってき  
たので補聴器をすすめるのだが「まだ要  
らない」と頑なだ。

秋、庭の虫がにぎやかに鳴いているの  
でそう言ったら、「おれには聞こえない」  
と無然と返し、少しして、「セミの声も、  
虫の鳴き声も、子どもするときには聞いて

いたよ、なつかしいなあ」とつぶやいた。  
以来、そのことは話題にせず、すこし罪  
悪感をおぼえながら一人で虫たちの合  
唱に耳を傾けている。

そういう夫だが反対に、低周波、低い  
音には敏感に反応するようになった。と  
ても小さい音量の——路上の車のエン  
ジンが唸る音や、例えば冬、近所の屋根  
から雪がすべり落ちる音など、家のなか  
にいて、今のは何だ？と恐怖をにじませ  
た顔をする。低音域は増幅されて、体が  
揺すられでもしたように感じるのだろ  
うか。弱い感覚をカバ―するため他が鋭  
敏になると聞いたことがあるが。

「凍裂」の音を教えてくれと夫に言  
ったけれど、記憶の中にある音声はどの  
ように甦るのだろうか。もう一度聞いてみ  
たい、あのときの音、あの人の声。わた  
しは試みに、母の声に触れてみようと言  
ってみた。だが、リアルな声は再現され  
なかった。きれぎれに淡く脳裡に現われ  
るのは、なにかの場面でのコトバ。意味  
や気持は解かっても、肉声ではない。そ

の捉えられない頼りなさは劣化したフ  
イルム映像とノイズ以上。かつてじぶ  
んの耳が聞いた声が、音が、じぶんの内か  
らそのまま甦らない。なにかの音声を聞  
いたとき、これはXさんの声だとかピア  
ノの音だとかの特定・判断は難なくでき  
るのに、恣意的にその音を耳もとに響か  
せることは出来なかった。

夫に「凍裂」の音を教えてくれとい  
ったけれど、擬音であれ、比喩であれ、  
とても難しい要望をしたのかもしれない。  
い。

湯呑茶碗を手に夫はまだぼんやりし  
ている。きつと、鳥の鳴き声やそよぐ風  
の音を聞きに八歳まで住んだ故郷で野  
原を駆けまわっているのだ。そこには一  
本の木が立っていて……

汐泊川に河童 しおどまりがわ かっぱ

片岡 美智子

北海道では、函館と根室がお盆と七夕を新でやる。

私の利用している、デイサービスで作った笹飾りを川に流す行事が七月の終わりにあつた。私は週に一度水曜日だけ行っているので作った時は参加出来なかつた。残念だつたが、流す日は行く日なので楽しみだつた。

でも、話を聞いた瞬間「あんなに飾りが一杯ついた大きな竹を川に流したら、見つかったら叱られるのではないか？」と思つた。

七月下旬、デイサービスの名前がついた車二台に十三人の利用者が乗り出発偶にししか外出しない年寄りたちなので、川に着く前に三箇所も寄り道してくれした。函館空港、パークゴルフ場、函館牛乳では帰りに寄つて、自分の好きなアイ

スを食べることもなつてゐる。お小遣い三百円くらい持つてくるよう言われていたので、がつしり握つてゐる人もいる。「落としたら困るから預かるうか？」と言ふ職員にも嫌だと離さない。

「もう直ぐ川に着くよ。何も持たずに順に降りてね」なんと橋の上だ。二台並んだら橋からはみ出すほど細い川だつた。欄干に沿つて並ぶ。

「汐泊川と言うんだよ。ここは細い川だけれど、海に近くなると太くなつて、秋になると鮭も上るんだよ。危ないから欄干に掴まつて下を覗かないでね」

説明をされた時、私はどうしよう言つてしまつた。「先生、橋の上に車停めたら駄目なんじゃないの？竹だつて大きいし、車に名前書いてあるから捕まるっしょ」こんな時、ついおせっかいな私は口を出

してしまつた。性格なのだろうが、これで失敗も時々ある。

「大丈夫よ。ちゃんと届けを出してあるから心配しないで良いよ。ほら片岡さんと〇〇さんが真ん中だから二人で軽く持つて、一、二の三で手を離してね。」

「一、二の三」全員で声をかけた。ゆるい流れなので、ゆつくり、ゆらり、ゆらり流れていくのが見えたら一斉に拍手。「アッ、兜と鶴が離れた。」糊でつけたのが離れたよつた。

糸で繫いだ短冊などは水に浮かんで綺麗だ。五十メートルくらい流れた時、「アッ、河童だ！」「本当だ、河童で本当にゐるんだ！」

左岸から全身緑色した大きな河童がよろけたり、溺れそうに沈んだりしながら竹を拾おうとしてゐるのが見える。

「早くしないと流れて行ってしまふよ」  
観客の応援がすごい。

やっと掴んだ河童はドブン。立ち上がり、両手に竹を持ち、振り回したり掲げたり得意そうにしているのがよく分かる。河童の顔はよく見えない。頭の上はもじやもじやに見える。十五分くらい見えたが、笹竹を脇に抱えて出てきた所へ戻っていった。「ああ、帰っちゃった」ため息も聞こえる。

「さー、河童も帰ったし車に乗ってア  
イスを食べに行きましょう」乗ってから  
が又凄い。

「河童って、昔はいたけど今はいなくなつたと聞いたけど、やっぱりまだいるんだね」

「俺はいると信じてたぞ」威張る人もいて、  
喧々<sup>けんけん</sup>諤々<sup>げつげつ</sup>。

私は小さい時、「八月のお盆がすんだら川や海で泳いだら駄目だよ。河童が出てきてお尻の穴に手を突っ込んで、お腹の中の物を引っ張り出して食べちゃうんだって」「フーン」と聞いていたよ

うに思う。大きくなってからは、この時期の川や海は水が冷たくなり、危ない為だと知ったが。

今回、私も始め河童を見た時「アッ」と思ったが、直ぐ昔話を思い出したし、川を管理する所に届けたと言っていたから、我々みたい年寄りや、幼稚園児などを喜ばせてくれるような仕組みがあるんだろうと自分で納得して、喜んでいる仲間は、喜ばせておくことにした。

でも、本当にこういうことをしてくれるのはボランティアでないのかなとも思ったりだ。

函館市にも河川課があるから、そこかな？

もし、それなら随分しゃれたことだし、私も婆河童をやってみたいと思った。

アイスは美味しく、いい気分の行事だった。

## 電車の座席

佐藤 健

函館の人は電車のシートにゆるく腰掛けている。私は雪で原付バイクが使えなくなる冬場だけ通勤に市電を利用してゐる。今年で二シーズン目だ。「競馬場前」六時五二分発「函館どつく前」行きの電車に乗る。一両編成であるが、始発駅に近く時間帯も少しだけ早いためか客の数も十人に満たない。どうせ終

点まで乗るのだからと整理券をとると車両後部へ進み、向かって右側のシートの最後端に座る。終点までの四十分を利用して読書するのが常であり、左手で本を保持して右手でページをめくるため右横に誰も居ない自由な空間が確保できるこの位置がベストなのである。時々、大きなキャリーバッグを前にした観光客が座っていることがある。これも新幹線効果なのか、湯の川温泉の宿泊客

である。そんな時、あたかも自分の指定席が取られてしまったような気になるが、もしかしたら冬場だけ電車を利用する自分も後から乗って来る誰かの席を取っているかも知れない。読書に集中していて気付いていないだけかも知れないのだ。

電車が進むにつれて、乗車している客も増え、立っている人も出てくる。車内を見渡せば、座っている人には微妙な隙間が空いており、もう少し間隔を詰めればもう一人座れるスペースができる。函館の人は、その微妙な隙間を詰めてまで座ろうとも座らせようともしていないように思う。ぎゅうぎゅう詰めで座っても「あずましくない」のだろう。そもそも、市電初心者の私が今更言うことでもないように思うが、様々な長さのシート

が、それぞれ何人掛けなのかがわからないう。しかも車両の型が日替わりなので尚更である。だから、端の席を確保できなかった場合の座る位置に悩んでしまう。それは、カステラを人数分切り分ける時の目測に似ている。

東京の電車では、そんな曖昧なことは許されておらず、長いシートは七人掛け、短いシートは三人掛けである。さらに、一人分を示す線の模様が書かれているり、山形食パンのような形状に盛り上がっていたり、逆にワッフルのように窪んだりしてわかり易い。また、七人掛けでは、三つと四つの間に支柱が立てられている場合もあり、計画された人数がきちりと座ることが都会の車内マナーである。ある時、仕切りのない七人掛けのシートに八人が座る光景を目にしたこ

とがある。おそらく最初は小さな子供が座っていて、中心となるべき人の座る位置が半分ずれたのが原因と思われるが、その基準となる人が真ん中に取り残された後にその人の右隣に四人が座り、左隣に三人が座ることになってしまった。そうなると空いた座席に誰かが座ることの繰り返しで、いかにも窮屈な状態が繰り返されることになる。七人掛けに戻すには、基準となる位置の人が右隣が空いたときにすかさず半尻分移動すれば良いのであるが、こうなってしまうてはかなりの勇気がいる。都会では、老いも若きも男も女もじつと黙って座っている。

私は一時間ぐらいの移動であれば立つことはやぶさかではない。都会の通勤では、一時間以上満員電車で立つなどは当たり前前の光景であるが、それは、普通体型を超えた横幅の私が席に座ることので窮屈になる遠慮があるのかも知れない。理由はともあれ座ることに固執はしないものの空席に座るにも車内マナー

はある。第一優先権は空席の前の人にあるのは誰もが認めるものであろう。ある日、私は少し込み合った車内の中ほどで

座席に向かい両手で吊革につかまっていた。痴漢冤罪防止の基本姿勢である。前の座席には、年配の男性が座っていた。左隣に立っている四十代の女性は、自分の前に座っている同じ年代の女性と話をしている。座っている人は立っている人の荷物をひざの上に持ってあげている。駅に電車が止まると私の前の席の男性が席を立てて出口に向かった。空席を前にした私は少し迷った。あと三駅一分足らずである。そこに一瞬の間が生まれた。左斜めに座っていた女が私の前に横移動してきたのである。その右横にできた空席に当然のことのように私の左隣の女が座って、女二人は一瞬顔を見合わせた後、下を向いて黙った。私は多少若くは見られるが、彼女たちよりは明らかに年上であり、何より優先権は私にあったのだからせめて「いいですか」の一声が欲しかった。それにしても見事な早

業だと感心する。『スライド方式』と命名する。

函館駅前から高校生が乗り込んで来る。大きなバッグを背中に背負ったまま、時にはそのバッグが私の目の前で振り回されることもある。狭い車内でバッグは下に下ろすか前に抱えるのがマナーである。

暖かくなれば、観光に訪れる年配の方もいらつしやる。その時には「どうぞお座りください」と笑顔で声を掛けたいものである。

焼き芋

瀧沢 鈴

スーパーマーケットへ行つた。

野菜売り場の台の上に、袋に入つた焼き芋が売られている。

おばさんが一人やつて来て、無造作に一袋を取り買い物籠に入れた。

その昔私も焼き芋はよく買った。しかし私の買った焼き芋は・・・。

いしやーきいもーやきいも、この声が消えてから、もう何年経つたであろうか。

寒い晩秋の夜だった。時折聞こえてくるこの声に家族はいつも顔を見合わせて「ニヤツ」と笑う。そしてその声が近づくとつれて皆の目は所一点、母の顔に集まる。やがて母の呉れたお金を握りしめ、暗くて肌寒い外気に包まれながらこの声のもとへと走る私。

しばらくして新聞紙（紙）で作られ湯気の

上がった袋を両手で持ち、大急ぎで帰つて来る。

皆の目は手の中の袋の上に集まる。母はすぐに菜切り包丁を持ち出し、半分に切つてホカホカでほくほくの黄色いさつま芋を皆に分けてくれる。私達はこの

熱い芋にふうふうと息を吹きかけながら食べる。

「うまいね」「うんおいしいね」

皆の満足そうなのにこに顔は、部屋の

中を暖かくする。

食べ終ると又それぞれ自分のしていた仕事を続ける。新聞を読む人、繕い物をする人、編み物をする人、子供は絵本を見る。

芋を買うのはいつも私の役目。よるこ

んで食べるのは家族全員。でもこの使い走り（走り）は嫌ではない。

道の中程に来た焼き芋屋のおじさんは、車を四つ角の端に寄せて置き、釜の下から小さな腰かけを取り出してそれに腰をおろし、煙草を一服しはじめた。大きな車を引き、あちらこちらの道を歩いて来たので疲れたのであろう。この焼き芋屋さんはいつものんびりと商売をしているように見える。

引いている大八車の上には、だいぶ年期の入つた大きな木箱がのつていて、その木箱の中に黒ずんだ鉄の釜が重々しく入つていた。私が行くとおじさんは、分厚くて所々焼き焦げが付いて中綿の見えている『ぼっこ手袋』をはめている手で釜の蓋を重そうに横に寄せる。と中からさつま芋の焼けているうまさうな匂いが闇の中に流れ出る。釜の底の赤い炭火がちらつと見えた。釜の中まわりに

は針金で吊り下げられたさつま芋がずらりと並んでいる。釜の下に火が入っているので芋はいつも暖かい、いや熱いくらいだ。鉄釜の蓋を取り寄せるとおじさんは『ぼっこ手袋』をはずす。中から白い軍手をはめた手が現れ、その手が芋を選び始める。

「これがいいかな、こつちの方がうまそうだなあ」独り言を言いながら芋を紙袋に入れて秤はかりにかける。少しくらい多いのはいつものおまけ。

「まいどありがとね」

ふんわりとした声、これが又暖かそうにきこえる。

芋の入った新聞紙作りの袋をもらった私は芋が冷めないうちにと、家に向って走る。

少しくらいの寒さにもめげずやつてくるおじさんは、いつも手拭を頬被りにし、その上から耳のついたぬくぬくとした毛糸の帽子をかぶり、だぶだぶの大きなオーバーを着ている。時折少し強い風が吹いて、持っている紙袋が飛びそうに

なっても、少しも慌てず、同じ調子で仕事をしているおじさん。

今夜も一服し終わったおじさんはやおら立ち上がり、腰掛けを又釜の下に納めてから時間をかけて二枚の手袋を重ねてはめ、大八車の引手を持ち上げてゆつくりゆつくりと四つ角の交差道を渡つて暗闇の中に消えて行つた。

後にはカーテン越しに各家の灯りが、闇の中にふわふわ浮いて見える。静かな夜だ。

いつもは、しげく走る車も、今夜はなぜかその姿も音すら全く聞こえてこない。

静かな静かな夜だった。

ほど遠くからあのおじさんの声が聞こえてくる。

いしやーきいもーやきいも

今一度聞きたいあのおじさんのあの

声を……。

## 合唱団入団！

野口 裕子

「私、アイドル歌手になりたいの！」  
私が小学生の頃は、『花の中三トリオ』などの、アイドル全盛時代でしたので、自然とそんな気持ちになったのかもかもしれません。鏡の前に向かって、板チョコをかじりながら、笑顔で歌ってみる。チョコレート会社の歌番組の中で、チョコレートを食べながら歌うと言うのが、当時は憧れでした。歌を歌いたかったのか、チョコを食べたかったのか、今となっては定かではありませんが、引つ込み思案の私だったので、それは家の中の鏡の前だけで叶う夢でした。そんな幼少時代を過ごしていた私。

二年前、主人を亡くし、現実逃避からか、主人が亡くなつてしばらくしてから、いろんな所に顔を出してみました。それまでは、主人の病氣ありきで、いつ

も主人と共に過ごしていたので、自分一人で行動する事がなかったのです。なので、今まで行つた事のない講習会への参加、老前整理講座、収納講座、パソコン講座、料理教室、体操教室、そして、若者達が集うライブ会場などに足しげく通つて応援に行つたり。楽しかったけれど、何だかこの二年間、とにかく忙しくて、家に居る時はぐったりと何も出来ないくらいになっていました。二年経つてみて、少し落ち着いたところで、改めて考えてみました。本当は自分は何をしたいんだろう？今やっていることって、ひょっとしたら、現実から逃げているだけではないんだろうか？と。

そして今年一月、じつくりと紙に書き出してみる事にしました。私は、本当は何がしたいんだろう？と。

そして、そこに答えがありました。そうだ！私は小学校の時、憧れの合唱部に選ばれて、以来、合唱が大好きになっていたんだ。結婚したらいつか「ママさんコーラス」に入りたいと思つてたんだ。けれど、諸事情で入る機会が持てなかつた。ならば、そのチャンスは今だ！と思つちやつたお正月。思い立ったが吉日で、さて、じゃ、どうやって入団すればいいんだろう？特に合唱団に知り合いもないし。合唱の経験は、小、中学校の時だけだし、ブランクが長すぎる。ちょうどその時、童謡などを歌っている合唱団の発表を聴く機会がありました。聴いた後で、合唱団員の募集をしていないか聞きに行くと、今回を最後に解散する合唱団だという事でした。うーん、残念…。それならばと、ネット

で探してみる事にしました。何か所か見  
つかりました。その中で、自分の条件に  
合う合唱団を見つけました。早速、お正  
月明けに見学に行く事が出来ました。行  
つてみると、結構な広さの会場で、ピ  
アノが一台置いてあり、老若男女が入り交  
り、20名くらいの方で練習する様子で  
した。びつくりしたのは、合唱団なのに、  
ラジオ体操から練習が始まった事です。  
体操で、身体を柔軟にして、声を出しや  
すくするのでしょね。ピアノの生演奏  
でのラジオ体操というのは、さすが！と  
思いました。その後の発声練習。あー、  
気持ちいい！そして、合唱の練習がはじ  
まりました。楽譜を広げて、音符を見て  
歌うのが、こんなにも楽しかったとは！  
即、入団を決めました。大歓迎していた  
だきましたが、後で聴いた話によると、  
こんなに早く入団を決める人はいない  
そうで、珍しい存在だったようです。

でも、知らないというのは恐ろしいも  
ので、実は私が入団した合唱団は、歴史  
が古く、昔は音楽のプロの人達で構成さ

れていたそう。今は、音楽のプロの人に  
混じって、一般の人も入っている合唱団  
になっているそうだけれど、もし、事前  
にその事実を知っていたら、入団はして  
いなかったと思うので、世の中には、知  
らない方がいい事もありますね！

そんな訳で、電撃入団した私ですが、  
大きなブランクのある私なので、心掛け  
たのは、とにかく、練習には可能な限り  
毎週参加する事。そしていつも笑顔で過  
ごす。この二つでした。練習は集中して  
やるので、二時間の練習時間がアツとい  
う間に過ぎてしまいます。でも、本当に  
楽しいのです。あー、私のやりたかった  
事は、これだったんだなあって思いまし  
た。既に、二つの発表会に無事、出演す  
る事が出来ました。実際に発表会に出演  
すると、本当の意味で、合唱団の一員に  
加われたように感じ、団員のみなさんと  
のコミュニケーションも取れるように  
なり、ますます楽しく感じています。今  
年は、また、発表会がいくつかあります。  
頑張らなくっちゃ！

本当にやりたい！って思ったら、いつ  
からでも始められる。そう思いました。  
二十代から七十代までの男女が混じっ  
て一つの作品を作り上げていく合唱団。  
その仲間に入れていただけで、本当に  
感謝しています。新たなスタートを、踏  
み出せました。

そうそう、私の子供の頃の夢。来年は、  
「アラカンアイドル素人歌手」を目指し  
ちやいまいしょうかねえ？夢はいつまで  
も大きく！



言葉は臆けだが、確か、大人がそんなことを言うべきではないという内容だった。

そんな時、心の中の小びんの澱は、二層にも三層にもなるように思われた。家業を支え進学に理解を示していた我慢強い母は、はらはらしながら見守っていたのだろう。

愛されていない、という思いは、諦めた確信のように拭い去るのは難しかった。

父が再発による進行性の癌と闘い、家業を案じつつ六十八才で逝った。私もその年令に近づき、来し方を見つめ直している。

色紙を一枚一枚取り出して並べるように、それぞれの色に染まった父との関わりが思い起こされ、体の奥から違った感情も湧き出る。

大変な時代に生きて来たんですね。お父ちゃんに慣れなくてごめんなどい。

道東から身重で転勤になった時、Aさんと一緒にトラックで来てくれてありがとうね。

元気で生きていた時に言えなかった言葉を心の中で呟いてみる。

初孫である娘への優しいまなざし。体温が失われていく中、側にいて涙を一杯ためていた娘の姿。

大沼生まれであることを忘れ、駒ヶ岳や大沼の素晴らしさを伝えた私に、ここに替同した父。駒ヶ岳が映る小さな円沼の存在を知っていた喜び。父の遺影から見えるように駒ヶ岳と大沼の写真を飾った日のこと。

可愛がられていないとか愛されていないとかに拘り、思い込み強く、思春期に孤独感を味わったことは、欠如感もたらす幸せに通じると、今は思える。抗う対象が父でよかった。

今年、母の一周忌を済ませた。三年半ほどの看護・介護・看取りの日々は、これまででない母との濃密な時間でもあ

った。

母は、父のことを「口は悪いけれど情のある人」と最期まで言い続けた。

父と母がいて、確かに私も、そこ、ふるさとにいたのだ。内浦湾の波の煌めきに、私の心の澱は、静かに消えていた。

「今日も暮れゆく異国の丘に 友よ辛かる切なかる 我慢だ待つてる嵐が過ぎ…」

と気持ちよさそうに「異国の丘」を歌う父のすぼめた口もとが、やけに印象的なのである。

父の兄が昭和二十年九月十七日にソ連兵に殺されたと聞かされた。衛生兵で女性をかばい命を絶つたと母からの聞き伝えである。

好天の時は羊蹄山が臨める高台に墓地がある。父と母、そして、叔父をも想い、薄桃色の竜胆の花を手向けた。

## 選評

### 対馬 俊明

本年度の随筆部門の応募数は二十四編。今年も九十代から十代という幅広い

年齢層からの応募があった。応募者は入賞経験のあるベテランが多いが、中には昨年度の「市民文芸」を読んでもおもしろさに惹かれて自分も参加したと書いている新たな執筆者もいる。それというのも、毎年入賞作品を掲載した「市民文芸」が冊子として刊行され、図書館でそれを読むことができる効果が大きい。高齢化と若者の活字離れなどで文芸同人雑誌が廃刊に至る例を耳にすることが多いが、函館にはその一つの砦として「市民文芸」があることを誇りにしたい。例によって到着順に作品を紹介する。

#### 「焼き芋」

瀧沢 鈴

スーパーマーケットで袋入りの焼き芋を買う人を見て、かつて、寒い晩秋の夜に独特の売り声を響かせてやってきた焼き芋屋のおじさんを思い出し、身を

寄せ合って焼き芋を食べる家族の様子や大人車の上の釜の中の焼き芋の焼き具合などを描いている。現代では希薄になつた人肌のぬくもりを思い出させてくれる作品である。

#### 「無題」

児童発達支援の事業所で子供たちと関わるボランティアをしている「ぼく」の報告である。「一緒に考えて、試して、を何度も繰り返し」「失敗したつていいんだ。それもいい経験だから」というやり方で接した時の子供の反応を具体的に描いてもらいたい。「自分で出来た時の子どもたちの笑顔」に読者も出会いたいから。

#### 「病気に負けない」

1949年函館生まれ、現在64歳の「私」の回想録。ベビーブームの世代で近所に子どもが大勢いたという話や、高卒時金の卵と持て囃され、集団就職で青函連絡船に乗り込み出発する時の別れの辛さを書いているところは時代が想起されておもしろい。車の窓枠を作る会

社で5年間働いたが、忙しい毎日に嫌気が差し、函館に帰って看護師の資格を取り、35年間働いたという職歴を二気にまとめている。走り書きするにはもったいない人生という時間。立ち止まってエピソードを描くことで共感を呼ぶ作品になるのではないか。

#### 「わたくしと機関車」

昭和十六年四月、日中戦争の真つ最中。国鉄職員として採用され、機関助士科に入所。見習い期間の釜焚きでの失敗や機関士としての過酷な労働の経験を克明に綴っている。残念ながら規定枚数を超える作品で選考の対象とすることができない。一部カットして再挑戦することをお勧めする。

#### 「父のルーツ」

子どものころに会った父の末弟の顔に異邦人の相を感じた記憶と、母が語った父の実家が鎌倉時代以来の旧家であるとの話と合わせて、血筋に天山山脈の西の方の民族の血が混じっているのではないかと想像を巡らせる。家系を遡つ

て日本人のルーツに迫るという着想はおもしろいが、その古代史探求の過程は随筆の範疇に収まる内容ではないだろう。

### 「主人が亡くなってからの私」

去年主人の十三回忌をすませ、足腰の衰えを自覚しつつ、二人の娘に支えられて、ギヤラリーを巡ったり、仲間とのマージャンを楽しんだり、短歌を詠んだりと豊かに日常を過ごす様子が書かれている。「これは主人と共通の楽しい思い出が沢山あって其れが大きな支えになつていふような気がする」とあって、前に何度か読んだ記憶がある幸せの構図に感心するばかりです。

### 「電車の座席」

佐藤 健

函館で市電を利用するようになって二年目。朝の通勤時の座席の positioning についての説明からはじめて、東京と函館の混んできた時の座席の詰め方の違いを解説している。過密都市東京と過疎化が進む函館の街の現状には直接触れず、どこにでも共通する乗車マナーについて

語るなど配慮が行き届いた語り口に感心した。

### 「汐泊川に河童」

片岡 美智子

七月デーサービスの車で汐泊まり川に行つて、七夕飾りを流す行事に参加した時のこと、緑の大河童が現れた話をコメント風書いている。河童の正体を皆で想像するところがおもしろい。

### 「烈風通過」

池田 義博

小学校四年生で体験した通称洞爺丸台風の被災状況を描いている。当時の記録としては、青函連絡船の通信員であった坂本幸四郎氏の「青函連絡船」朝日新聞社発売があるが、当日自宅で台風の猛威にさらされ、翌日西別院の境内で遺体を見たという体験を子供の目を通して描き出した文章は、臨場感にあふれていて胸に迫るものがある。

### 「合唱団入団！」

野口 裕子

二年前に夫を亡くし、心の空白を埋めるために、さまざまな講座・講習会に参加して疲れ果てたこと。最後にたどり着

いたのが、子供時代のアイドルになる夢ともつながる歌の世界、合唱団への加入であったこと。潜在していた心に動かされた行動の軌跡が書かれていておもしろい。

### 「老頭児(らうとうこ)の戯言」

高橋 静也

題名のロートルは中国語で老人の意味。還暦過ぎて单身生活。誰とも話さないでいると声が出てくることに気づく。運動不足解消もあって恵山登山をし、他の登山客と会話する話。单身生活の心境が朴訥ともいえる語り口で書かれていて共感を誘う作品である。

### 「近代文学とオペラ演劇について」

亀田老人大学に入學して、自己紹介に

図書館勤務時代に読んだ谷崎潤一郎の著作を挙げる。オペラ鑑賞については、あら筋を知ることと楽しみ方が大きく変わるとアドバイスしている。該博な知識をお持ちのようだが、話題が散漫。文学か、オペラかどちらかに絞って案内いただきたい。

## 「入学式」

小学校入学前から学校嫌い。ひどい口音で人と話すことすらできなかった子供が、校長先生の指導を受け、冬の海で父が死んだことをきっかけに教師を指し、入学式で三十数回生徒を迎える立場になった話。入学式をキーワードにした感動的ドラマだが、あらずじを追うような文体で細部がない。これは小説として描くべき材料だろう。

## 「帰郷」

山野 みちこ

若いころに夫が語った故郷での樹木の凍裂の音。年とともに難聴の度が進む夫にもう一度その音について語ってほしいとせがむ妻。記憶の中にある音声はどのようにしたら甦るのか。音の記憶の再現の難しさは、時間の不可逆性に通じている。そのことを雪原の中に立つ一本の木のイメージとともに、夫の聴覚の変化を気遣う妻の心境を通して描き出した秀作である。ただし題名には再考の余地があると思う。

## 「少なくとも猫は。ペットにあらず」

子どものころ、田舎の家では「犬は番犬、猫はネズミの駆除、にわとりは卵、ヤギは乳」と役割を果たしてその存在であった。ある日三毛猫が現れ、天井のネズミを一掃して家に住むことを許される。その後バアサンが、猫が「腹ぼけ」であるのに気づく。何日かして子猫四匹を連れてきたが、猫一家はその後姿をくらました。少年が自転車で学校に向かう途中、金持ちの家の前で三毛を見かける。三毛との対話。「ここに居たのか」バツが悪そうな表情で猫は「元氣だから少年「安心したよ」猫「じゃあな」

前半の市民文芸作品応募に迷う様子を自虐的に語った部分が余計である。それがなければ田舎弁丸出しの語りと三毛猫との再会場面がおもしろくて取り上げたい作品だった。

## 「言の葉の大輪」

中2の娘が電子辞書を欲しがったことから、辞書を愛用した両親のこと、辞書を引くことが勉強とイコールであつ

た筆者自身の体験を描いて、電子辞書と手引きの辞書のそれぞれの利点とその時代性について書いている。エッセーにふさわしいテーマだが、最後の部分が辞書の利点を書いているのか、使われなくなった理由を書いているのか、不分明な文章になってしまったところが残念である。

## 「私は、そこにいた」

元木 いづみ

海辺の村で生まれ、酒飲みの父の姿を見ながら気難しい少女として育った私。大学進学に反対されて、父に愛されていないという思い込みを募らせた。癌で倒れた父と同じ年齢に近づき、父母の生きた時代と生まれ育った海辺の町を振り返る。成長とともに深まる父への理解共感。そして私は、そこにいた。戦後の困難な時代を生き抜いた両親を追慕する深い心境が描かれた作品。

## 「お手紙だよ、はい！」

大学進学のために一人暮らしを始めた娘からの絵はがき。幼いころ何度か行

った動物園に目的の動物がいなかったことこの報告を読んで涙が止まらなくなってしまう。幼いころの娘の手紙「いつもありがと」「うまれてきてうれしい」不安の中の子育ての思い出。若い母親が子育てにあたる不安と、それに答えようとする娘の真剣さに打たれるものがあるが、父親が姿を現さず、家族構成が分からないのと、枚数不足であることが惜しまれる。

### 「レクイエム」

下海岸の漁村での生活で、酒飲みの父に苦勞させられて五十二歳で亡くなった母とその後仕事を辞めてしまい、脳梗塞から認知症、最後はガンを患って八十二歳で亡くなった父の人生を娘の私が回想している。父の死後、遺品の中から見つかったノートには、若い母との出会いの時を書いた詩と母にガンが見つかった時のシヨックを書いた詩があった。「万年青年と言われた父」という記述もあり、見えなかった夫婦の絆の深さに出会った娘の驚きをもっと書いてほしい

かった。

### 「恒久の平和の道を拓くために」

修学旅行の事前学習として見た沖縄戦のDVDの映像の中に現れた死体の数々。そのシヨッキングな映像が頭を離れなくなり眠られなくなってしまう。しかし思考停止からは何も生まれないこと、高高校生がしなければならぬことは「学ぶこと、聴くこと、考えること、伝えること」だと力強く訴えている。若い人の平和への意識の高まりに期待する者だが、文芸作品としての随筆というジャンルにおいては、それがいかに高い理想に基づく内容であつてもメッセージをダイレクトに伝えようとする文章は対象としない。高校生対象の作品募集には、「わたしの主張」や「課題小論文」をエッセイ・随筆に含めるものもあるので誤解を招いたと思う。函館「市民文芸」の各ジャンルの入選作を読んで、それぞれが求めている作品モデルを理解してチャレンジすることをおすすめする。

### 「なんまいだ」と「真室川音頭」

谷口 敦子

筆者が子どものころ、家に遊びに来た祖母が針仕事をしながら口ずさんだ「真室川音頭」について調べるうちに、それが北海道にも関連する労働と結びついた歌であることが分かる。そのことから、開拓農家に生まれ、同じ農家の祖父と結婚し、六人の子を育てた祖母の労苦に満ちた人生を思いやる文章である。かすかな記憶から、主題を引き出す手慣れた書きぶりに感心した。

### 「船という旅立ちのかたち」

水関 清

離島診療所の運営を命じられ、家族を引き連れて赴任した際の思い出を語る。救急医療の時の諸手配。帰りの漁船での島民との語らい。住民の気立ての良さ。魚の新鮮さ。本土への転任の際の見送りの様子など、記憶に残る情景を鮮明に描いた感動的な作品。

### 「小さな思い出」

冒頭に「函館に生活して四十年あまり、

「函館の空の色大好きです」とある。続いて「カラフト富内小学校の空の色忘れられない」とあって、「私達親子五人が函館港に引き揚げた年は昭和二年六月二三日で第三次引き上げ船北進丸でないか」とその後真岡の浜で引き揚げ船の順番を待つ間の生活の様子。函館港に着いて千代ヶ岱小学校の体育館で何日か過ごしたこと。援護局の計らいで網走の旧陸軍病院の建物で生活することになり、そこで小学校に通うようになったこと。鉄道に復職した父と一緒に一家は函館に住むようになった。記述が途切れ途切れで読み取りにくく、随筆作品としては完成していないが、記録として大事な事実を含んだ文章である。

### 「大福」

ボクが、佐渡で農学校を卒業するまで世話になった伯父の家を出て、函館に行く時みやげに持った大福のことが書かれている。佐渡の祭りは四月十五日と決まっていて、鬼太鼓をたたいてお神輿が来る。祭りがすんでから行けばいいとみ

んなが言ったが、ボクは柳行李に丹前一枚、半天一枚と肌着をつめて、トランクには昨日つき上げた紅白の大福を入れて新潟までの船の待合室まで運んだ。昭和二十九年は北洋が再開した年で、函館港には母船と独航船がつながっていて、歓迎のポスターが街中に貼ってあった。大福は仕事先へのみやげだった。佐渡の友達は今でもあの時運んだ大福が入ったトランクの重かったことを手紙に書いてくる。

この作品も部分的に分からないところがあり完成品ではないが、貴重な体験を記してあるので、長い引用をさせてもらった。整理して再チャレンジしてほしい。

足ほしのうた

畠田実里

いま、わたしは国道の防波堤より高く積み上げられた、波消しブロックに腰を下ろして、海を眺めている。砂浜はすっかり消えている。この辺りは、右手の磯の位置からすると、渚か海の中だっただろう。

砂浜は集落の端から端まであり、家から渚まで八十メートルくらいもあった。そこで小学校の運動会をした。野球もやった。相撲、陣取り、チャンバラもやった。イカ干しもコンブ干しも、みんな砂浜だった。生活は砂浜と共にあつたといつていい。

「あの出来事」をきっかけに、砂浜なんかなくなればいいと、ずっと思ってきた。それなのに、いま砂浜の形跡すらなくなってしまうと、うれしさを乗り越えて、複雑な心境になっている。

潮風に吹かれていると、子供のころ歌った「足ほしのうた」が、波音に交じって、聞こえてきた。

ゴメの足 ほせねで

おらの足 ほせろ

五つ違いの弟、ユタカの声だ。聞いてると、だんだん心が

透き通っていくような気がしてきて、わたしも声を出していた。ユタカと歌っていると、しだいに子供に帰っていく。

海辺の春は、海からやってくる。春の嵐はひと波ごとに、覆っていた雪を溶かして、砂浜を広げていく。春の来るのを待ちわびていた心は、わくわくしてくる。

わたしとユタカは、半年ぶりに磯に下りた。まだ、海水は素足にきりつと冷たくて、カニとりを早々に切り上げて、磯から上がった。

「兄ちゃん、砂、あつたかくていいね」

二人で「足ほしのうた」を歌いながら、片足ずつ乾いた砂を、交互にかけ、すり足で歩き回る。たったこれだけの短い歌だけど、ぬらした足が乾くまで、繰り返す。砂の表面は春の温もりをためて、冷えた足にほんのりと優しい。

「ユタカ、足のどこが一番先に乾くか、わかるか？」

「えっ！」

ユタカは絶句して、なんでそんなこと聞くの、という顔で見ている。

「いつもやっているのに、そんなこともわからないのか」

「おら、そんなこと、考えたことねーも。こーうしていたら足ほせるんだから、いいべや」

すり足をしながら不機嫌だ。

「もう一回ぬらしてくるから、よく見ろ」

わたしは、渚に走った。ユタカもしぶしぶついてくる。

浜にもどって、また歌いながら繰り返し返す。

ゴメの足 ほせねで

おらの足 ほせろ

二、三步もしないうちに、

「兄ちゃん、爪！」

大発見でもしたような声を上げた。

「足はまだ砂まみれなのに、爪だけはみんなはつきり見えるべ。もう一回確かめてみたら」

ユタカは、こんどは勇んで渚に走って行って、すり足をしながら歌っている。いつもの元気なユタカにもどっている。

わたしは、砂浜に腰を下ろして見ている。

「兄ちゃん、やつぱり爪！」

にこやかに笑っている。

「はだしっていいね」

足の裏は、半年も砂に触れていなかったのだ。

砂に腰を下ろして、足についた砂を手ではらう。さつき、

磯の石を起こして獲った小さいカニが、ブリキのバケツの中

で、きりきり音をたてている。よじ登ろうとする、爪の音だ。

砂浜が嫌いになる出来事が起こったのは、六年生の運動会

練習の合間、休憩のときだった。

義幸がみんなにいった。

「来年は中学だし、砂浜でやる運動会も、今年が最後だな」

だれも、なにもいわない。

「ド、ドウシテ チュウガツコウハ ウンドウカイ、スナハ  
マデ ヤ、ヤラナイ……」

いい終わらないうちに、驚きの声が一斉に向いてきた。どうして？驚きの中身がわたしとみんなと、違っている。それだけはわかる。運動会、砂浜でやらないなんて。いわずにいられなかった。

みんなは、ふだん、全くといっていいくらい、しゃべることのないわたしがいったので驚いている。ところが、返ってきたことばはこうだった。

「タケシ、おまえってやつは、どこまでバカなんだ。たまに声出したと思ったら、そんなことかよ。こいつ、運動会どこでも、砂浜でやると思ってるんだよ」

義幸がみんなに聞こえよがしにいうと、どつと、軽蔑の笑いが起こった。ところが、なにがおかしいのか、わたしにはわからない。

バカにしたり、意地悪するきっかけを作るのは、いつも義

幸だ。また始まった。

「まったく、おまえは、笑うよりねーよな」

義幸がまたいった。すると、それに合わせる人が出てきた。

「おまえの口は、もの食うだけかと思つたら、しゃべれるんじやねーか。ほら、悔しかったら、もつとなんか、いつてみる」

光男がからかうと、昭一も笑いながらいう。

「こいつ、学校休んでばかりで、ろくに勉強もしてないから、世の中のこと、なんもわかつてねんだ」

「砂浜、どこにでもあると思つてんだべよ。地図もろくに見ないもな。日本だつて広いつてこと、なーんもわかつてねんだ」

「砂浜で運動会やるとこなんて、日本中探しても、ここぐらいだぞ。来年から中学だというのに、そんなことまでわかんねーのか」

光男が笑つていう。

(えつ、砂浜で運動会やるの、ここだけつて……。どうして?)

「こいつ、おかしいと思つてたけど、やつぱりな」

この時とばかり、これでもかこれでもかと軽蔑の音が、矢のように突き刺さつてきた。

たしかにわたしは、勉強嫌いで学校も休んでばかりだ。それでも、みんなのいつてる意味が、まだ呑み込めなかつた。

砂浜は裸足で走るのに、地べたを裸足で走つたら、石ころ

や木くずを踏んだら、痛いだろう。転んだら膝が、すぐ傷ついてしまうと思うと、ただでも学校嫌いなわたしには、またまた心配になつてきた。

家に帰つてから、机の下からほこりまみれの地図帳を、引っ張り出して開いた。たしかに街は、海辺にばかりあるのではなかつた。海から離れた平野にだつて街は沢山ある。そこには砂浜なんてないだろう。知らなかつた。というより、運動会は砂浜でやるもの、と思ひ込んでいたのだ。

ようやく、みんなのいつてることが、少しだけわかるような気がした。

それ以来、ことある度に、このことでバカにされた。

わたしは、かけっこは早くなかつたけど、運動会は好きだつた。練習も本番もみんな砂浜でやるからだ。休憩時間には砂浜はもちろんのこと、渚や磯で遊ぶことができた。教室で体を固くして、勉強の終わるのを待ち続ける一日は、とてつもなく長く、苦痛だつた。

中学校に行つてからも、「あの出来事」が面白おかしく、学校中に知れ渡つた。いいふらしてるのは、義幸だということわかつている。

三年生になつても、下級生にもからかわれる始末だ。きつと、わたしなら、怒つて乱暴されるとは、思つていないからだろう。それだけ無口で、おとなしい生徒だつた。だれかに

いわせると、「あいつは、いるのかいないか、わからないやつ」という。

わたしは卒業したら、ものもいわない、学校も休んでばかりなので、ここで漁師をするよりないと思っていた。

ところが、父母は漁師をすることに反対だった。

「学校卒業したら、ここにいろつもらしいけど、コンブ取りやイカつけだけで、暮らしていけない。父さんは、冬から夏まで出稼ぎをして、ようやく暮らしてるんだ。おまえは、腕に職をつける仕事をした方がいい」

父も、そう考えているようだった。

他人とろくに話もできない人が、知らない土地で、うまくやっていけるだろうか。

「いつまで、ぐずぐずしてる。やってもみないで悩んでばかりいても、どうにもならないんだ。ほんとに度胸なしなんだから。さっさと決めて、先生に早く就職頼んでおかないとな」

母はあきれている。

ここにいたら学校の延長で、バカにされ続け、みんなに相手にされないだろう。それを考えると、就職したほうがいいかも。でも、やっぱり不安だ。

先生に就職を頼んでからも、悩んでいた。反面、ここを出たら、もう郷里や同級生のことなど気にしなくてもいいと考えたら、少しは不安がなくなった。やけくそだ。出ていった

ら絶対こんなところ、思い出すもんか。心にそう決めた。集団就職で上京した。

山田先生と同級生数人いっしょだった。汽車の中も、時間が有り過ぎるくらいあったから、一人離れて寝たふりをしてた。光男がそばに来ていった。

「おまえと会えなくなったら、淋しいな」

本心でいってるのか、わからない。

「よくおまえを、使ってくれるとこ、あったな」

昭一にも、皮肉をいわれた。なにかいいたら、こいつらを喜ばせるだけなので、黙っていた。

先生が一緒なので、いつもと違ってひどくはなかつた。もう少しでおさらばだから、と心の中でいつていた。

ときどき、先生がそばに来た。

「乗り物酔いでもしたのかい」

と、心配してくれた。

上野駅に着くと、迎えが来て一人一人散っていった。最後に残ったのはわたしだった。

駅には、自動車工場のおばさんが迎えに来た。

「主人は急な仕事が入って、来られなくてごめんね」

と謝った。

先生はおばさんに挨拶して、なにか小声で話していた。それから、

「よく頼んでおいたから、体に気をつけて頑張るんだよ。じやあな」

と喋ってから、背を向けて歩き出した。わたしとおばさんは、少しの間見送っていた。

先生は少し離れたところで、振り返って、また頭を下げると、片手をふって人ごみに消えて行った。なんだかわからないけど、喉元に熱いものがこみ上げてきて、涙が出た。あわてて肘で拭った。

おばさんは、元気な声で

「さあ、行きましようか」

と歩き出した。おばさんから離れないように、人ごみの中を急いだ。おばさんはときどきわたしをふり向いて、微笑みかけた。優しそうな人で安心した。なんかいも電車に乗り換えて、バスに乗って、やっと着いた。

そこは自動車整備工場というより、普通の家のように思えた。中に小型四輪トラックが一台入っていた。あんまり工場が小さくて、ちよつとがっかりだった。

「ただいまー」

おばさんが、大きな声でいうと、つなぎを着て、鼻の頭を油で黒くした五十歳くらいのおじさんが、車の下から這い出てきた。

「よく来てくれた。疲れたろう。今日は手伝いはいいから、身の回りのことをして、ゆつくり休みなさよ」

と喜んでくれた。おじさんも怖そうに見えないので、ほっとした。

そこは一階が工場で、二階が住居になっている。わたしは四畳半の部屋に入れてもらった。部屋の隅には、先に送った布団袋と衣類を入れた、リンゴ箱が置いてあった。

おばさんは、顔を見ながらいった。

「工場が小さいから、なかなか来てくれる人がいなくてね。来ても慣れないうちに、帰られてしまつて、手が足りなくて困つたのよ。よろしくね」

わたしは、しゃべるのは苦手なので、「はい」

とだけ喋って、ぺこりと頭を下げた。それなのに、にこにこして

「今日は、身の回りのことをしてちょうだい。なにか、入り用なものがあったら、遠慮しないで声をかけてね」と喋って、出て行った。

夕ご飯のとき、おじさんは上機嫌だった。

「これから自動車の世の中がくる。ここでしっかり腕を上げてから、好きなところに行けばいい。三年辛抱できたら、自動車の運転免許も取らせてやれるし、努力次第では整備士の資格だって取れるぞ」

「そういうこと、ご飯のときにしなくたってねー。慣れてから考えればいいのよね」

おばさんは、こういつて笑っている。いま、そんなこといわれても、さっぱりわからない。

郷里で自動車の持つてる家は一軒もなかった。漁協に三輪トラックが一台あるだけだ。だから、自動車を詳しく見たことなんてない。

わたしは機械いじりが好きだったので、就職先を、自動車整備の見習いを選んだのだった。こうなるのだったら、漁協の三輪車をよく見ておけばよかった。

働く人は、わたしの外にもいるだろうと思っていたら、おじさんと事務の仕事をするおばさんの、二人だけだった。あんまり少ないので、びっくりしたけど、しゃべることが苦手なわたしには、こういうところが合っていると、思いなおした。きつと、先生は働く人の少ないところの方が、わたしに合っていると思つて、ここを世話してくれたのだろう。

その夜は、疲れてるのに、目がさえてなかなか眠れなかった。級友たちのことなんか、絶対思い出さない、と決めてたけど駅で別れてからまだ四、五時間くらいしかたつていないのに、みんなのことが気になった。

それに父母やユタカが思い出された。広い砂浜が頭に甦つてきて、嫌いになったはずの運動会へと続いた。

眠れなかったのに、四時ころ目が覚めた。また不安になった。今日はどんなことが待っているのだろう。早く慣れないと。そんなことはばかり考えた。

布団に入つていられなくて、五時半に起きていった。

「あら、早いね。眠れたかい。朝ごはんは、七時ころだから、工場の中でも見ていたら」

おばさんが、びっくりしていた。

わたしは、工場の中をみた。家は漁師だったので、工具一つとっても、見なれないものばかりだった。

車の下をのぞくと、車の下に入ひとり入るくらいの幅の、細長い深い穴があった。両方に階段があつて、段の上にはスパナやドライバーなど、工具が散らばっていた。この下に入つて、車を修理するところらしい。初めて目にするものだ。

あとで聞いたのだが、おじさんのいうには、この車はマフラーを、取りかえるのだそうだ。なんだか襟巻みたいな名前だと思つたけど、黙つて聞いていた。なにをいわれても、カタカナのことばばかりで、一度や二度聞いても、ちんぷんかんぷんだった。カタカナのことばは、おばさんまで、普通に使つているので驚いた。

一日が終わると、体に堪えるようなことはなかったのに、ぐったり疲れた。

夕食が終わるとおじさんが、部屋にきた。自動車整備の本を、二冊持つていた。早速開いてみたけど、これまたカタカナのことばばかりで、かえつて疲れたみたい。工具の名前や、自動車の部品の名前を覚えなければ、手助けもできないと思つて、夜は布団の中で本を読んだ。

初めてすることはかなりで心配だったが、おじさんは丁寧に教えてくれるので、楽しいくらいだ。仕事をしていても、突然父母やユタカのことを思い出されて、涙が出るがあった。

そんなとき、おばさんは感じるのか「さみしくなれば空を見る。空にはいつも夢がある……」という歌を、小声で歌うのだった。きつと、わたしを励ましてくれてるのだと思う。

ようやく一年がたった。

部品や工具の名前を覚えるのに、四苦八苦してただけだったような気がする。

おじさんもおばさんも優しくかったので、なんとかやってこれたと思う。

いつも怒られていたら、きつとやめて帰りたいと思ったに違いない。工具や部品を自信をもって、取ってやれるようになったのは、一年半過ぎたころだった。

早いもので、三年が過ぎた。あつという間だったように思う。

おじさんが、十八歳になったからといって、自動車教習所のパンフレットをもらってきてくれた。見ると普通自動車で費用も5万円くらいかかるようだ。毎月三千円もらうだけなので、そんなお金なんてない。

「費用は心配しなくていいんだよ。三年間、辛抱できたご褒

美だと思ってくれ。それに運転免許は仕事にも必要だから。勉強して一回でパスできるように頑張りなさい」

おじさんがこういつてくれたので安心した。

手紙で「運転免許を取りに、自動車教習所に行っている」と、手紙に書いてやったら、母からの手紙に、「大勢、東京に行ってるけど、そんな話はどこからも、聞いたことがない。ほんとうに、いいところに就職できたと、父さんと喜んでる。体に気を付けて、しっかり頑張りなさい」と書いてあった。

それに、勤まらなくて家に帰ってきた人のことや、病気になるって帰ってきた人のことも書いてあって、みんな苦労しているということがわかった。同級生のことは、一ことも書いてなかった。

ここに来た頃は、カタカナのことに苦労したけど、交通法規は漢字がいっぱい出ていて、読めない字が多くて苦労した。漢字にはフリガナをつけて覚えた。

ひと月ほどして、試験を受けた。学科試験は通ったけど、まぐれで合格できたみたい。実地試験は、落ちた。隣りに試験官が乗ると、緊張してしまっ、いつものように、体が動かなかった。終わってほっとしたけど、受からなかったのは、エス字形コースで、後輪が縁石からはみ出てしまったのが原因のようだ。

二回目の試験で、受かった。顔写真のついた免許証をもらったときは、うれしくて泣いてしまった。

あと半年もすると、五年になる。ユタカも中学を卒業が近い。

母から、長い手紙が来た。知り合いの世話で、青森に引越すことに、ようやく決心したという。

ここには、ユタカを高校に進学させることはできないし、漁師をするしかない。だいぶ悩んだようだけど、わたしは引越しに賛成だった。

ユタカは、わたしも高校に行つてないからと、家で手伝いをするといつていたらしい。わたしは、これからは何をするにも、高校は出ておかなくてはダメだと、前に手紙に書いたので、やつと進学することに決めたようだ。

父母の働くところは上北鉾山というところで、父は坑内から出る残士の運搬の仕事、母は飯場の賄いをするそうだ。父は、ゆくゆくは坑内員として働くという。そうなれば、収入もよくなると書いてあった。慣れない仕事で大変だろうと思ふ。

鉾山は相当な山奥にあるらしい。それに豪雪地帯なので、冬は道路が不通になるという。ユタカは青森市内の知り合いの家に、下宿させてもらうことにしたという。

なんども手紙をもらっていたので、驚きはしなかったけど、五十歳近い父母は決心するまで、ずいぶんと悩んだことだろう。わたしは、郷里にはいやなことばかりだったので、これ

で郷里のことは忘れてもいいと思つていたけど、ホントのところ複雑だった。

ユタカの進学校は、工業高校の建築科だという。母はわたしを高校にも行かせることができなかったことが、気になつているようだった。

わたしは、ものをいわない子供だったし、勉強嫌いで、学校も休んでばかりだったので、高校進学なんて考えたこともなかった。だから、いま自動車整備や、交通法規を勉強するにも大変だった。

いまさらながら、勉強が大事だと身にしみてわかるので、ユタカが高校に行くことに大賛成した。

父母が上北に行つてから、三か月ほどたったころの母の手紙には、

「漁師は夜から夜まで、休む間もないくらい動き回っていたけど、いまはだいぶ体が楽になった。父さんも早く鉾山の仕事に慣れて、坑内に入れるようになれば収入も多くなるので、それに期待している」

こう書いていた。

ユタカが高校を卒業して、青森市内の建築会社に就職した。ある日のことだった。おじさんがいった。

「近々、整備士の講習会が開かれる。夜で苦労するけど、受講してみるかい。パンフレットは、後でもらつてきてやるか

ら」

「まだ覚えることが、いっぱいあるので……」

どう答えていいか戸惑ってしまった。言葉尻は濁ってしまった。運転免許を取らせてもらったし、なんだか甘え過ぎのようにも思えたのだった。

「整備の腕もだいぶ上がってきたし、実力を試してみる、いい機会だよ。なにより、資格は自分の財産だ。やってみなさい」

「タケシ君は、よくやってくれてるし、五年たったら自由にしてやろうって、お父さんと話してたんだよ。講習に行ったからって、いつまでもここにいるとは、いわないから頑張ってみなさい。よそに行くにしたって、資格がものをいう時代だから……。絶対資格が必要なんだから。講習が終わったら、整備士の試験の実技が免除になるのよね、お父さん」

おばさんが後押しをしてくれた。

「そうよ、講習が終わったら資格が手に入ったも同然さ。講習でも試験があるけどな。試験といっても、そこで習ったことをやるから、心配ないさ」

「悩んでないで、早く決めなさい。定員だってあるから。資格とったからって、お礼奉公しなさいなんて、絶対いわないから。それは、ほんとに大丈夫だからね」

ハラは決まっていた。でも、すぐ返事ができなかった。ぐずぐずするのは、子供のときと、なんにも変わっていない。

おばさんは、わたしがお礼奉公があるからと、勘違いしていると思つたのかな。

おじさんもおばさんも、五年たったら自由だといったけど、わたしがここをやめたらまた、新しい見習いを見つけるのだろうか。この家には息子が一人いて、なんかか會つたことがある。大学時代は、ラグビーをやっていたとかで、肩幅の広くがっしりした体つきをしている。今は大きな広告会社に勤めているそうだ。

おじさんが、いつかいつていた。

「ここは、おれの代でなくなっていくんだ。自分の息子も継がないものを、他人に継いでほしいなんて、いえないからな」  
「わたしたちは、タケシ君が一人前に、なってもらうのが、一番楽しみなのよね、ねえお父さん」

こんなことも耳にしている。ずいぶんよくしてもらっているの、なんだか寂しい気持ちになつてしまう。

ここに来るまでは、いつバカにされたり、意地悪されるかと、いつもドキドキしていた。

ここではそんな心配は全くないので、安心して仕事に集中できて、毎日楽しいくらいだ。

修理の車が混んでいる時は、終業の時間も関係なく、暗くなつても電灯をつけて作業を続けていると、おじさんが呆れて声をかける。

「この車は、まだ日があるから、もう終わらないかい」

「もう少しだけ」

と、続ける。終いには、おばさんまできて、

「タケシ君に、疲れられたら困るから、お願いだから、もう止めてちょうだい」

なんていわれることがある。一番遅いときで、夜中の一時過ぎまで、続けて、

「そんなに働かせたら、お父さんやお母さんに怒られてしまうから、もう終わりにして」

といわれたこともあるくらい、この仕事が好きだ。

もう十年の月日がたった。

整備士の資格も取って、なんとか一人前として故障した車を、任せられるようになっていく。修理も、おじさんには困ったときに、応援してもらおうくらいになっていく。

夕食の時だった。

「片づけが終わったら、話したいことがあるから」

おじさんが真面目な顔でいった。なんだろうと、居間に行った。

「実は、タケシにいい仕事を見つけてきた。自動車販売の会社で、サービス工場で働く整備士を探してる。その会社は、都内に支店がいくつもある大きな会社だ。その社長とは、若いとき、同じところでいっしょに働いた人でな、タケシのことを話したら、ぜひ会いたいといっていた。今度の金曜日

に行って、話だけでも聞いてみないか」

すぐに返事ができず、しばらく黙っていた。いつもこうだ、こういうことだけは身についてしまっている。

「心配してるんではよ、このこと。前にもいったことあるけど、ほんとうに大丈夫なのよ」

「タケシは、これからの人だから。五年の約束が十年にもなつてしまつて、すまなかつた」

こう、おじさんはいつてから、少し間があつて、ことばを続けた。

「販売会社は、これからますます繁盛する。タケシは腕があるんだし、怖いものはない。セールスマンにでもなれるさ。

あまりおしゃべりは得意じゃないみたいだけど、人当りがいいし、真面目で努力家だから、セールスやっても、きつと成功するよ。これからは、もつと自信をもつてやりなさい」

「そうだよ。あなたのような人に来てもらつて、わたしたちも助かつたと思つて、感謝してるのよ。だから、自分の子どもを送り出すような気持ちになつていいの」

おばさんは、こういって、目頭をふいている。なんだか、わたしが出ていくことが、もう決まつているような、口ぶりに聞こえた。

自動車会社のサービス工場で働くようになって、一年過ぎた頃であつた。

職場にも慣れ、ここならずともいい、と思つていた矢先だった。

サービスの課長に連れられて会議室に行くと、販売部の課長がいた。二人の課長と面談するなんて、なにことだろう。どきどきして椅子に座った。販売の課長が、わたしの顔を見ていった。

「急なことで悪いけど、来週から販売課に移つてくれないか」  
えつ、と声が出た。慌てて、サービスの課長を見た。べつに驚いた様子はない。販売課は、自動車のセールスが仕事だったので、びつくりして力が入つてもつたけど、一気にいつてしまった。

「コ、コノママ、セ、セイビヲ ヤラセテクダサイ」  
いい終つて、顔がほてつた。

二人の課長は、いい方にびつくりしたのか、どうした？という顔をしている。この時、わたしの記憶は、一瞬にして子供の時分にもどつていた。セールスなんか、できっこない。満足に他人と話もできない人が、自動車を売る仕事なんて、できるわけがない。心の中でこういつていた。

販売課長は、  
「いいかい。わかっていると思うけど、この会社は自動車を売つて、成り立っている会社なんだ。ほら、工場の看板にだつて『サービス工場』と書いてあるように、工場はあくまでも、車を買つてくれた人へのサービスなんだ。サービスも、

うまくいかななくては、車を買つてくれた人も、安心できないのは当たり前だけど、君にはセールスをやつてもらいたい。社長から、君のことは聞いている。子どもるとき、話すのが苦手だったそうだけど、人生は長いんだ。この仕事で自分を乗り越える、いいチャンスだと思つてやつてくれ。これはサービスの課長と、相談してのことだから」

その課長は、にこやかに頷いている。こういわれて、工場のおじさんやおばさんに、いわれたことを思い出した。できたら決める前に、相談に行きたいと思つた。でも、あまりにも急でそんな余裕もない。

おぜん立ては出来ていて、簡単に断ることもできない。それでも、「わたしにはできません」と、口から出てしまひそうだった。これじゃ、会社を辞めるよりないな。こういう気持ちになつていた。

サービスの課長がいつた。  
「ベテランのセールスについて、三か月勉強してからということだから、やつてみなさい。松山君はきつと、いいセールスになれると思うよ。見込みのある人には、いろいろな仕事をしてもらうのが、会社の方針でもあるんだ」

ドモリは子供のときより、よくなつてるとはいえ、いままでも工場では、あまりしゃべらないようにしてきた。整備士の資格も取つて、これから先のこととも考えられるようになってきていたのに、これはとんでもないことになつてしまった。

つぎの日の工場の朝礼だった。課長が、

「松山君、ここへ」

前に出るよう手で合図した。ドキンとして迷いながら、進み出た。

「松山君は、来週の月曜日から、販売課に異動になります」

まだ、返事をしたつもりがなかった。わたしの心は、まだ定まっていない。いまになっても、限りなくセールスはやりたくないに傾いている。それでも駄目なら、会社を辞めるかも……。

「なにかひと」と

課長がいった。ここで、なにかいわなくちゃならないのか。

みんなの前で、販売課に行けと宣告されても、まだ迷っている。それでも、なにかいわなくてはならないのか。逃げるこゝとができるなら、どこかに消えてしまいたい。焦った。辞めるか、会社の方針に従うか。

中学を卒業し、漁師か就職かの選択も迷ったけど、どんな仕事に就くかは、あまり悩まなかった。いま考えるとあの時は、あまりにも知ることが少なすぎて、選ぶものとは思いつかなかった。

口から出たことばは、こうだった。

「タ、タイヘン オセワニナリマシタ。カ、カ、カイシヤラ ヤメルノデモナイシ、マ、マタ モドツテクルカモ ワカリ

マセン。イママデドオリ、ヨロシク オネガイシマス」

いつてる途中で、小さな笑い声が出て、すぐおさまった。おかしいことをいったらいい。いい終わって、急に顔がほてった。なにをいったのかわからない。もしかしたら、会社を辞めるなんていわなかったか、気になった。

朝会が終わると、整備班の先輩が不思議そうにいった。

「それで悩んでいたのか。昨日、課長に呼ばれたろう。その後、松山の様子がおかしいと思ってたんだ。セールスは、自分から希望してたのかい」

「とんでもありません。セールスは、一番 わたしの、できそうもないことだと思ってました」

(ゆっくり、すらすらいえて、ほつとした)

「またまた、セールスは、油だらけにならないだけでも、いいだろう」

わかってもらえそうもないので、先輩にだけはと意を決して、子どもの頃ひどいドモリだったことを話した。

「そんなには見えなかったけどな。ただ、口数の少ないやつだとは、思ってたよ」

と笑った。

寮に帰ると、販売部に移動する挨拶までしたのに、まだどうしたらいいか悩んだ。「また、ぐずぐず悩んでる」と母の声が届いた。あんな気がしたら、同級生の顔も浮かんできた。セールスマンになったらあいつら、もう意地悪したりできない

いだらうと思つたら、ちよつぱりだけど、誇らしい気持ちでした。

その時だった、廊下で大きな声がした。

「松山、夕飯残つてるー。おばさん困つてるぞー」

忘れていた。慌てて食堂に急いだ。残つてる人はだれもない。わたしの配膳だけ、テーブルの上にぼつんと残つていた。

わたしにセールスが勤まつたら、二十数年かかえてきた、ドモリから解放されるかもしれない。でも、それはあり得ないことだ。また、考えが元に戻っているのがわかつて、ひとりで笑つてしまつた。

月曜日、販売課に出勤した。どうにでもなれという心境だった。

中年の八木さんという、ベテランのセールスにつくことになった。会社が一番の売れ筋は、小型四輪トラックだった。

セールスのことばで、「買う可能性のあるお客」のことを「脈がある」というらしい。

八木さんについて最初に行ったのは、大きな果物の問屋だった。まだ朝の九時半ころだったが、もう他社のセールスがきていた。それで、「じゃ、また」といって、店を出た。

もうそこには、しばらく行かないと思つてたら、そこらの一角を回つて行くと、もう違う会社のセールスが来ていた。

どこの社も、すきを狙っているのだ。

その日は五回も同じところに行った。三回目ときは、主人がにかけてしまつていて、一度も自動車の話をする事ができなかった。脈がある、と狙いをつけているだけに、力が入っているのがわかつた。それは他社にとつても同じだった。八木さんの話だと、その問屋には車が数十台もあるらしく、話がまとまつたら、一度に十台は確実だという。どの社も力が入るわけだ。

それから、あちこち歩いたが、感触のいいところもあつたが、初日は一件も契約成立とはいかなかつた。

夕方会社にもどつても、八木さんは電話を入れて、夜に行つてみるといつていた。

わたしは一日で疲れて、足腰が痛くなつた。寮に帰ると、すぐ風呂に入つて、夕食後すぐ布団に入った。いまごろ、八木さんは商談をしているだろうか。

たつた一日で、これはわたしにできる仕事ではないと悟つたけど、会社を辞める以外どうなるものでもない。わたしの弱い頭でも、それがわかつた。

朝の打ち合わせは、それぞれのセールスから状況の簡単な報告があつた。他社との競争もあつて、ここでも大変さがわかつた。

見習いを終えたばかりだという、若い野田さんが小型トラ

ツクを一台の契約をとって、みんなから祝福のことはがあった。ところが、課長は契約をとったことはよし、としながらも

機嫌が悪い。

「いいか、野田君、車は一台七、八十万円するからといって、簡単に三万円値引きしたらどうなる。君は弁当を持ってきて、一か月給料をいくらもらっている？すぐ値引きといかないで、お客の欲しそうなものを、サービスとして付けたらどうだ。品物の定価は一万円しても、原価は五千円だったら、会社としては、差し引き五千円ですむ。これから、そういうことも頭に入れて、セールスしないとだめだな」  
なるほどと思った。

それから、野田さんは朝会で毎日のように、課長に怒られているようで気の毒だった。

「あれは、野田さんだけにいつてるのじゃなくて、みんなにいつてるんだ。課長は野田さんが悪く取らないように、前もって断っていつてるはずだよ」

八木さんが教えてくれた。

ようやく一週間が終わった。課長が

「松山君、少しは慣れたかい」

声をかけてきた。

「どうも、この仕事、わたしにはとても出来そうもありません」

「まだ、やってもみないで弱音吐くんじやない。サービスの課長からも推薦あったんだぞ。きつといいセールスマンになれるって。自動車のこともよく知ってることも、セールスには強みだ。そういうことも、まだなんにも生かして無いじゃないか。簡単にできないなんていわない。わかった！」

一蹴された。評価はありがたいが、買いかぶりのような気がする。第一わたしは他人と話す自信なんてない。もつとも苦手とすることだ。

それから、二、三日してのことだった。席についてると、「松山君」と、課長が手招きした。また怒られるのかと思った。

「わたしは高校出て、すぐこの会社に入った。半年くらいサービス工場で、車のことを勉強させられたんだ。それから、セールスに回った。その頃、すぐ腕のセールスもいたけど、そういう人は長続きはしなかった。この仕事はお客さんを大事に、誠実にやるしかない。先が長いからね。うまくやりすぎて信用されなくなったら、お終いなんだ」

課長の話の終いの方は、呟きに変っていた。いわれてみて、課長のいう通りだと思った。わたしは情けないけど、いつだって消極的だったし、やってみようという元気が湧いてこないのも事実だ。

ここでセールスもできずに諦めたら、一生ドモリだったことを引きずって、うじうじした生き方をしてしまうだろう。なんとかしなくては。

いつか、偶然にも、同級生に会うことがあるかも知れない。その時は、自動車のセールスマンをしているといったら、どんな顔をするだろうと思つたら、おかしくてひとりで笑つてしまった。しばらくぶりに、自分らしくないことを考えてしまい、いい気分で眠りについた。

难道か上北に行ったことがある。初めて行ったときには、ひどい山の中だと思つた。車が一台通るくらい道の道があつて、こんなところに人が住んでいるのかと思つたくらいだ。

仕事をやめてからの父母は、ユタカの家近くにアパートを借りて、暮らしている。父母は鉾山に約十五年余り勤めたことになる。この時、父は六十歳を少し超えていた。

わたしは独り身なので、お盆休みや正月に帰るたびに必ず、嫁を貰えといわれた。そこまではよかったが、父母は「おまえが一人暮らしなら、安心して死ぬこともできない」とまでいわれて、困つてしまった。

わたしは独身主義ではないが、女性には縁がなかった。これも子供の頃のドモリが影響しているように思う。特に中学生の頃は、女の子と一緒にやるバスケットボールやバレーボールはやらなかった。男と違つて、バカにはしないが、なんらかでひそひそいつて笑うので、かえつて堪えることがある。それで、自分から近づけなかった。それが、ずっと続いている。

あれから、セールスを三十数年。そこそこの成績を残せたのは、工場のおじさんおばさん、自動車会社の先輩たちのおかげだと思つている。

いままでマイナスとばかり考えてきたことが、度胸なしのわたしには、良い結果をもたらしてくれたような気がする。「あの出来事」も無駄ではなかった。おかげで今の自分がある。

こう考えたとき、いままで心に刺さつていたトゲが、抜け落ちたような感触があつた。これでようやく、半世紀以上も背負つてきた、重い荷物を下ろせるような気がする。

意識の中から、砂浜を消してしまふことなんて、出来たことなかつたのだ。危うく故郷まで失つてしまふところだった。

ながめていた海原が、砂浜に変わつて運動会が現れた。

空をつん割くような音の花火が上がつて、いよいよ運動会開始だ。気分も最高。杭を打ち、わら縄を張つて作つた走路。大漁旗のはためく音と大歓声。会場をぐるりと囲んだ、高床式の観覧小屋。会場の真ん中に立てた柱から、四方八方へと張られたロープに、はためく大漁旗。意欲をかきたてる音楽。そして、スタート合図の笛や号砲の音。

やっぱり、わたしは砂浜の運動会が好きだ。だれになんといわれようが、日本中探しても、ここだけの運動会が大好き

だ。

ここに砂浜があつて、運動会をしたことなど、知つてゐる人は、少ないだろう。砂浜が跡形もなく消えてしまつたように、やがて忘れられてしまつたろう。

わたしが、ここが好きないように、父母もユタカも、ここが好きだつたのではないだろうか。漁があつて生活ができたなら、ここに住んでたかもしれない。上北の生活は幸せだつたのだろうか。

その父母も、二十年も前に亡くなつた。わたしより若いユタカも、肺がんで二年前に亡くなつた。ユタカを思い出すと、ベッドで苦しそうな顔がうかんでくる。

ここに來れたおかげで、ほんとのユタカに会えたような気がする。

ユタカは、またなぎさに向かい、こんどは歩きながら石を拾つて、海に投げた。

石は水面を撥ねもせず消えた。たて続けに三つほど投げたが、やっぱり同じだつた。

「へたつぺ。こうやるもんだ、見てろ」

わたしはやりわり立ち上がつて、歩きながら小石を拾つて投げた。石は三回ほど跳ねてから、水面を転がるようにして消えた。

「すげえ、兄ちゃん。なんかい撥ねたか数えられねーよ」

ユタカがわたしのことを、「兄ちゃん」と呼ぶときは、機嫌のいい時だ。それでも、悔しいのだろう。なん回も投げている。力めば力むほど、石は一回もはねずに、海に吸い込まれてしまふ。また、ユタカの負けず嫌いが始まつた。

わたしは、黙つて笑つてゐる。

「こんど、投げ方教えるよ」

人前ではなにもいえなくても、ユタカといるときは、自分でも不思議なほど、気持ちが楽で、なんでも話すことができた。

「お天道さん真上だ。母さん、探しにきたらまた、怒られる

」

ユタカが叫んだ。

ゴメの足 ほせねで

おらの足 ほせろ

いつまでも、うたは続いている。

ドラマー

日 高 光

『母さん。俺は頑張つて暮しています。もうすぐメジャーなバンドからお呼びが来る予定です。少ないけどお金を送ります。母さん元気でいて下さい』

普通の白い封筒に入った五枚の一万円札は、しわが寄り、いかにも財布の中にあつたようだった。増田良子は、その紙幣をじっと見ながら三年間の葛藤を思い出して、それはそれは、胸がかき乱れるほど苦しい日々だった。

「お客さん、どこから来られたんですか？」

良子は可愛らしい小型の七輪の底に置いてある固形燃料に、長いライターで火を点ける。すると網の上にあつたアワビが苦しそうに激しく動き出した。まるで蓑をまとつて火をかけられ叫ぶキリシタンのように、アワビは踊り狂うのだ。

長野県から来たというカップルは、そのアワビの動きに目を丸くしながら、動きを止めていた。

「うわあ、すごい。ちよつと残酷ね。アワビつて初めて」「そうですね。これは高級品ですので柔らかいって板長さ

んが言つてましたよ」

やがてアワビは息絶え、その動きを止めた。香ばしい磯の香が漂い、周りの肉や野菜も焼けている。二〇代くらいの若い女の子がナイフでアワビを切り、口に運び、納得の表情を見せゆつくりと呟いた。

「お〜いしい。北海道に来てよかつた」

「そうですね。良かつたですね。今年の函館は雪が少ないんで助かつてます」

ピンクの作務衣に紺の和風エプロン。ベテラン仲居の良子の举措はまったく無駄がない。今日も旅館内は満室で、各部屋は宴会が始まつていた。

「お飲み物はよろしかつたですか？」

ビールや酒をすすめて旅館の儲けを増やすことも忘れない。函館の良いところを教えて

恋人らしき中年の男が良子の背中越しに聞く。

「これから夜景を観にいらつしやるのですか？」

「そうだね。外は寒そうだけど」

「タクシーか、ロープウエーですね。今日は天気が良いか

らきれいに見えると思いますよ」

「行きたい、行きたい。絶対観たいわ」

「そうだな」

男はビールを美味そうに流し込みながら、新鮮なマグロに醬油をつけた。

「この魚介類は新鮮だね。長野にはこんなのかなかな」

「イカも透明なのね。私ポイルしたイカしか食べたことないから」

「生簀（いけす）があつて、殺したてなんです。死後硬直は始まっていますから、お早めに召し上がってください」

「あはは。仲居さん、面白いこと言うなあ。死にたてね」

「飛行機でこちらに？」

「いえいえ。新幹線を乗り継いだの。大宮で乗り換えしたんです」

「北海道新幹線はどんなものかと思つてね。あと明日観るところつてどう？」

「うくん。朝市ですか。あと港の辺りの赤煉瓦倉庫街とか、元町の教会とか、公会堂。五稜郭公園も人気ですけど」

「そうか。じゃ、八時にタクシー呼んでくれない？夜景に行くよ」

良子はわかりましたとにこやかに返事すると、早々に退散した。いかにもお邪魔な雰囲気は漂ってきたからだ。

良子はフロントにタクシーの連絡をして、次の部屋に行く。

く。こちらは四人のベテランおやじ軍団だ。

「お飲み物、何宜しいでしょう？」

「酒は何あんの？」

「男山と北の誉れと千歳鶴と言う地酒がありますけど」

「ああ、北の誉れは知ってる。その熱燗で。ウイスキーはある？」

「ニツカのシングルモルトが人気ですけど」

「あ、そうだよな。ここはニツカなんだ、ほらマツサンだつぺ」

「あ、んだつぺなあ。それぞれ。シングルモルト」

おやじたちは五〇代か、ビールもたいぶ飲んで顔は緩み、上気して目元は赤くはれている。

良子が酒を運んでくると、見事に禿げ上がった小太りのおやじが言った。

「あなた、いい女だな」

単刀直入な言葉に、一同一瞬目を点にしながら、本音が出たねと大笑い。良子は四〇代の中年女だが、目鼻立ちがくつきりした美人で、この旅館でも人気の仲居だった。

とたんにおやじたちの目つきが変わってくる。

「旦那いるの？」

それには答えない。

「バツイチかあ？子供はいるの？」

おやじたちがしつこい。良子は軽くあしらいながら酒を

注いでいく。

「函館にもいい女がいんだな」

いやらしい目つきで浴衣姿のおやじがお猪口を良子から奪って、あんたも一口と注ごうとする。

「私は仕事中ですから」

必死に拒否すると、周りが楽しそうにからかう。

「函館のあっち系ってどこにあんの？」

あっち系ですか？札幌と違つてあっち系はあんまり。

「またまたあ。あんだる。函館だつて。隠さないで教えてくんろ」

「あんたでもOKだよ」

四人は完全に語尾の上がつた北関東訛りで言葉攻撃だ。

それを慣れた感じで良子は見事にあしらう。

「後で聞いときますから」

どんな時でも笑顔は忘れない。嫌な客でも客は客。それに徹すれば、この仕事も長持ちするのだ。良子はさつさと次の部屋に退散していった。

今日も忙しい日だった。疲れ果てて軽四から降りた良子がアパートの部屋に帰るが、息子の敦はいない。

またどっかに行つてる。

息子の敦は高校生で、ハンドボール部に所属していた。小学校の頃、まだ良子が離婚してない頃から始めて、天

性のバネと運動神経で中学でも活躍し全国大会に出ている。高校は地元でハンドが強いところから特待生で引つ張られた。勉強はまるでしないから、成績はいつも下から数えた方がよいレベルだ。

暗い部屋に灯りを点けると、テーブルの上にカレーライスとコロッケの食べたあとの皿が無造作に置いてあつた。カレーは冷凍したのをレンジで解凍し、コロッケは出来合いのものを冷蔵庫で冷やしていたものだ。部活から帰つてきて、食べてまたどっかに行つた後らしい。

居間に学生服やズボンが散乱している。カバンもそこいらに転がっている。きつといつものバンド仲間のところに行つたに違いなかつた。

夏の暑さが部屋にこもり、敦の男臭い汗の匂いもそこに溜まつていた。良子は窓を開け、その熱気を逃がそうとしたが、外気の暑さが逆に入り込むような真夏の夜だった。

その晩は函館では珍しく熱帯夜で、ねっとり良子の肌を熱がなめるようにまとわりつく。クーラーもないこのアパートでは、暑さに耐えるしかない。

ふと見ると携帯にメールが届いていた。開けると金曜の晩あいてる？とあつた。

旅館の板長だ。良子より一〇も年下で既婚者のくせに、バツイチの良子にすり寄つてきて春からこっそり付き合つていた。

週に一度、二人とも仕事を終わってから人目を忍んで郊外のホテルに行くのが続いていた。

良子は台所で洗ひ物をしながら、洗濯機を回す。明日も朝は早く、六時までに旅館に着かなければいけない。こんな毎日がもう五年。夫の笠高益男が失踪してから三年経つのだ。

益男は街の繁華街で焼き鳥屋をやっていた。一時調子が良い時もあったが、景気が悪化して客が減り、閑古鳥が鳴くようになっていった。良子は忙しい時には焼き鳥屋と一緒に手伝っていたが、暇になって赤字を補うするために旅館の仲居で働き出したのだ。そのあと、焼き鳥屋に若いスナックのママさんが常連になって、益男と惚れ合ってしまったことは、良子はまったく気が付いていなかった。

繁華街は家賃が高い。かなりのお客を抱えないとやってはいけないのだ。赤字は膨らみ、それを補うために材料の質を落とし、余計に評判を下げ客を減らす。そんな悪循環がこの焼き鳥屋を客を遠ざける店にしていたのだった。

三年前の秋の日、忽然と夫は姿をくらました。良子が旅館から帰って、いつものように家の片づけをし、洗濯をし、テレビを見ながら今日のお客を思い出していた。嫌な客、面白い客、静かな客、いろいろな人が旅館に来ては旅を楽しむ。

深夜の十二時を超え、益男がいつもは帰ってくる時刻だがその日は帰ってこなかった。良子は明日も早いので布団に入って寝ていたが、眼が勝手に覚め、暗がり眼を凝らし、時計を見ると四時。隣の布団にいつも鼾をかいている夫が居なかった。

慌てて良子は夫の携帯に電話を入れたが、着信拒否されていた。

どうしたんだろ。

その時初めて分かったのだ。夫婦のすれ違いが、どうしようもないくらいにお互いの気持ちに亀裂を生んでいて、ついには夫婦という細胞が分裂する寸前であったことを。

朝六時には旅館に着き、昼一時に帰ってくる。家の仕事と夕食の支度を手早く終えて、少しの仮眠をとる。夕方四時から十時まで旅館で働く。夫は昼には起きて仕込みに店に出るが、その頃はまた良子は帰ってこない。夜は十二時頃夫は帰宅、良子は朝早いのでぐっすか寝ているのだった。ぎりぎりでもすれ違っていた。そんな生活が二年も続くと、夫益男も、夫婦とはなんぞやと疑心暗鬼になっていた。

そして子供も同じように放っておかれたから、敦はまったく勉強しない、好きな運動だけやる子供に成長していた。

雑誌が椅子や座布団の上に置かれ、鈍い音を立てている。読み終わった少年ジャンプやマガジンだ。ステイックが正確に雑誌を打ち、腕が軽快に振れている。さすがハンドボールで毎日毎日鍛えている腕だ。

その横には仲間の清川健がベースを弾いている。中学校からの友人でバイトバイトの高校生活だ。同じ高校に通っているが、クラスが違い、いつも夜にここでおち会う。むちやくちや明るい性格で常に喋っていないければ済まないタイプだ。煙草を啜え、缶ビールを美味そうに喉に流し込んでいる。バイト先の女の子と良い仲になって、だいたいこのことは知ってしまったていた。

むかえには近藤康弘がギターを弾いている。高校で知り合った友で、顔の偏差値は優に七〇を越しているだろう。イーグルスのコピーにはまっついていて、そのテクニクは学校いちだ。こいつも啜え煙草から煙が天井に伸びている。そしてボーカルは不良の前田浩一。学校一のワルで、停学二回。三回目はもうないと言われているが毎日の生活は校則違反だらけだった。

こんな四人がウマが合うのか毎晩浩一の部屋に集まっては、練習に勤しんでいた。もちろん大きな音は立てられない。ギターやベースはアンプのスイッチを切り、ドラムも漫画雑誌だ。ボーカルの声も小さく、遠慮して歌う。何し

る浩二は大の不良だが、母ちゃんが苦手が一番恐ろしい。先生よりも母ちゃんが怒るのが一番苦手だった。

「今度のライブ、頑張るべな」

リーダーの浩二が叱咤激励する。実は前回、演奏がミスだらけでグダグダになっていたのだ。何とか誤魔化したのが、バンドマンとしては悔いの残る演奏だった。

「敦、全国行くんだべ。八月だっけ。ライブ九月だからな。今度は完璧にすつべ」

「わかっつてっけど。金がなくてな」

敦はドラムを持っていない。練習はライブ会場の裏にある練習場をお金を出して借りるのだ。一時間二二〇〇円。大きな出費だった。

「そろそろ帰つかな」敦があくびと共に煙も吐き散らしながら言った。

「あさってから試験だっけ？」やる気もないのに気にする浩一。

「んだ。俺、進路どうすつかなあ」ギターのイケメン近藤が小さな声でつぶやく。

「康弘はさ、ホストにでもなんでもなれるべえ。いいよなあ」羨ましがる清川。

「バカ野郎。俺だつてまともなこと考えてんだよ」

「まともなことつて？」清川が突っ込む。

「やっぱ、美容師かな」

「俺、調理師になるぞ。すし職人とかいんでねえ？」清川は生き生きと顔を輝かせた。

「オメエに務まるかよ。最高に厳しいつてよ」浩二は兄貴みたいにかええ。

「んじや、だめか」

「リーダーは？」

「俺か。何になつたらいいと思う？」

「ヤクザ」

「オレオレ詐欺師」

「殺し屋」

「碌な仕事じゃねえなあ。そんなイメージかよ、俺」

「そう。そんなイメージ」

リーダーも一服しながら、缶酎ハイをあおる。

「でも、翔子、どうすんね」

「んだよな。責任とんなきやなあ」

翔子とは、リーダーの彼女で妊娠五か月だ。このまま逃げ出すわけにはいかなくなっていた。なにしろ祥子の親は市内では有名な暴力団の幹部なだけに、責任放棄は死を意味するかもしれない。

「てことは、やっぱヤクザか」

「俺ほんとはまともになりてえ。平和に暮らしてえ」

「よく言うわ。さんざん暴れてきて。中学の廊下バイクで走るやつつていねえし」

「敦はどうすんだ？」

「東京に出たい」

「東京か。んで、どうすんの」

「ドラマーになりてえ」

「まじ？簡単になねえべえ。いっぺえ上手い奴いんでねえの？」

「だからチャレンジしてえんだ。ダメだったら帰つてくる」

「夢持つべ」清川がしたり顔で言う。

「んだな。リーダー、ヤクザ。康弘ホスト。俺ドラマー。」

健は？」

「俺？俺はとび職でいい」

「決まったな。みんな夢持つべ。んで、バンド解散して」

も、音楽だけはやつてるべ、なっ」

敦は、とぼとぼと星にじろじろ見られながら帰っていった。たくさんの星が、早く家に帰れ、高校生の時間じゃねえぞと説教しているようだった。

アパートに着くと十一時半。母さんはもう寝ている。昨日も今日も、明日も明後日も、授業があるうが、試験があるうが、帰ってくるのはこの時間帯だ。

一学期末の、保護者会の三者面談がやってきた。

「敦は、どうしたいんだ？」

角刈りのヤクザ風な先生が、額に汗を浮かべて聞いていく。この教室の午後は、ねっとり暑く、遠くに島のように浮かぶ函館山が、今日は青空にくっきりと深い緑で映えて見える。大きな雲が悠然と夏空を渡っていく。

「先生。俺、東京に出たいんです」

絞り出すような敦の声に、良子の表情が変わる。明らかに動揺の色を見せていた。

「あんた・・・、ここで働くって昨日言ってたよね」

語気がきつい。敦の眼を睨んで、詰るように言葉をかぶせた。

「だけど俺、やっぱりドラマーになりたいんだ」

「はあ？何言ってるの。どうやって食べていくんだい」

角刈り先生は、目の前で起こっている親子の言い争いに少々困惑している。

「あのお母さん。よく話し合ってたんじゃないんですか？」

「はい。昨日遅くまで話し合ってた、就職をお願いしようって」

言葉は丁寧だが、表情は怒ったまんまだ。

「だけど。やっぱり俺、ドラマーになりたい」

「バカ言ってるんじゃないの。音楽なんて趣味でやってればいいの。どうすんの」

いや・・・。

こんなやり取りがしばらく続いた。

「お母さん、やっぱり親子で考えを決めてからでないと、話し合う意味がないような気がするんですが。一応言っとくと、音楽で食べていくのは大変です。でも無理かどうかはわかりません。私の卒業生で、今アメリカのカリフォルニアでドラマーやっているのがあるんです。やる気次第かもしれない。ただ、お母さん一人残して東京に行くということは、やっぱり寂しいだろうし、そのあたりをどう考えるか、よくよくもう一回話し合ってもらえますか？就職は、厳しい部活で頑張っていたんで、スタンドとか介護とかならあると思いますけど」

その日の面談は一〇分で散会となった。話しようがないのだった。

事件は次の日起こった。

敦が居なくなったのだ。保護者会の晩、家で母子は猛烈に議論をぶつけ合った。唾をお互いに掛け合うくらい、まさに口角泡を飛ばすというくらいの言い合いだった。

そして敦は脱走したのだ。母良子が寝静まった朝方四時、寝付かれない敦はベッドからがはっと起き上がり、Tシャツとジーンズに着替え、財布を持って部屋を出た。そして居間にある箆の引き出しをそっと開け、そこにあった一万円札四枚を握って、音も立てずに消えたのだ。

良子は一時間後に起床して、朝ごはんの目玉焼きを焼き、

五時半にアパートを出た。学校から、今日は休みですかと角刈り担任から呑気な声で連絡があった時は、旅館の部屋の清掃中だった。

「あれ、学校行ってなかったですか。すみません、連絡します」

良子は携帯で敦にメールを送ったが、返ってこない。またサボったなと思いつつも、仕事を途中でやめるわけにはいかず、昼過ぎまでメールを送りながら働いていた。

十二時を超えて良子がアパートに帰ってきたが、敦の姿はなく、自転車もない。

またサボったな。誰のうちにしげこんでんの。良子はバンド仲間の三人に連絡を入れたが誰も出ない。

「ったく。どこで油売ってんの。」

良子は夕方になると、また忙しく旅館で働いていた。

ところがその晩敦は帰ってこなかったのだ。さすがに眠れない良子は、ハンドボール部員やバンド仲間、中学校や高校の友達に連絡しまくったがどこにも行っていなかった。

敦は消えたのだ。  
良子は警察に捜索願を出した。

三年の月日が経っていた。

突然の失踪。夫も失踪、息子も失踪。

良子は血は争えないと呆れるしかなかった。警察に届け

たが、埒が明かない。函館中探し回ったが、どこにも居なかった。恐らく行きたがっていた東京だろう。

しかし如何せん大都会東京での人探しは不可能に近かった。良子は休みをもらおうと東京に行った。昼の人口は三〇〇〇万という大都会、修学旅行でしか行ったことがなかつた良子は、右往左往しながら大都会を彷徨った。まずドラム関係を担当しようと御茶ノ水の楽器屋や音楽の専門学校や音楽事務所を回ったが、消息は杳として知れなかった。

二回目からは彼女は駅に立った。  
恥ずかしいなんか言っていられなかった。母親の意地だったのだ。

拡大した写真を持って、この若者を見た人はいませんか、何時間も立ち尽くした。母親の執念が息子に会わせてくれるかもしれないと、一縷の望みに賭けたのだった。

新宿駅、上野駅、東京駅、原宿駅、渋谷駅、そして池袋駅。

物凄い人々の川の流れが無表情に良子を通り過ぎる。一様に拡大写真を一瞥するが、まったく反応はなかった。三年の間に十回も東京に行ったが、結局ナシのつぶてだった。良子は憔悴し、体重は激減、気力だけで生きていく人生になつていたその矢先に、あの封筒が届いたのだ。

差出人の住所や電話番号は書かれていなかった。でも、生きていた。

良子はさめざめと涙を流した。

何回も東京に行つて良かった、無駄にはならなかつた。

これできつと連絡をよこしてくれるに違いない。今はしづ  
らいかもしれないけれど、きつと。

良子が敦の姿を確認したのは、その三か月後、テレビの  
歌番組の画面の奥だつた。

了

眠り盗人

ホン イー チェン  
洪逸辰

余は鳥人だ。

四六時中鉛筆を握っている。灰色と青色と混じっている町筋に徘徊する時、僅々一本の鉛筆で充分だ。左手で握って、右手は自分で壁を撫でながら、逆行したいと言っていた。破裂しそうなほど巨大な頭を持つている。この頭は思考することを楽しんで、堪能なものだ。頸のところに絶えず水が湧き出ている。他人は汗だと思つが、実際には多くの馬が飛ぶように勢いよく慕進している余の思惟だ。身体が真白で、透明に近付けば近付くほど世界と益々融合し、万物を微細に知覚することが出来る。余は鳥人だ。

余には睡眠が不要だ。昼間に佇立んで一方的に観察している。偶にぴかぴかに光つて、ぱちぱちと瞬いた眼で、通り掛かった伴侶や、空を飛んだ白い鳩たちを覗いている。夜間のみ出没する。既視感の様な毎日に、時々通りすがった車の機関の叫びの他には、殆ど無人な街路を散歩している。

午前3時は、最も寂靜な時刻だ。今、道筋はヒールや革靴が足早に歩いて、コツコツと音をしている。そちらに、頭の真上に苗が芽生えており、葉脈が判切見えて莫大な葉が体に重なり被

さつている草人や、首の周りに朽葉色の鬚が生えている獅人や、偉そうに首を差し伸ばし、歩きぶりが上品で、雪白の柔毛を持った猫人や、様々独特な人種が彷徨っている。彼らは目を瞠っているが、目の色が漆黑で、些かも光つてない。好奇心に駆られて、我無洒落に猫人の傍に近寄り、じつと瞳を見澄ました。瞳の中に誰かが住んでいるのか、或いは視線が地心を突き刺せるほど鋭いのかと思つてる余は、意識が朦朧として、思惟が放流のように、頸から猫人の足元に滲み出した。猫人は転んで頭を打った。

何てこつた！痛いなあ、まだ転んじまったと言っている猫人の声は澄み透っていた。口の周りの白い髭が汚れて、髭の末端が泥水に垂れている。

街路を巡って、一人一人具に観察する。獅人は羽根のペンを耳の後ろに差して、響めつ面をして、独り呟いている。草人は多肉の葉を着て、大層厚く見えるが、身体を丸め、寒いと呟いている。彼等は個々人が水切りされた瑠璃瓶の様に的礫と透明だが、水の屈折がなくて、露も潤いがないんだ。

嗚呼、彼等よ、眠りを悉く掬め取られ、痛々しい人々だ。



睡眠は崖端に屹立している修道院に在る修道女の願いの様に、純粹で静謐なものでしよう……」鼠人が律義に余の問いに答えている間に、余はどうしたらその眠りを見つつけられるかと心密かに考えていた。若し、その眠りが本当に岩礁のセイレーンの歌声の様に美しいなら、轟轟されても、愉悅の選択かもしれないからだ。分かりました。ありがと……ございました。では、「鼠人に礼を言つて辞去しようとしたが、応えはなかった。相手の瞳は惚けてもやつていて、狂つた科学者の様に絶え間なくむにやむにやと言葉を濁している。

店長にサンドウィッチと牛乳を注文した。暫く眠りのことは忘れ、今は先に腹を満たすべきなのだ。サンドウィッチの麵麴は白い草原の様に柔らかく、優しい姿を見せる。中の黄身は潤い、初生の様に緻密な素地だ。渦巻きの様にほかほかとするミルクと口腔で混じつて、食道に流れて、胃で消化して、血液の細胞と融合して、大脳を活性化した。空腹によつて機能不全に陥つた頭は甦り、いつか止まつた頸の水も流れて、白妙のペガサスは鳥みたいな漆黒の翼がついてるとか、七色の花が鹿の角に繁茂しているとか、想像力を自由奔放にした。

従つて、余は、数億以上の夢を秘め、真白な枕を探す道を始めた。

存在しているはずだ。どの枕にも無限の分かれ道がある。人々は眠りに率いられて、夢の道に入る。但し、鳥人の余は睡眠が不

要だから、眠り」自体が理解不能だ。

そこで、セメントの空き地に石で長方形の枕を画いた。蛇の鱗を数える様にして、徐に細かく白い色を付けている。枕がアルビノの蛇の様になるに至つて、余は慎重に臥せて、掌を太陽の方に向ける。次いで臉を閉じ、光と闇とを險で区切つて、水面に苔が盛んに生えている沼沢地の様に平静を保つ。

いったい何故人間はこんな休憩が必要なのか。余にとつては、ただ余計で無駄なことだ。

ギーヨーギーヨー」突如として東の五キロ以外のところから、鴉の様な嘔りが響いてきた。余に向かつて、明確飛んで来ることが分かっているのだ。感覚が急に五百倍に上がった。バタバタとして、羽ばたいて、頤頤している音のみならず、相手の心臓の鼓動さえも耳の近くの様に聞こえた。青息吐息が急いで、促迫して、余の前に舞い降りる頃、余は漸く分かつた。相手が震えている理由は、葉が葉緑素を崇拜し、桜が春を待つ様に、彼の心が渴いているからだ。その感情は篤美で、慎密で、脆い。

姑獲鳥は爪で地面に画かれていて真白な枕を掴みたがったが、攫取できなかつた。悔しがつて、呉れ呉れ試して、諦めて飛び去りたがった時に、余は鳥足を締め握つた。予想外に嬰兒の肌より柔軟な手触りだ。姑獲鳥はガーと鳴いて、余の手を振り切りたがったが、出来なかつた。颯と瞬間に何十キロも飛び上がったが、余も放さなかつた。風圧は颯の様に猛烈で、余を引き裂きさすうだ。頸から流れている水が雹になり、肌が気圧に圧迫され、

血液が凝固した様になり、まるで酸欠になったかの様になった。姑獲鳥が速やかに雲を超えて、飛翔している時に、余は意識が遠くなつて気絶した。

光を見たらしいが、鮮やかではなかった。余は風の湿気を感じて、草の匂いを感じ、虫の声を聞いて、目を開いた。

目の前は森林だ。夜の森だが、紺色の藪の中に紅藤色や紫苑色の提灯花が混しつて、淡く光っている。行き成りある軽快な音楽が耳の奥に幽かに響いてきた。

「幻惑の森く素晴らしいく幻惑の森く喜ばしいく」卵の様に小さい花人たちが行列して、余の足元に通った。

「幻惑の森く素晴らしいく眠りの宴よく姑獲鳥の梢でやるとよく」小花人の皆は笑顔で、銘々栗の木のカスタネットを鳴らしたり、シンバルを叩いたり、革製のドラムを奏でたり、躑躅花がついている草笛を吹いたりして、可愛らしく、完璧なパレードをしている。こんな心地よい音楽を聴きながら、余も左手の鉛筆を草笛の様にして軽快に吹いていた。皆と合奏したかったが、迂濶と皆を吃驚させた。小花人は本来のリズムを乱して、余の邪魔に悉皆面食らつたらしく、楽器を捨てて、鼠の様に頭を抱えて逃げ出した。余は敢て莞爾した。

「恐れないで、恐れないで、余には悪意がないのですよ。ただ皆が可愛らしいと思うだけです。さっき何の歌を歌っていたのですか。」手で小花人の避難経路に通せん坊をした後に、友好に示す

為、嘴を下げ、彼らを食へないことという身振りをした。

「なにになになにを歌うの。」小花人はまだ驚いており、暫く余の話に耳を貸さなかった。余の話聞かせる為、やむなく親指と人差し指で小花人の花瓣を掴つて、顔を吹きかけた。吐息のせい、小花人は眼を細めて、檸檬を食へた時の様に顔を響く、頸の周りにある花瓣の短い鱗毛も震わせていた。

「ちゃんと余の話聞いて下さいよ。幻惑の森とは、何ですか。」  
「ぼ、僕らんわかんない、放して。」小花人は手を振り回したり、無闇に動かしたりして、余の腕から逃れようと一生懸命にもがいている。

「幻惑の森はどこにありますか。眠りの宴というのは何ですか。」  
「き、君は一体全体、莫迦なのかい。こゝこゝはもう幻惑の森だよ。眠りの宴なんて、そ、そんな怖いもの、君と同じ様に怖いものだよ、放してつてば。」緊張して吃つて言った小花人の姿が可愛らしすぎて、遂に笑つてしまった。この笑いは更に小花人を怒らせ

た。  
「な、なにが面白いの。眠りの宴は姑獲鳥の巢にあるんだ。あ、彼奴は皆の眠りを狙っているよ。眠りが盗まれた子供たちは催眠術に掛かったみたいで、ゆ、行方不明になるよ、怖いもん。」小花人の口も小さくて、激しく動いている。

「では、姑獲鳥の巢はどこにありますか。」

「も、森の中にいろいろ花があるじゃないか。赤く光っている花を辿つて行くと、すぐに着く。ぼ、僕らもう教えたよ。姑獲鳥

はとても凶暴だよ。もう全て言ったから、放して。」

「はいですよ、ありがとう、小花人ちゃん。」小花人を軽く地面に置いて、彼の頭を撫でてやった。

置かれた瞬間に、小花人は早速、襟と花瓣を正して、すつ飛んで逃げた。然し、意外なことに急に立ち止まって、振り向いて言った。

「ほ、僕ちゃんは小花人じゃない、猫顔花人だつて。」

そうして、森の藪に消えた。地面に躑躅花がついていて、小さな草笛が残っている。

小花人の話に従って、紅藤色や紫苑色の提灯花に沿って森の中を行く。途中の光が限取して、幻の様に朦朧として頭れて、妖精の灯の様だ。妖精の灯に導かれ、提灯花が次第に生い茂って、光も薄くなっている。その光は暖かい印象ではなく、月の様に涼しい光で、透明で雅な素地だ。歩きながら、細道も段々明るくなっていた。

頭を上げると、木漏れ月に照らされて、白群色になった雪花が、朽ち葉と混しつて美しく落ちていく。若し、その雪花に登って、跳ね上がって、飛んで、飛んで、飛んだら、天の頂に着けるだろうかと矢鱈に考えて、首を傾げている。

呆然として、聽て気が付いたら極めて巨大な樹を認めた。根の子が蔓の様に見える。こんなに偉大な姿に、もう千万年以上生きていたんだろうと思う。上を見ると、枝が星座の様に

繁雑に交錯し、梢は丸くて幽かに光っており、星に似た果実が沢山実っている。四辺を見回してみたが、姑獲鳥はいないらしい。遂に近寄っていた。果実を優しく撫でて、克明に観察した。蓋しこれは眠りの原形だろう。

眠り」というもの。元々どんなものなのだろうか。姑獲鳥をそこまで無我夢中にさせたもの。人間に愛着されているもの。特に人間は、六十年生きるとして、二十年もかかって、僅か一つの眠りの実しか結ばない、いったい何故だろうか。

知りたい。

知りたい。

本当に知りたいのだ。

そうして、眠りの実を軽くもいで、嘴に入れ、確乎と噛み締めた。

少し目の前が朦朧した。眠気がきたとはこのことらしい。味わなければならぬ……

光を見ていたが、それは光ではない。

これは夢だ。

一つ目の瞼を閉じた時には外界の光と闇を分け、深い睡眠の時に二つ目の瞼を閉じたら内なる世界の闇と夢を分けることができる。

今の余は、夢にいる。

余は見ていた。足元の下に流れている光華の川を。夢の中でし

か見えない、命の根源の光華だ。白金色の光華の水が、絶え間なく徐に湧き出している。

光華は意識を懐いていて、流れる方向を決めていた。潤つて、真白な岩に沿つて、登つて、登つて、陸などところに岩壁を突き抜けていた。その穴に光華の水が密やかに流れ落ちていて、光華の滝になった。画面が生き生きと躍然し、寂靜たる世界だ。この瞬間に、どんな言葉もいらない。

川に近寄つて、光華の水を掬し、光華は生まれたばかりの雛の様に胸震いして、鼓動している。微弱な息とほかほかとして肌を感じて、初めて曙光を見た感動の様に、喜んだり、畏敬したり、崇拜したりしている。敬虔に祈つて、膜拜しなければならぬ。それは自然の偉大の前、野生の本能は命の湧きを憧憬する。純粋な信仰だ。

光華は光と異なる。光華は透かさず、射さず、屈折しないが、無言で余を征服した。野獣の様に匍匐して、光華に体を流されている。一瞬に、余の耳に緋色の彼岸花が吹き出して、真白な体は益々褪色して透明になった。花の香りは嗅げるが、指先の力が無くなつて、このまま光華の川に臥している。

脳の回路が止まつて、意識を失つた。

ここは真白な都会。初冬の雪が続々降つている。町筋にある歩道や車の蓋の上に、厚い雪が積もっている。余はもう一人の自分が雪花を登つて、上の氷晶に跳ね上がつて、飛んで、飛んで、飛

んで、小さくなつて、天の頂に消えたのを感じた。

また、ある自分は紙がないが、左手で字を書いている。突然、文字が一行ずつ音譜の様に空に飛んだ。文章が墨の龍になつて、十分の内に文字はすぐ空を満たし、世界にさえも飛んでいる。

更に別の自分は、背中に鳥の様に漆黒の翼を負い、頭に七色の花が咲いている鹿の角をつけ、白狐のペガサスに乗っている。

一人の自分が冬季に立つている。雪玉を綺麗に作り、時間の門に投げた。もう一人の自分は春季に立つて、それをちゃんと掴んだ。

多くの自分が街路に夢遊している。行き成り手の中に本が現れた。本の背を軽く撫でて、耳元に寄せ、本の声を真剣に傾聴して、大切に開いた。その瞬間、本は僕の手を振り切つて、全ての紙が蝶々になつて飛んでいった。蝶の羽は余の顔に当たり、纏て余は目を閉じた。

ある海の潮汐から枯渇迄を実際に眺める様に長い。また雷の閃きより短い。再び目を見張ると、目の前の町筋が真白ではなく、青灰色に戻つた。余は依然として、街路に立つて、水切りの瑠璃瓶みたいな人間を観察している。蓋し自分にもやつと眠りがあったと思ひながら、満足そうに微笑んで、左手の鉛筆を草笛として、小花人の様に軽快な旋律を吹いている。

不眠の人間たちは、余の笛音についてきた。

ラララララララ、不眠の人々よ

ラララララララ、彼岸の花を見ましたか

ラララ〜ララララ、不眠の人々よ  
ラララ〜ララララ、余たち一緒に眠りを探しましょう〜」

昔話

齋藤 幹晃

ここは何処だろう。寝ぼけた頭が捻り出した感想はそれだった。しかし、そんな幻想はいつも通り、おはようと言う母親の声によつて掻き消された。溜息さえつけない僕は、代わりに、目の前に設置されたディスプレイに、目配せする。

僕は、生まれつき全身の自由が効かない。唯一、自由に動かせるのは視線だけだ。しかし、介護の技術が進歩したこの世界では、視線さえ動かせれば、意思の疎通を図ることもできるし、読書だってできる。

そんな風に生きてきて十数年、近頃、何処かへ行きたいという自分勝手な思いを募らせる様になつてきた。

例えば、両親の白髪が増えてくのが解かる時。

例えば、定期的に診察しに来てくれる医師が笑顔で接してくれる時。

そんな時、僕はどうしようもなく何処か行つてしまいたくなる。

僕は、よくあるライトノベルのような「目が醒めたらそこは異世界でした」といった出来事を期待しながら毎朝を迎えるのが、日課になりつつあった。

さて、どうしようか。目の前の画面に映し出された白紙の原稿用紙を見た僕の感想だ。

軽く状況整理をしよう。いつも通りの白衣姿でいらつしやつた先生は、唐突に、

「文章を書いてみないかい。」

と、おっしゃつた。いつもは、こちらの現状を聞くだけで基本的には、何々してみたらどうだろうか、なんて踏み込んでほなかつたので、吃驚してしまつた。

そしてその先生の勢いに流されるまま、文章を作るための準備が着々と進んでいく。その間に、宮沢賢治がどうしたと言われたような気がしたが、一切頭に入つて来なかつた。

状況整理が出来たところで、僕は、再び画面とにらめっこする。特にやりたいことも無かつたので、原稿用紙に普段考へているようなことをつらつらと書き綴つてみる。

自分の感情や考えが、白紙を黒く埋めていく快感に浸っていると、あつという間に二時間近く時計が進んでいた。

あれから二週間、僕は、休憩しながらも書き続けた。気が付けば、先生が診察に来る日になっている。僕は、この間の仕返しの意味も込めて、唐突に

「書きましたよ。」

と、伝えてみた。先生は少しきよんとしたが、すぐに解ったようので、

「見ても良いかい？」

と、訊いてきた。僕は、返答として画面を操作して、ファイルを開く。記録されている文字数を見て、先生は、

「データをコピーしてもいい？」

と言った。多少、羞恥心を感じたが、もちろんと返した。

そんなやり取りから一週間後、先生が血相を変えて家を訪ねて来た。ズレた眼鏡や、格好が完璧な私服であることから、かなり慌てて家まで来たらしい。

「どうしたんですか？」

両親が、心配そうにお茶を出しながら言った。

「実は……」

一息ついた先生は、今度は、居心地が悪そうに、目線をおちこちへ動かし話し始めた。

かなり要領を得ない話だったので、事の顛末を簡単に説明すると、先生の知り合いで出版社に勤めている方の目に、偶然僕の文章が目に入り、僕を駄目元でプッシュしてみたら、案外、感触が良く、話が進みそうなので、慌てて、僕に許可

を取りに来たという事らしい。

表情が操作出来れば、目が点になっていただろう。信じるのが困難な話である。空から女の子が落ちて来るのと同じくらいに俄かに信じがたい話だ。もちろん、証拠の名刺も見せてもらった。その上でも実感が湧かないのは、確かだが、こんな千載一遇のチャンスを逃すわけにもいかないという方針で家族の認識は合致した。

それから数日の間というものの、父は、意味なく家の周りをウロウロしたり、母は、食卓にお湯の入った湯呑みを運んだり、家族全体が異様な雰囲気のまま過ごした。

ついに来た。僕にとっては、初めて見慣れた天井の外の世界の人との接触だ。家族全員がバツチリ一張羅を着込んでいる。

「ナントカ出版の某<sup>それがし</sup>です。」

インターホンから眠そうな声が聞こえてきた。名刺に書かれたとおりの社名と名字に、家族全員に戦慄が走る。いそいそと出迎えに行った両親が数秒後に連れて入ってきたのは、実に対称的な二人組だった。

一人は、ふくよかで、丸顔に丸眼鏡を掛け、ジーパンにチエックのTシャツを着た中年男性。恐らく、先ほどの眠そうな声の主だろう。

もう一人は、足が長い、目元が吊りあがってどこか不機嫌

そうに見える女性だ。着ているのがスーツのせいか、キリリとして恐ろいだ。

母親がおぼつかない手つきでお茶を用意しながら、その間ソファーに腰かけた三人は、「今日は書いてすな」とか、「いや、実に私の格好だけ浮いていますな」などと、なんとか話題を繋いでいた。一しきり談笑した後には話題は僕の事になった。某さん、もとい某編集長は、

「君がテーマに沿って書いた文章を見てから最終的な判断をしたい。」

と、僕の顔を見てそう言った。多少、疑問は残ったが、概ね予想通りの展開なので、わかりましたと返す。まるで、僕の思考を読んだかのように、某編集長は、

「まあ、細かい事は、連れて来た鉤谷と話すといいよ。」

と、となりのスーツの怖い人もとい鉤谷さんの肩を叩いた。その日は、顔合わせと挨拶が目的だったみたいで、目的を達成した彼らは程無くして去っていった。鉤谷さんは、

「次来る時は、もつと本気で来ます。」

と、謎の宣言を残して。先が思いやられる、というか、僕は純粹に怖いのです。次が来るのが。

二日後、第一回の打ち合わせが始まった。

親が部屋から退出して、お茶目要素が0パーセントになった。では始めます、という鉤谷さんの声に僕は少しビクつきな

がら、よろしくお願ひしますと返した。鉤谷さんは、「まずは、私は歯に衣着せるのが苦手なので、それは、ご承下さい。」

と、言ってきた。この間の編集長への切り返しで解っていた事だが、自覚はあるらしい。

無言は了承と受け取ったのか、

「私がああなたの文章を読んだ感想は、酷いの一点だけでした。」と続けた。耳を塞ぎたくなつたが、恐らく的確な指摘が入るだろう、という希望的観測をして耐えた。

「書いてある事は支離滅裂。ヤマもオチも無い。ただひたすら書きたい事を書いてるだけ。いくら好き勝手に書いて良いと言われたとしても、これは酷すぎます。」

コテンパンにやられました。前回の宣言はこの事だと理解した時には、もう僕のメンタルは潰れた豆腐を通り越して、豆乳になっていた。

その後も、文章の隅から隅まで余すことなく赤ペンや付箋でメモされたダメ出しをくらい続けた。しかし最後に、

「感性はそこの凡夫より優れているのだから頑張つて下さいよ。」

と、お褒めの言葉を頂き、根っこから引き抜かれた自信が見る見る復活した。

飴と鞭を効果的に使い分けるとどうなるか、身を以って体感した。

それから何度も話し合いを続けていく内にある程度方針も決まり、鉤谷さんの人となりも解つてきた。

「では、今回は詩集という方針で。」

そう何よりもまずやつとやるべき事が決まったのだ。

長い物語を作り出せるほどの構想力もなく、物語の要点をまとめて書ける程の文章力も無いという事で、頭を抱えたが、「文章で書けないのなら、もういつそ文章にしなればイイじゃん」と開き直つてみた。

幸いにも、最初に書いていた落書きの中でも詩でなら使える物もある。

編集長は最初からこの事を見抜いていたのかも、と鉤谷さんが悔しそうに呟いた。

「やっぱり伊達や酔狂で編集長やつてるわけじゃないんですね。きつと、凄いですねとか言つと、過大評価だよとか言つて逃げられそうですけど。」

と、僕が返すと、半ば独り言のように、

「そういう事を、しれつとやってみようから、あの人はやっぱりズルいです。」

彼女は、ふてくされた顔でそう言った。

そう、このやり取りからも解かる通り、鉤谷さんとは、かなり打ち解けたのだ。

最初に抱いた印象がかなり強烈で、暫くは、事あるごとに、すいませんを連発していると彼女が、

「別に怒っていませんが……。そんな恐いですか。」

と、悲しそうに訊いてきた。本当はかなり恐かったのだが、ちよつとだけと返すと、

「目つきが悪い所為で、よく恐がられるんですよ。」

と、肩を落としたが言つた。絶対、目つきの所為だけではないとツツコミを入れたくなつたが、それをぐつと堪え、

「そうなんですか。大変ですね。きつと今まで損をする事もあつたでしょう。」

と、言つと、

「そうなんですよ。おかげで学生時代は特に大変でした。普通の生徒はおろか不良にまで恐がられたり。迷子に話し掛けた途端に、恐いと言われた時は、泣きそうになりました。」

彼女は、滔々と語り出した。何だか彼女のそういう姿は新鮮で、初めて見せてくれた等身大の弱さに、僕は、少し嬉しくなつてしまつた。

その日の話し合いは、そのまま、目つきの悪い人の苦悩や、打開策などを真剣に考えるだけで終わつてしまい、彼女は土下座しそうな勢いで申し訳なきそうにしていた。だが、僕が「今後の仕事のために必要な時間でした。」

と、説得すると、一応は納得してくれたようだ。

それから何度も紆余曲折を経て、やつと詩という表現方法を採用して今に至る。

あとと書くだけだ。だけなのだが、予想以上に大変な目に遭っていた。何せ、文章を書く時以上に一字一句のセンスが問われるからだ。

様子を見に来た鉤谷さんに僕の率直な感想を告げると、

「本当に些細な事でも良いので、思った事を書けばいいんじゃないですか。」

と、返された。やけになって

「鉤谷さんだったらどんなのを書くんですか。」  
と無茶振りすると、少し考えてから、

気付いたら

羽織っている毛布

何度も「おかえり」を言えなかった私

何度も「おはよう」をくり返して

つくり置きのごちそうに手をかける

何度も「ありがとう」をくり返してレンジのドアを開めた

という予想以上に丸っこい字で書かれた詩が返ってきた。絶句している僕に向かつて

「こんな感じで書けばいいんですよ。」

と、ドヤ顔が見え隠れしている鉤谷さんが言う。

無茶振りを完璧に対応されたので、黙って作業に戻るしかなかった。

「それじゃあ、メ切は守って下さいね。」

と、言って鉤谷さんは、出版社へ戻っていった。

それからメ切まで僕はひたすら、自分に芽生えた感情を言葉にし続けた。

できた詩の殆どが、僕が長年、抱き続けた、外の世界への憧れだった。

詩集の名前は、悩みに悩んで「いつもの天井の向こう側」というタイトルになった。

「後は、任せてください。ここからはこちらの仕事です。最後ぐらいは、しっかり成し遂げて見せます。」

と、鉤谷さんは、大げさに胸を張って言った。

僕は、

「大げさですね。最初からずっと、しっかり仕事をしていますよ。感謝しています。」

と、もっと大げさに返してみた、何故か彼女が少し、泣きそうな表情をしたような気がしたが、

「先生も、お疲れでしょうからお暇させて頂きますね。ちゃんと本が出来たらお届けいたします。」

と、そそくさと帰り支度を始めた。僕が、先生呼びはやめてくれませんかと尋ねると、やはり断られた。他の話題を考えている内に、失礼しますと鉤谷さんは去って行った。

一カ月後―

鉤谷さんが、一冊の本を持ってきた。もちろん完成した僕の作品だ。とはいえ、本の形をしているそれを見ると実感は

湧かなかつた。

僕が、

「本当に、本ですね。」

と、間抜けな感想を伝えると、鉤谷さんは、

「これが本に見えないのであれば、眼科へ行った方がよろしいかと。」

と、あきれ顔で言った。僕は、手厳しいなと思いつつと、ずつと気になつて来た事を尋ねた。

「何で二冊も持つて来たのですか、僕は一冊で足りですよ。」

この一冊は私の分ですよと答えてから鉤谷さんは、おもむろに

「先生、私、結婚することになりました。実は、一旦、編集部から別の部署に異動することになったので、今回のお仕事で一緒にするのは最後です。」

と、切り出した。僕は精一杯考えて、

「そうなんですか。ご結婚おめでとうございます。あなたと仕事ができて、楽しかったです。」

と、コメントした。

それから、いつも通りお互いお疲れ様と言い合つて、お別れした。部屋から出る彼女は深々と頭を下げて、

「ありがとうございます。」

と、言つて去つていった。

これが僕の初恋のわかりきつていた終わり方だった。

「結局、主人公は、編集さんが結婚すること解つていたんですかね。」

若い編集さんの問いに、僕、なんて主語を卒業した俺は、

「どう思う。」

と、返した。

俺が今書いているテーマは初恋だ。今をときめく大作家さんの合作に凶々しくも、参加させていただけるといふ事で、必死に原稿を書き上げた所だった。

「先生は気付いていたのですか。」

と、優秀すぎる仕事仲間の唐突な質問に、冷や汗かいたが、俺は内緒、と軽くあしらひ、筆筒の中に綺麗に折りたたまれた、一編の詩にまつわる日々を思いを馳せていた。

「砂山十首」から読み解く「二握の砂」の世界

水関 清

第二章 はじめに 近代短歌の系譜をひもとくと、「写生」や「リアリズム」などを表現手法に掲げて、感情を抑えつつ、対象を冷徹な視線で深く掘り下げて捕らえようとするので、物事の本質に迫ろうとした「アララギ」派と、自我を開放して恋や憧れなどの高揚感を高らかに詠いあげた与謝野鉄幹・晶子らの「明星」派、というふたつの流れに集約される。しかしながら大局的に見れば、「アララギ」も「明星」も、近代化が急速にすすんだ明治という時代の流れの中に現れた暮らしの変化を、当時確立されつつあった「自我」意識のもとで詠おうとしたことには変わりはない。

共通の美意識や手順に従って詠むことに重点が置かれた旧来の短歌作法を離れて、自分が感じたことや考えたことを詠うために、近代短歌がまず意識したのは、「若さ」であり「青春」であった。次に浮かびあがった「病氣」と「貧困」の背後には、否応なく変化することを余儀なくされた、人々の暮らしの姿があった。結果として、近代化という大きな波は、短歌が対象とする領域の変化をも促した。そこから生まれたのが、「都市生活」「孤独」「望郷」「社会」「家族」などの新し

い短歌の主題であった。石川啄木の短歌には、これらの主題が幅広く含まれていることにその特徴がある。啄木自身もそのことは十分に認識しており、処女歌集の題名を『仕事の後（のち）』と名付けようとしたことは、それを裏付ける事実の一端である。この歌集は、その後の曲折を経て、『二握の砂』と名を変えて出版され、近代短歌史の金字塔となるが、その編集と増補は、一九一〇（明治四三）年一〇月の、わずかに一〇日間ほどの短い期間に集中的に行われたことが知られている。

その『二握の砂』の巻頭を飾る十首は、『砂山十首』と呼ばれ、その叙景の美しさもあって、広く人々に愛唱されてきた。一方で啄木は、この歌集の編集過程の中で、それぞれの歌に二重の歌意を潜ませ、表面的な明るさのほかに、近代化にともなう人々の苦衷をも織りこむことにも成功した。

本論文は、『二握の砂』の世界を象徴的に要約した観のある「砂山十首」を読み解くことで、啄木が「砂」に託した寓意を探り、この歌集の主題を考察するものである。

第二章 「ローマ字日記」の日々から、幻の歌集『仕事の後』

まで ほぼ一年間にわたる北海道漂泊の後、「新しき文学的生活の運命を極度まで試験する決心」で啄木が上京したのは、明治四一年四月二十七日のことであった。金田一京助の厚意で、五月上旬には住まいも決まり、小説の執筆を始めた啄木は、奮闘して「菊池君」「病院の窓」「天鷲絨」「二筋の血」「刑余の叔父」「鳥影」と定稿だけでも六篇の小説を書いたが、活字になったのは「鳥影」のみの惨憺たる結果で、その年も暮れた。

一九〇九（明治四二）年、自らも編集者となって創刊した雑誌「スバル」一月号に「赤痢」、二月号には「足跡」と、非常な抱負をもって小説を二篇発表したが、自然主義者にならつて作品の中で試みた自己告白の不完全さを、「早稲田文学」三月号の誌上で中村聖湖によって酷評された。その深刻な挫折の中で、啄木は小説が書けなくなり、一月には「眠れぬ女」を二枚書いて諦め、三月の「島田君の書簡」は一枚書いた処で力尽きた。自分の思うように小説が書けない、という事実が啄木に突きつけたのは、その原因の直視である。

現実が自分の求める方向には動かず、ありたい自分と現実の自分との間の乖離をどうしても直視できない啄木は、「ローマ字日記」を書き始めた。啄木の当時の苦悩には、外的・内的のふたつの要因があった。外的要因として、一年前の上京以来一日延ばしにしてきた家族の扶養義務履行が、明瞭な期限をもって迫られていることと、そのために必要な金銭が自

己の浪費のために準備できないことがあり、内的要因として、「自分の思うように小説を書けない」事実の検証があった。啄木の生来の性格である神経質のためもあって、その検証作業は観念上の検討の範囲を出ず、事実を直視することのない堂々巡りに陥っていた。その苦しさを一時的に紛らわすための浪費や漁色への逃避は、事態をさらに悪化させる結果となり、啄木の実生活はほとんど破綻しかかっていた。

啄木生来の性格である神経質には、「執着性」「心配性」「自己内省性」「強い生の欲求」という、四つの基本的特徴があるとされる。これらの性格特徴の負の側面が強調されると、認めたくない事実そのものに目をそむけた行動をとることになり、物事の正確な分析が困難になる。さらに、神経質者の性格特性のひとつである「自己内省性」の存在は、こうした自らの姿への自己嫌悪を招き、それに苛まれることにもなる。

このようにして、観念上の堂々巡りを続けながらローマ字日記を書き記す苦悩の日々の中で、啄木は、田中喜一（王堂）談「近世文壇に於ける評論の価値」に遭遇することで、人生や社会の実際（National life）を吟味する「評論」という分野に自らの活路を見出すこととなった。啄木の自己を見つめ続けた眼差しが、自分の外にある人生や社会の実際に向けられることとなり、そこに突破口が開かれた。「執着性」と豊かな「自己内省性」を持つ眼で、社会象を「事実本位にきちんと見つめる」ことで、今度は啄木生来の性質である神経質の

性格特徴の「正」の側面が活かされることとなり、観念の悪循環に満ちた「ローマ字日記」という煉獄から脱出するための推進力となった。

その後の妻・節子の家出という衝撃を経て、啄木は自らの独善的な「天才主義」から脱却して、仕事の継続や家族の扶養などの社会的責務の遂行の大切さに目覚め、同年一月三〇日～二月七日に発表された詩論「弓町より（食らふべき詩）」の中で、これまでの自分を「空想家―責任に対する卑怯者」と規定するまでの変身を遂げた。さらにこの詩論の中で、「ふと、今迄笑つてゐたやうな事柄が、急に笑ふことが出来なくなつたやうな心持」も吐露し、生活のすみずみにまで目配りする中で、「普通の生活者が、実人生と何等の間隔無き心持を歌ふ詩が、我々の日常の香の物のごとく、生活者には必要とされている」ことを主張した。これらの詩論は、後の歌論「歌のいろいろ」の中で啄木が展開する、「切れ切れの生活断片こそ歌の源泉」という主張にも通じるものである。

翌一九一〇（明治四三）年三月一五日の文芸雑誌「創作」の創刊は、新詩社や耽美派の歌風に距離を置きつつあつた啄木に、自然主義的短歌の可能性を探る契機を与えた。前田夕暮は、その創刊号に掲載された「卓上語」の中で、こう述べている（大意要約）。

「自分は、言ふところの歌人ではないかもしれないが、何時も「人間」であることに満足している。その世上ありふれ

た人間が、これまた世間並の人間や周囲の自然から受けた心持を、唯正直に表白する。そのための便宜として私は短歌を選んだ。」

啄木が「弓町より」の中で展開した詩論とそっくりな、夕暮の歌論である。実際に「創作」に掲載された夕暮の恋愛歌を読むと、恋愛至上主義をとつた観のある新詩社の歌群とは全く趣きを異にしたものであることがわかる。恋にまつわる男性の心をありのままに表現しており、そのモチーフと心持の表白には、凝らされた技巧もなければ一切の誇張もなく、きわめて自然主義的な作風である。

これらの夕暮の歌論と短歌作品は、啄木の歌作再開への強い動機となり、同年三月一八日の東京朝日新聞に掲載された「曇れる日の歌（二）」の歌群の中に、早くも結実した。

「よごれたる煉瓦の壁に 降りて融け降りては融くる 春の雪かな」

「手のためし雪の融くるが ここちよくわが寐飽きたる心には沁む」

「哀れる恋かなと ひとり泣きて 夜半の火桶に炭添へにけり」

「旅七日 かへり来ぬれば わが窓の赤きインクの染みもなつかし」

「浅草の夜のにぎはひに まぎれ入り まぎれ出で来しきびしき心」

これらの五首は、いずれも後の『一握の砂』掲載歌となることをみても、啄木の新しい自信作群創出のはじまりともなつた。新生なつた啄木短歌に注目したのは、当時啄木が勤務していた東京朝日新聞社会部長・渋川玄耳である。同年四月二日の啄木日記にはこうある。

「渋川氏が、先月朝日に出した私の歌を大層讚めてくれた。そして出来るだけの便宜を与へるから、自己發展をやる手段を考へて来てくれと言つた。雨模様、パツとしない日であつたが、頭は案外明るかつた。」

渋川の賞賛に促されるようにして、啄木は過去二年間に詠んだ歌をもとに、歌集を編んだ。同年四月二日の日記には、『仕事の後(のち)』編輯終る。歌数三百五十五首。』の記事がある。勇躍、四月二日に春陽堂に持ち込んだ原稿であつたが、売れなかつた。日付なしの日記の記載が、その無念さを物語る。「何がなしに不満足な日が続いた。歌集はどうとう売れなかつた。「今月は駄目な月だつた!」そんな事を妻と語つた。」

**第三章 『一握の砂』の構造** いったんは春陽堂に持ち込んで出版を断られた歌集であつたが、自然主義的作風の短歌に手ごたえを感じた啄木は、その後も歌作を続けた。その後の同年八月三日から四日には、『仕事の後』の第二次編集にかかり、歌数三七五首前後に増補された新・『仕事の後』は、同年一〇月四日、東雲堂との間で出版契約が結ばれることになつた。

念願の歌集が、ついに売れたのである。

出版契約が結ばれるや否や、啄木は再編集にかかつた。まず、持ち帰つた最初の原稿から三〇〇四〇首を削つて、即席の歌を七六首ほど追加した。並行して、すべての歌を三行書きに改めた。これらの作業の結果、合計二六一首もの歌が追加された。しかしながら、詠われた内容は、それまでの啄木人生の各時期に分散されており、回想歌という範疇に属するものである。その回想の正確性を支えたものは、啄木自身の優れた記憶力はもちろんのこと、それまでに積み上げてきた日記、すべての読み返しであり、それらが『一握の砂』創造の源泉となつたことは確実とされている。

さらに、『二頁に二首、見開き三頁で四首』という基本方針のもとに、歌群をすべての頁に割り付け、これらを作歌意図に沿つて五章七節にまとめることで、全五四三首からなる完璧な原稿が出来上がった。それは、出版契約成立から一〇日あまり後の同年一〇月一五日〜一六日のことであつた。出版社が見本組みを啄木に届けた一〇月二七日、生後二四日の眞一が急逝したため、啄木は急遽一月初めに眞一への挽歌八首を詠んで、歌集の末尾に追加した。こうして全五五一首からなる『一握の砂』が東雲堂から出版されたのは、一九一〇(明治四三)年一二月上旬のことであつた。

四月に春陽堂から出版を断られた歌集が、なぜ一〇月になつて東雲堂に売れたのか。

これには、明治四二年から東雲堂書店の経営に参画した、西村陽吉の存在が大きいとされる。陽吉は、この書店の経営の新機軸として、いちはやく自然主義的短歌の作者たちに発表の場を与えた。啄木のほか、若山牧水・土岐善麿・北原白秋らが、この書店から歌集を出版している。

さらに、第一次『仕事の後』と『一握の砂』を比較してみると判ることだが、新詩社風の歌風を引きずる前者と、「切れ切れの生活断片」を丁寧に扱いつつ、生活の温感を残す形で歌の源泉とした後者との間の、短歌としての完成度の差は歴然としている。事実、啄木自らの手による編集の結果、第一次『仕事の後』二五五首のうち、『一握の砂』に採用されたのは一一五首、およそ四五パーセントに過ぎないのである。

上梓された『一握の砂』は、「我を愛する歌」「煙（一）」「煙（二）」「秋風のころよさに」「忘れがたき人人（一）」「忘れがたき人人（二）」「手套を脱ぐ時」の五章七節からなる、全五五一首の歌集である。各章ごとの歌数をみると、「我を愛する歌」から順に、一五一首、一〇一首、五一首、一三三首、一一五首と、歌集の真ん中にあたる第三章「秋風のころよさに」を中心に、前に二五二首、後ろに二四八首という、みごとな均衡を保った構成を持つことが知られている。さらに、これらの短歌群は、一頁に三行書きで二首ずつ割り付けられ、左右見開き二頁で、四首ずつが収載されるという外観を呈する。

しかしながら、啄木自身の手による、この編集と割り付けの妙は、明治四三年一二月に刊行された『一握の砂』の初版本でのみ認識されるものであり、その後、さまざまな形態で刊行された全集版の啄木歌集の編集過程の中で、失われていった。それらの創意は、日本近代文学館による復刻版の出版の結果、再発見されることとなった。このことに気づいて、初版本の体裁による『一握の砂』を上梓したのは、近藤典彦である。近藤によれば、啄木はこの体裁の中に、「現在の歌の調子を破る」ためのさまざまなころよみを仕掛けたという。すなわち、（一）二行書き短歌を一頁に二首ずつ、見開き二頁に四首ずつとすることで、四首単位で場面転換の機能を持たせること、（二）割付を駆使することで、章・節ごとのイメージの具現をはかること、（三）章・節の冒頭歌と末尾歌とは、章・節ごとの主題を含みつつ、相互に呼応する関係にすること、（四）歌集全体の冒頭歌と末尾歌との間にも関連性をもたせ、相互に響き合う関係にすることで、『一握の砂』全体の主題を明示または暗示すること、の諸点である。

次章では、啄木が歌集のすみずみにまで凝らした創意を、具体的に見ていきたい。

**第四章 『一握の砂』への道** 明治四二年一〇月の啄木 歌集の編集真つ盛りの時期であった一九一〇（明治四三年）一月九日、啄木は、版元である東雲堂の西村陽吉に宛てた手紙の中で、こう述べている。

「書名は『一握の砂』とする事にいたし候、目下原稿整理中、お目にかけし原稿より三四十首をけつり新たに七八十首を加え候、頁は二百二十頁位、但し一首三行一頁二首に候、心ありての試みに御座候、(以下略)」

さらに三行書きにした理由については、先に挙げた同年一〇月二日の親友・吉野章三宛ての書簡にこう記して、初めての歌集発刊直前の心の昂ぶりを包み隠さずに伝えている。

『一握の砂』と題して来月上旬東雲堂より発刊致すべく、一首を三行に書くといふ小生一流のやり方にて、現在の歌の調子を破るため、歌数五四三首、三分の二は今年に入りての作、頁数は二八六頁にて恰も『あこがれ』と同じ(以下略)』

西村と吉野宛ての書簡の中で、啄木が告げているのは、やや広くとらえても前記ポイントの(一)(二)までである。一〇月九日の記載から「一首三行一頁二首に候」ことは明らかであるが、「心ありての試み」の中身は不明である。眞一への挽歌を除いた、全五四三首からなる『一握の砂』の第一次完成稿が出来たのは、一〇月一五日から二六日午前であることが明らかなので、一〇月二日の吉野への書簡は、脱稿宣言ではあるが、「心ありての試み」自体の詳細についてはふれていない。

近藤の挙げたポイント(三)(四)にあたる「各章・各節における冒頭歌と末尾歌との間、そして歌集全体の巻頭歌と末尾歌との間にも一定の連関をもたせることで、主題の定着を

はかる」アイデアが、啄木の中でどう芽生え、このような形で定着することになったのか、ということの検証は、この時期の啄木の日記が残されておらず、書簡も前記二通にとどまっているため、直接的な証明は困難である。

ほかの可能性を探ってみる。一九一〇(明治四三)年一〇月は、『一握の砂』の編集に没頭していた時期で、翌年になって崩すことになる体調も保たれていた、啄木の文学活動における絶頂期であったはずである。この頃に書かれた、啄木にとつての最初の歌論である「二利己主義者と友人との対話」に注目してみたい。作中の「A」は啄木自身、「B」のモデルは、啄木の親友・並木武雄である。少し長くなるが、要所を以下に引用する。

「B そうそう、君は何日(いつ)か短歌が減びるとおれに言ったことがあるね。

A あれは尾上という人の歌そのものが行きづまって来たという事実立派な裏書をしたものだ。(筆者註：「短歌滅亡私論」のこと。歌人であった尾上柴舟が、「創作」第一巻八号の誌上で、一九一〇(明治四三)年一〇月に唱えたもの。その主張は、後ほど詳述する。)

B そんなら君がああ議論を唱えた時は、君の歌が行きづまった時だったのか。あれには色色理窟(りくつ)が書いてあった。

A 理窟は何にでも着くさ。たとえば、近頃の歌は何首或

るいは何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全体として見るような傾向になつて来た。一一分解して現す必要が何処にあるか、とあれに書いてあつたね。一応尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。

歌は——文学は作家の個人性の表現だということ狭く解釈してゐるんだからね。仮に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌うにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で一分は六十秒だよ。連続はしているが初めから全体になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からきれぎれに歌つたつて何も差支えがないじゃないか。一つに纏める必要が何処にあると言いたくなるね。

(中略)

A 人は歌の形は小さくて不便だというが、おれは小さいから却つて便利だと思つてゐる。人は誰でも、その時が過ぎてしまえば間もなく忘れるような、乃至は長く忘れずにいるにしても、それを言い出すには余り接穂(つぎほ)がなくてとうとう一生言い出さずにしまふというような、内から外からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験している。多くの人はそれを軽蔑しないまでも殆ど無関心にエスケープしている。しかしいのちを愛する者はそれを軽蔑することが出来ない。

B 一分は六十秒なりの論法だね。

A そうさ。一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌という詩形を持つてゐることは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。

B いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。」

啄木が反論を企てた、尾上柴舟の「短歌滅亡私論」の骨子は、①近年になり五首や一〇首単位での連作が盛んになった。一首だけで詠えないのなら、三十一音という短歌形式は不要なのではないか。②むしろ、散文を活用した方が、短詩型という形式上の制約から自由になるのではないか、という主張であつた。

一方、啄木の「一利己主義者と友人との対話」では、短歌が「日々の暮らしの時間の流れの中で湧き上がってくる淡い思いを掬い取つて定着させるための手軽な表現手段のひとつである」こと、そして「その切れ切れの思いを、その時々々に切れ切れに詠唱しても何の問題もなく、個人性の立派な表現となり得る」ことを指摘している。では、連作として一つに

纏めることは無意味なのか。啄木は「一つに纏める必要が何処にあると言いたくなるね。」として、連作の必要性を否定している。

以上の啄木の主張をまとめると、以下の二点になる。主張の第一は、「切れ切れの生活断片こそ歌の源泉である」ということである。これは、短詩型という和歌の様式を制約と考えず、むしろ刹那の感情の動きを素早く手軽に定着させ得る利点と捕え直せば、忙しい生活の中でも日々の暮らしを愛惜しようとする人々の心に寄り添えるのではないか、ということである。主張の第二は、「連作がもてはやされる時代になっても、短歌を活かすための工夫の余地はある」であり、短詩型という制約を補うために、連作などの形でいたずらに字句を長く展開しても、それは無意味であり、連作以外にも短歌を活かすための工夫の余地はある、ということである。

短歌を活かすための工夫の実践形として啄木が世に問うたのが、『一握の砂』と考えると、啄木が心血を注いだ、巧緻な割付と編集に込めた意図が見えてくる。以下に、まとめる。

(ア) 一首一首の独立性を保ちつつ、見開き二頁掲載の四首ごとに一定のまとまりをもたせる。(イ) 各章に、プロローグとなる章頭歌とエピローグとなる末尾歌を配置し、その照応関係の中で、章ごとに設定した主題を暗示させる。(ウ) ふたつの節からなる章の場合には、プロローグとなる節頭歌とエピローグとなる末尾歌をそれぞれの節に対応させた上で、

前半の節の節頭歌には章頭歌としての役割も持たせ、後半の節の末尾歌にも、章全体の末尾歌としての意味をふくませることで、照応関係を保つ。(エ) 歌集全体の巻頭歌と、歌集全体の末尾歌との間にも、全体のプロローグとエピローグの役割を持たせ、啄木がこの歌集の刊行にこめた意図をふくませる。

実際に『一握の砂』初版本を再現させ、収録歌の配置をみただ上で、この問題について詳細な論考を加えたのは、近藤典彦である。『一握の砂』巻頭歌者と題した労作から、以下に大意引用する(なお表記の都合上、改行部分をスペースに置換した上で、一行書きに改変した。また、「手套を脱ぐ時」の章末歌は、『一握の砂』全体の章末歌ではなく、近藤が推測した、眞一急逝前のものとした。)

「我を愛する歌」：主題「日常生活における、その時々々の心の姿」 章頭歌(巻頭歌)：東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる 章末歌：やとばかり 桂首相に手とられし夢みて覚めぬ 秋の夜の二時 「煙(一)」：主題「盛岡中学時代の思い出の青春」 章(節)頭歌：病のごと 思郷のこころ湧く日なり 目にあをぞらの煙かなしも 節末歌：糸切れし紙鴛のごとくに 若き日の心かるくも とびさりしかな 「煙(二)」：主題「ふるさと浜民村の恋しさと思ひ出」 節頭歌：ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく 章(節)末歌：ふるさとの山に向ひて 言ふこ

となし ふるさとの山はありがたきかな 「秋風のころよさに」  
に」：主題・「窮迫の明治四一年秋を救ってくれた、友人・金田一京助への感謝」 章頭歌：ふるさとの空遠みかも 高き屋にひとりのぼりて 愁ひて下る 章末歌：旅の子の ふるさとに来て眠るがに げに静かにも冬の来しかな 「忘れがたき人人」(一)：主題・「北海道を漂泊した一年間に出逢った人たち」 章(節)頭歌：潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜 薔薇よ 今年も咲けるや 節末歌：浪淘沙 ながくも声をふるはせて うたふがごとき旅なりしかな 「忘れがたき人人」(二)：主題・函館区弥生尋常小学校時代の同僚・橋千恵子との相聞 節頭歌：いつなりけむ 夢にふと聴きてうれしかりし その声もあはれ長く聴かざり 章(節)末歌：長き文三年のうち三度来ぬ 我の書きしは四度にかあらむ 「手套を脱ぐ時」：主題：ふとした外界の出来事に接する時、勤め人の心をよぎる由なし事 章頭歌：手套を脱ぐ手ふと休む 何やらむ こころかすめし思ひ出のあり (近藤の推測による) 章末歌(巻末歌)：マチ擦れば 二尺ばかりの明るさの 中をよぎれる白き蛾のあり

こうして通覧してみると、「煙」「秋風のころよさに」「忘れがたき人人」の各章では、主題と章頭歌・章末歌との間の照応性は明瞭かつ判りやすい。難しいのは、「我を愛する歌」と「手套を脱ぐ時」の二章である。

まず「手套を脱ぐ時」からみていくと、章頭歌では、仕事

を終えて帰宅した啄木の心をかすめた刹那的な感情を、見逃さずに定着させている手法がみごとである。つぎに、近藤の推測による章末歌では、マッチの放つ、か細い光を慕う白い蛾が、暗闇の中に一瞬浮かんだという、外界の出来事を見事に表現している。さらに、章頭歌が啄木の心の中の出来事を、章末歌が啄木の居場所という外界での出来事を切り取っており、心の内と外とで見事な照応関係にある。

「我を愛する歌」の章頭歌と章末歌は、叙景歌として見ると、表現上の呼応関係はないようにみえるが、生活歌としての第二の歌意を考えると、「時代閉塞の現状」の中で奮闘する自己の卑小感を詠おうとしたという第二の主題と通底しており、この照応関係は、歌集全体の巻頭歌と巻末歌を生活歌として捕えた場合においても成立するものである。第二の歌意の問題は次章以降において、「砂」というものを、啄木が歌の対象としてどう考えていたのかについて論証する中で考えて行きたい。

さて、上記(ア)～(エ)からなる『一握の砂』編集意図を、尾上柴舟に対する啄木の反論として、もう一度考えてみると、「短詩型を無理に纏める必要はなく、各歌を適切に配置し、適切な照応関係を確保するなどの編集上の工夫によって、短歌を連作する以上の効果を發揮させることは十分に可能であり、その実例として『一握の砂』という歌集を上梓する」という啄木のもくろみが見えてくる。

では、吉野への書簡に見える「現在の歌の調子を破る」ことについて考えてみる。以下に引用するのは、先ほどの「一利己主義者と友人との対話」で、(中略)とした部分である。

「B 今の我々の言葉が五とか七とかいう調子を失つてるのは事実じゃないか。

A 五と七がだんだん乱れて来てるのは事実だね。五が六に延び、七が八に延びている。そんなら歌にも字あまりを使えば済むことだ。なるべく現代の言葉に近い言葉を使って、三十一字に纏りかねたら字あまりにするさ。

B それもそうだね。

A のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る余地がある。昔は何日の間にか五七五、七七と二行に書くことになっていたのを、明治になってから一本に書くことになった。今度はあれを壊すんだね。歌には一首一首各(おのおの)異った調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B そうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

一利己主義者(啄木)の「歌には一首一首に異った調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにする」という主張を、目に見える形での実践形にしたものが、『一握の砂』における三行書きという表記なのである。三行書き

にすることで、強調したい部分が視覚的に明示され、主題の理解が促される。しかも主題として強調された部分が、四・五・七などと多彩な長さをとることで、前後の字句も長短さまさまになり、結果として五・七・五・七・七という定型のしらべから自由になって、「短歌」というより「短詩」の趣きを見せる歌すら見られるのである。

もうひとつ、本としての歌集を開いた場合に目に飛び込んでくる、外観上の工夫も鮮やかである。歌集を開くと、見開き四首単位の一行の長さは長短さまさままで、一行に書かれた文字の最下端の位置は、頁の上のほうにあったり、中ほどにあったり、下のほうにまで伸びていたり、外観上は、あたかも波打ち際に寄せる波頭のイメージを彷彿とさせる。実際に数えてみると、一行の文字数の最短は三字、最長は一八字である。さらに各一行の末尾の文字は、そのほとんどがひらがなであり、ひらがなの持つやわらかさも、砂浜に打ち寄せては消える波頭のイメージを想起させる。その中に、時には漢字も混じる。真一への挽歌を除く五四三首から末尾の漢字を拾っていくと、二六種四五字あり、複数回用いられた文字は、「日」が六回、「夕」「下(もと)」「友」が各三回、以下「音」「男」「車」「人」「色」「時」が各二回ずつである。各文字の画数をみると、三画から一三画の範囲に収まるが、一〇画以下の比較的画数の少ない文字が二六種中二二種と、その大半を占めている。このこともまた、波が打ち寄せては返す海岸

の砂の中になかば埋もれた、小さな貝殻や小石のイメージを喚起させる。

これらの意味において、啄木の「歌の調子を破る」という狙いは、少なくとも視覚上の効果は十分に上げているものと考えられる。

では、聴覚上の効果はどうであろうか。これについて三枝昂之は、三行書きの効果は視覚上に留まるもので、朗誦する時などには、三行の行分けなど消えて、心地よいリズムと抑揚から、短歌に詠われた情景がよみがえってくる」と述べ、聴覚上の効果については否定的な見方をしている。

ここまで、啄木が歌集のすみずみにまで凝らした創意を見てきたが、そのうえで『一握の砂』全体を貫く主題のことについて考えてみたい。このことを読み解くカギは、巻頭歌を含めた冒頭の一〇首、いわゆる「砂山十首」を吟味することにあると思われる。

次章ではこの問題について論考する。

**第五章 東海歌の成立と啄木にとつての『砂』** 五章仕立ての『一握の砂』の第一章「我を愛する歌」は、この歌から始まる。

「東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる」  
(以下、東海歌)

その一般的な評釈は、「地球のはるか東の方に明るく青々と広がる海、そこに浮かぶ緑なす小島、その波打ち際の白い砂

地で、私は泣きながら蟹とたわむれ、悲しみをまぎらすことだ。」とされ、「東海」↓「小島」↓「磯」↓「白砂」とカメラのズームアップを駆使するかのような、「の」という字句の繰り返しに凝縮された力業が強い印象を与え、朗誦性・色彩性・感傷性に富んでいて、日本人にもっとも愛された歌の一つとされている。

しかしながら、この歌の成立過程を知ると、単なる叙景歌ではなかったことが明らかとなる。小説家として名を成そうとして、最後の上京を果たしたものの、書いた小説は売れず、失意に沈む中で、突然興が湧き上がってきて止まらなくなつた啄木が、一九〇八年(明治四一)年六月二三日夜からの三日間で計二五四首もの和歌を詠んだ中に、東海歌が含まれていたことはよく知られている。東海歌が詠出された前後の作品の流れを示し、この歌の位置づけをあらためて確認しておく。東海歌の前には、「野にさそひ眠るをまちて南風に君をやかむと火の石をきる」の歌があり、東海歌の後ろには「青草の床ゆはるかに天空の日の蝕を見て我が雲雀病む」、次いで「待てど来ず約をふまざる女皆殺すと立てる時君は来ぬ」と、一読して奇怪で異様な歌々であるが、『一握の砂』を代表する歌はこの流れの中で生まれたのである。その背景にあるのは、明治四一年四月二十七日、「新しき文学生活の運命を極度まで試験する決心」で上京したものの、自分の思うようには小説が書けない、という事実である。小説の執筆を始めたのは五

月上旬のことであった。啄木は奮闘して「菊池君」「病院の窓」「天鷲絨」「二筋の血」と定稿だけでも四篇の小説を書いたが、活字になったものはないという惨憺たる結果に沈んだ失意の中で、この歌は生まれたのである。

この時の啄木の状況を、精神科医・福島章は、「意識性や論理の支配する通常の状態ではなく、自我の機能が一時的にかなり弱まって、イメージや象徴のレベルでものを考える幼児の白昼夢の心性に似ている」のだという。

筆者の意見は、この診かたとは異にするものであり、拙著「啄木の精神分析」で詳述したように、啄木の持つて生まれた性格である神経質の濃厚な関与が疑われる。すなわち、小説の構想に必要な、精緻な言語構築に集中するあまり、思考や表現の領域に影響が及んだものと思われる。一読して、文章構成自体は保たれており、奇異な字句の組合せの結果としてその意味や内容が突飛になったものと考えられ、白昼夢の心性に代表されるような、荒唐無稽な表象からは免れているからである。生来の神経質性格としての素因が濃厚にあらわれている可能性を示す、もうひとつの側面は、次のように明快な意味を持つ歌が、突飛な内容の歌に前後するようにして、一定の割合で現れているからである。

「頬につたふ涙のごはず一握の砂を示せし人を忘れず」「君が名を仄かによびて涙せし十四の春にかへるすべなし」「故きとの君が垣根の忍冬の風をわすれて六年経にけり」

歌が詠まれた当時の状況と前後の歌から判断して、当初は噴出する歌のイメージを、「の」という助詞を連ねて一気にからめとった観のあるのが、この東海歌なのである。啄木がこの歌に特別な思いを込めたと推測したのは、近藤典彦である。その根拠として近藤が指摘したのは、一九〇八（明治四一）年の歌稿ノートである「暇ナ時」の最終頁にある、啄木自らの手になる五行書きでの墨書である。『一握の砂』冒頭にみられる三行歌ではなく、五・七・五・七・七のいう短歌古来の韻律に忠実に、五行で書きつけられたものである。その時期を近藤は、第一次『仕事の後』の編集に取りかかった一九一〇（明治四三）年四月四日前後と推測している。

ここで東海歌の歌意について、あらためて確認しておきたい。叙景歌として表面的に捉えたものが、下記の①、生活歌として深く捉えたものが、下記の②である。叙景歌としての捉え方①：はるか東の方に明るく青々と広がる海に浮かぶ緑の小島、その波打ち際にひろがる白い砂地で、私は泣きながら蟹とたわむれ、悲しみをまぎらすことだ。生活歌としての捉え方②：アジアの東の海上に位置する日本の中の東京の片隅で、「時代閉塞の現状」と闘おうとする私は、「敵」は強大なために対抗の手立てを見出せぬまま、「意に満たない生活をして」いるが、そのような暮らしの中のかげがえのないのちの刹那の記録として、短歌を詠むのだ。表面的には単なる叙景歌であるが、生活歌として深読みすれば、文学的

立身に苦闘する自らの姿を投影したこの歌を、啄木は第一歌集である『一握の砂』の第一章「我を愛する歌」の冒頭に据えたのである。『仕事の後』を『一握の砂』として編集する過程で、啄木のするどい社会意識が、前記②のような生活歌としての歌意を重厚なものとし、前章で論じた「我を愛する歌」の章末歌、および『一握の砂』全体の巻末歌との呼応関係を見出して、それぞれを意図した箇所に掲げること、『一握の砂』の歌意を不動のものとしたのである。

この東海歌につづく二首目は、以下の歌である。「類につたふ なみだのごはず 一握の砂を示しし人を忘れず」ももとは東海歌の直前に詠出されたものであったが、『一握の砂』では、巻頭歌の次という、歌集のその後の展開のカギを握る、二首目にこれを置いている。

叙景歌としての捉え方 ①：類を伝い落ちる涙をぬぐおうともしないで「一握の砂」を示し、時間は有限だからこそ、一瞬一瞬のいのちを充実させて生きて行こう、と教えてくれた人のことを私は忘れない。生活歌としての捉え方 ②：この歌集『一握の砂』の作者は石川啄木。いつまでも忘れないうでいてほしい。

歌集『一握の砂』の本文は、この二首が掲載されている三頁目からはじまる。頁をめくると、四首。この頁から三首目の歌が始まり、七頁目までに計八首が掲載されているが、この八首は、家を出て浜辺に行き、自らの不全感に涙して戻っ

てくるという、ドラマ仕立ての連作である。冒頭の東海歌から歌集七頁目までの十首は、総称して「砂山十首」と呼ばれる。その名の示すとおり、一首目に「白砂」、二首目には「一握の砂」の文字が踊り、四首目以降は「砂山」「砂の玉」「砂」の文字が連続する。そして、装幀を凝らした表紙の書名も、文字どおりの『一握の砂』である。

次章では、砂を用いる精神療法である「箱庭療法」の知見を参考にして砂山十首を読み解いて行く中で、啄木が託した「砂」の寓意について考えて行きたい。

**第六章 「砂山十首」の世界と「砂」の寓意** 前章までに、啄木がこの歌集にこらした編集の妙を、その歌論と対比させつつ論じてきた。本章では、「砂」そのものの持つ寓意を、まず精神療法の視点から読み解いていきたい。

砂は、精神療法のひとつである箱庭療法における、基本的な道具立てのひとつである。砂が、心理治療の展開の中で重要な意味を持つばかりでなく、治療的な効果を持つ存在であることは、古くから知られている。

ドフリース・編の「イメージ・シンボル事典」(一九七四年)をひもとくと、砂の象徴的意義としては、以下のようなものがとりあげられている。A. 無限。数えきれないほどの数を表わす。B. 希望。浜辺の連想から、溺れることのない安全性を表わす。C. 時間。砂時計の連想から。D. 不毛・徒労。砂漠の連想から、行けども尽きぬ砂の連続。E. 忍耐・勇氣。

水に抗するがゆえに。F. 不安定さ。浜辺にある岩との対比。

G. 小宇宙。小さい世界。H. 感受性。中道泰子は、治療素材としての「砂」が喚起するイメージを詳細に検討している。

それによると、砂は「地」のイメージを喚起させるものであるが、その捉え方には「砂漠」と「大地」のふたつがあるという（箱庭療法の真相」（二〇一〇））。木村晴子は、箱庭制作過程のなかで砂が果たす治療的役割について検討している。

「砂」という素材が持つ「流動性」は、「可塑性」と表裏一体のもので、そのことが治療上有利に働くとする。すなわち、「その感触によって人間の深い部分に訴えかけ」、「砂との戯れは心の防衛を解いて、人をリラクセスさせる」結果、「こうした生理的刺激に助けられながら、緊張がほぐれ行く中で、少しずつ自己の内面の深い世界を表面に出せるようになる」のだという（箱庭療法」（一九八五））。さらに塩田泰子は、「砂」という素材は「水」とともに個人の内的基盤であり、身体により近い存在である一方で、その可塑性は崩壊感にもつながり、造形しようとしても自由にならないという存在を知らしめることにもつながるといふ（箱庭療法における砂と水による表現にみられる特徴に関する研究」（一九九四））。

これら一連の「砂」に関する考察を通覧した上で、冒頭の「砂山十首」の分析をもとに、歌集『一握の砂』における「砂」の意味について考えてみたい。一首目の東海歌を、叙景歌ではなく生活歌として捉えようと、歌の中の「白砂」は、アジア

の東海上に位置する日本の中の東京の片隅という「場」を示すと考えられるが、二首目の「一握の砂」は、歌集そのものを指し、啄木の洒落つ気を示したものである。歌集をめくって冒頭の二首のあとに現れる、四頁目から七頁目までの八首は、家を出て浜辺に行き、そこで過ごす時間の中で自らのかかえる不全感に涙して、再び家に戻ってくるという、ドラマ仕立ての連作である。

用語としての使われ方をみると、四・五・六・七首目は「砂山」、八・一〇首目は「砂」、九首目は「砂の玉」であり、主題を呈示した一首目とコーヒープレイクのような二首目の後の、場面転換として重要な三首目に「砂」という文字は出て来ず、ドラマ仕立ての連作が一〇首目まで続く。歌集の中に現れる「砂」の意味を「イメージ・シンボル事典」のそれと対比させてみると、A・B・C・D・G、そして歌集全体を覆う気分としてのHがとり上げられており、それらの「砂」は情景が展開される「場」としての意義を逸脱してはいないようにみえるが、啄木が歌集編纂において凝らした創意工夫の巧みさを思うと、単に情景が展開する「場」としての位置づけだけを、「砂」に託したとは考えづらい。

一歩進めて筆者は、啄木が生きた明治時代後半の「都市住民」の象徴として「砂」を位置づけ、「砂山十首」を編んだと考えたい。そのように読んでいくと、「砂」は住民、「砂山」は住まい、「砂浜」は都市社会と考えることが出来る。では、

「砂の玉」とは何だろうか。乾いた砂は軽く、握ろうとしても、指の間からサラサラとこぼれ落ち、決してまとまることはない。それがひとたび水を吸えば、握って球を作れることもできる。それほど水を得ることは望めないが、涙で、乾いた砂を湿らせることは出来るかもしれない。生命の象徴である涙を吸って玉となった砂には、その涙の源となった生命の重さが宿り、あたかも啄木にとつての短歌のようにすら思えてくる。

明治という時代のなかで急速にすすんだ近代化の結果、就業構造が変化して、仕事や学びの場を求めて地方から都市へと人口の集中がすすみ、暮らしのかたちには大きな変化が起こった。先祖代々親の仕事の子が受け継ぐ、濃密な人間関係の中で地方での暮らしとは対極的な、会社勤めの中で日々の糧を得る、都市の勤め人としての暮らし。公共交通機関を用いての通勤という新しい移動の形態、見知らぬ人々が、密集した空間で飲食する空間を共有する盛り場、社業という共通の目的のもとになりたつ会社という目的志向の人々の集まり。今見れば至極当たり前のことであるが、明治という時代にあつてはすべて、新しい暮らしのあり方だったのである。

その中で繰り広げられるのは、仕事の喜びばかりでなく、その周辺に漂う哀感。愛しあうばかりではなく、時には離反し、もめ事も避けられない家族。強い絆が、時にはストレスにもなるという、家族の間に流れる微妙な心理。いわば明治

という時代の新人類としてのサラリーマンの生活の裏表を、その心理をこまやかにすくい上げて歌に定着させたのが『一握の砂』の大きな特徴であることは、啄木自らが考案した以下の広告文からも明らかである。「著者の歌は従来の青年男女の間に限られたる明治新短歌の領域を拡張して、広く読者を中年の人々に求む。」（創作）一九一一（明治四四年）二月号）

啄木が意識的に広げようとしたのは、「中年の歌」の領域である。自らも青年時代に陶醉した与謝野晶子の『みだれ髪』が切り拓いた。パワフルな青春賛歌の領域は、その恋愛中心性ゆえに若者の歌にならざるを得ないという限界を抱えていたが、啄木は、仕事の苦しみを詠い、家庭の軋轢や子育ての楽しさと悩みを詠んで、中年の暮らしの哀感を、時には小さな幸福感を、三十一文字の中で表現することで短歌の領域をひろげようとしたのである。

### 第七章 まとめく都市の孤独と望郷の主体としての「われ」

『一握の砂』のねらいは、「中年の歌」の領域の拡張である。その関心が恋愛に集まりがちな若者とは異なり、中年は、仕事上の苦楽をはじめとして、家族・子育て・介護など、暮らし全般を担うことに心を砕かなくてはならない。啄木は、市井の勤め人として世の中を見つめるという立場を終生くずさず、都市の孤独や、それと表裏一体の関係にある望郷などを、短歌の領域に取り込み、青春を卒業した中年ならではの暮らしの哀感を詠い続けた。

都市住民が砂に例えられるなら、砂浜は都市空間、波に洗われる浜辺のあり様は、さながら勤め人の一日を想起させる。見開き二頁ごとに配された、三行書きの短歌の文字列の多様な長さは、波に洗われる浜辺の姿を思わせ、頁をめぐる度に、新しい波が寄せてくる。章を終える頁は必ず偶数で、その頁の右半分に一首のみが配される。左隣りの奇数頁には章題のみが中央に印され、頁をめくると新しい歌が現れる。そのようにして、五章七節からなる『一握の砂』は読まれて行くのである。

近代化の時代は、「われ」の重視の時代でもあった。自意識の広がりには、青春・病気・貧困・都市の孤独と望郷の切実なほど、主題となり得る領域の拡大へとすすんだ。啄木短歌の特徴は、その自意識が捕えた「切れ切れの生活断片」に言葉を与え、それにつつまれる心理を表わし、その時々々の「心の姿」を明晰かつ繊細に詠ったことにある。その意味で『一握の砂』は、波の打ち寄せる砂浜という社会に、「砂」たる民が描いた壮大な模様なのである。

「意象言」という分析手法で、夏目漱石の『夢十夜』の特徴を「第一夜」、「第二夜」、「第五夜」、「第七夜」から解析する

洪逸辰

はじめに

夏目漱石は1867年に生まれている。亡くなったのは1916年である(享年49)。「夢十夜」という短編集は、神秘的なニュアンスや、謎めいた展開などで有名な作品である。「百年の後、百の博士は土と化し、千の教授も泥と変ずべし。余はわが文をもつて百代の後に伝えんと欲するの野心家なり」と言った夏目漱石は、去年の2016年で、亡くなった年から数え、ちょうど百年が経った。では、百年後の私たちは、ちゃんと夏目漱石の『夢十夜』を理解したのだろうか。百年來『夢十夜』を分析した研究者は多いが、「意象言」という文学分析手法で『夢十夜』の謎を解いた研究者はめったにいなかった。従って、筆者はこの方法で、『夢十夜』を解析していくが、本稿の長さも考慮し、本稿は『夢十夜』の「第一夜」、「第二夜」、「第五夜」、「第七夜」のみを分析する。

先行研究の整理

まず、本稿の先行研究は、二つの方向がある。一つ目はGEMという論文サーチサイトで、『夢十夜』の論文を探し、整理す

ることである。二つ目は「意象言」という文学分析手法について、論理的に繋げることである。

現在、『夢十夜』と関する論文は大量に研究されている。研究者の目線も様々あり、『夢十夜』は性欲を描写された小説だという評価がある。なお、視点構造や、時間構造、語りの変化、第三項理論、精神と医学理論、詩経及び他の作品と比較することなどからの分析の仕方もある。以上言及された分析手法は、「意象言」という分析手法に含められている。では、ここからは「意象言」を説明し、論理的かつ明確に解析をするつもりである。

一、「意」と「象」の定義

「意象」という言葉は、「意」と「象」で組み合わせられている。「意」とは、創作者が美意識に対して感じた意義や、意思、意志、意味である。端的に言えば、創作者がどのような意思を読者に届けたいということや、自分にとってどのような意義があるということである。つまり、「意」というものは、「知」、「情」、「意」、この三つの総合的なものである。ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルというドイツの思

想家は、「意」は題材や、内容、形式に感性と理性を同時に与えられるものであると認めていた。

西洋文学の「意象」は「Image」で、本来は心理学の固有名詞である。ルネ・ウエレックとオースティン・ウォーレンの見解なら、「意象」は感覚の経験、或いは記憶である。嗅覚や、味覚、触覚、視覚、聴覚、または潜在意識にある心の感覚である。この「意象」という方法は、その後文学分析で使用されるようになった。「意象」分析は文学のみならず、様々な芸術も含められている。彫刻や、映画、絵、ダンスなど、表現された心理の映像は、この方法で分析することができる。しかし、ここに重んじられた「意象」は主に「意」ではなく、「象」のことである。

簡単に言えば、創作者が抽象的な「意」を具象的な「象」に与えることだ。例えば、「あなたを愛している」という「意」を届けたいから、「バラ」を「象」と選んで、自分の情熱的な心を表すことである。

二、「意」と「象」から「言」の定義を見る

王弼わうひつという中国の文学分析家は『周易略例』しゅうぎりやくれいという本に、「意」と「象」と「言」を論及していた。

言出於象、故可尋言以觀象・象生於意、故可尋象以觀意、意以象盡、象以言著、故言者所以明象、得象而忘言・象者所以存意、得意而忘象。

簡単に翻訳すると、『象』は『言』にあり、ゆえに『言』

を尋ねたら、『象』を分析することができる。『意』は『象』にあり、『象』を尋ねたら、『意』を探することができる。」という意味である。つまり、意がないと、象がなくなり、象がないと、言がなくなるのである。

「意」と「象」と「言」の関係が明確になったが、「言」というものは、いったいどのようなものである。劉勰りゅうききょうという中国の文学分析家は『文心雕龍』ぶんしんたうりゆうという本に、「言」を説明している。言語は自分の意志を伝わり、最も効率的なメディアである。でも、創作者のロジックや知識、感情、美意識、技術によって、限界がある。一方、創作者がすでにきちんと伝わっても、読者の能力によって、二つ目の限界がある。

したがって、「言」ということは、言語だけではなく、「形式」のことである。芸術分野でいうと、文学や、彫刻、映画、絵、ダンスなどのメディアの中で、一つを選択することである。その中でも文学でいうと、現代詩、俳句、川柳、小説のいろいろな文体の中で、もう一つを選ぶことである。当然として、形式は更に詳細に分類することができる。また、文章の種類、構造、言葉遣い、修辞技法、ニュアンスも、「言」の範囲です。

そのため、前節で論及された「意」と「象」以外の形式は、「言」のことである。

三、「意象言」と『夢十夜』の現在の研究

夏目漱石は日本の文学界の偉大な作者のため、死後百年間

に作品を解析した研究は非常に膨大である。CINEMA という論文サーチサイトだけで、『夢十夜』に関する研究は300編ある。都合上、本稿は一部の研究だけを比較している。

現在、『夢十夜』に関する研究は、視点構造や、時間構造、語りの変化、第三項理論、精神と医学理論、詩経及び他の作品と比較などの分析方法がある。「意象言」の分析方法とみると、以上言及された方法は、全部「言」のことで、つまり、形式のことである。

## 分析の方法

この節は前節で論及された「意象言」の文学分析方法について説明していく。ただ言葉で説明することは曖昧模糊かもしれない。しかし、ここで「意象言」を用い、超短編小説を分析する。今回扱う超短編は東京新聞が挙げた第20回300文字小説賞の最優秀賞である。原文は以下である。

「散歩道」 印東由紀

十年前、大きなお腹を抱えて一人で歩いた道。

九年前にはベビーカーを押して歩いた。

八年前には手をつないで歩き、七年前には再び大きくな

ったお腹を抱えて歩いた。

それから、両手をつないで歩くようになり、さらに人数

が増えて二本の手では足りなくなつた。

春にはアゲハを追いかけて、夏にはセミの羽化を観察した。

秋にはバツタやカマキリを捕まえた。  
いつも誰かと一緒だった。

今日、一番下の子が保育園に通い始めた。

園まで送った帰り、私は久しぶりに一人で歩いた。身軽  
だな。

そう思った時、前方で蝶が舞った。

「まあ、見て！ ギフチョウよ」

興奮気味に声を上げた私に、通りすがりの初老の女性が  
クスリと笑った。

一、「象」と「言」の展開で「散歩道」を分析する

まず、「散歩道」で選択された象は「年」、「子供の面倒を見る細事」のことである。言というと、この小説で使われた漸層法である。

十年前に妊娠した↓九年前に初子が生まれた↓八年前に初子が大きくなった↓七年前にもう一度妊娠した↓この後に次子が生まれた↓三回目妊娠した↓子供が育った↓末子が保育園に入った↓(小説の転折) 以前、24時間ずっと子供の面倒を見ていた。子供が全真保育園や学校に入った後、母親は余裕ができた↓散歩道で自分の子供が大好きな昆虫を見た↓習慣的に興奮気味に声をあげたが、子供たちはもう24時間自分の側にいない↓経験がある初老の女性は同感して笑った。

特に作者は年と年の移り変わりを散歩道で一貫した。

二、「象」と「言」の展開から、「散歩道」の「意」を推測

する

この短編小説は列叙法で様々な子供の面倒を見る細事を描写している。四季にずっと子供と一緒に暮した。春にはアゲハを追いかけたり、夏にはセミの羽化を観察したり、秋にはバッタやカマキリを捕まえたりする。作者は冬を書いていなかったが、最後のギフチョウは春の蝶々だから、すでに何年間か過ごしたことを暗示した。主に10年間毎日24時間三人や三人以上の子供を育て、いきなり余裕ができ、少し寂しく、慣れていない母親の気持ちを描写した。特に自分が身軽になったことと文末に初老の女性が同感してくすりと笑ったことから、母親はそこまで悲しい気持ちではなく、ただまだ慣れていないだけである。むしろ、十年分の幸せな人生であろう。

### 三、「散歩道」の「意」と「象」と「言」

以上から、ここは「散歩道」の「意」と「象」と「言」を簡単にまとめる。

意… 10年間毎日24時間子供を育て、いきなり余裕ができ、少し寂しく、慣れていない母親の気持ちを描写した。

象… キャラクターたち、子供の面倒を見る細事、年と四季の移り変わり、背景、散歩道。

言… 短編小説の文体、構造、言葉遣い、列叙法や漸層法などの修辞技法。

後節はこの節の方法を用いていくつもりである。

## 調査の結果と考察

『夢十夜』は繊細な作品なので、選択された記号や象徴が大量に使用されている。『夢十夜』の特徴といっても、全部解析しても、共通点ではないなら、特徴と言えないであろう。そのため、本稿は「第一夜」、「第二夜」、「第五夜」、「第七夜」の共通点について分析する。

一、「象」と「言」の展開で『夢十夜』の共通点を分析する

「象」が作者が選択した記号というと、その記号をどのように展開するというのは「言」であろう。本稿は以下三つの共通点を説明していく。

### 1、色彩の遣い

四つの作品の中で出ていた象徴的な人物やもの、色彩の明るさによって、意味が異なる。端的に言えば、白は希望で、黒は絶望という象徴がある。

以下は作品の中で描かれている黒である。

第一夜―真黒な瞳、真黒な眸、黒眼の色沢。

第二夜―闇の影、黒いもの。

第五夜―真黒な眉。

第七夜―黒い煙、黒い水、黒い波。

以下は作品の中で描かれている白である。

第二夜―女の真白な顔、真珠貝、月光、星の破片、真白な

百合、暁の星。

第三夜―鷺。

第五夜—白い馬、(女の) 白い足。

第七夜—真白な泡、白い半巾。

希望という漢字は、もともと希少な望み、闇の中で唯一の光だという意味である。四つの作品で、描かれている大半は黒い印象がある。以上言及された白いところも当然として更に強調されている。例えば、夜に走っている白い馬に乗っている女の白い足や、作者の隠喩が見え見えであろう。

他の色遣い、紫や、蒼、赤、唐紅、蘇枋、井守の腹の色とか、作者の意図は当然としてあるが、非常に細かいニュアンスで、整体的な共通点ではないので、ここでは言及しない。

## 2、光線の転移

夏目漱石はこの四つの作品で描いた光線が、至って繊細である。以下は時間の推移について、光の変化を書いていく。

第一夜—明るく見える女の頬や唇(光線がある) ↓ 静かな水面が動いて写る影を乱す(暗くなる) ↓ 真珠貝で掘って月光が貝の裏に光っている(闇の中で光がある) ↓ 唐紅の天道が出てくる(全体的に明るくなる) ↓ 百合や暁の星を見る(視線が更に集中し、光を注目している)。

第三夜—青田を見ている(光線がある) ↓ 鷺の影が時々闇に差す(光線が怪しい) ↓ 森に入っている(暗くなり、緊張している) ↓ 子供は鏡の様に光っている(現実の光線ではないが、主人公の心情の変化が見える) ↓ 辰年と似ている闇の晩(暗くなり、罪悪感が出ている)。

第五夜—大将を描く(光線がある) ↓ 篝火(不審な光線、雰囲気が訝しくなる) ↓ 女が馬に乗っていて、空が薄明るい(光線が明るくなり、希望を懐いている) ↓ 真闇な道で転んで、深い淵に落ちる(真暗になり、希望が滅びてしまう)

第七夜—焼火箸の様な太陽が出る(光線がある) ↓ 空が曇り、船が揺れた(光線が暗くなり、社会という船が揺れている) ↓ 星を眺めている(夜空が美しいが、関心の余裕がない) ↓ 黒い波の方へ静かに落ちて行った(光線が真闇になり、後悔と恐怖を抱いており、死んでしまう)。

## 3、超現実的な描写

四つの作品で、様々な文学手法が表現されているが、普通の比喩や他の修辞法も、多くは使われていないので、特徴と言えないであろう。この作品の中でよく使われ、他の文学作品と異なり、特徴と言えるのが、超現実的な描写と思われる。以下は説明していく。

予知 ..

第二夜—女は百年後必ず会えることを予知した。

第三夜—子供は鷺の鳴き声が聞こえることや体が重くなることなどを予知した。

第五夜—女は恋人の主人公と大将との話を予知した。

第七夜—明確な描写がなかった。

他の超現実的な描写 ..

第一夜—常識では、人間は百年後に必ず死ぬはずで、物語

の最後は魂を引き離すことかもしれない。

第三夜―理由は第一夜と同一である。

第五夜 視点を引き離して、恋人を見ると、最後に天探女は敵になる。視点の移転は文学の手法でそんなに珍しくないが、殆ど客観的な描写が多い。特に主人公は物語の中で、恋人が見えないはずである。

第七夜―「身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない」という描写がある。

この本は「夢」である。現実主義な描写が合理的ことである。このシリーズの作品はたいがい暗く、怪しい風格があるので、特に予知と視点の引き離し、神秘感を増やすのであろう。

二、「象」と「言」の展開から、『夢十夜』の「意」を推測する

第一夜…第一夜の中心は「執念」である。つまり、登場人物の女は主人公の「執念」である。とりわけ小説中の「百年」である。待っている百年に、主人公は何度も女の話を疑った。人間の執念もこのようなことであろう。「執念」と「希望」は表裏一体のものである。執念を懐いている人々は心の中で必ず希望や期待がある。堅持すると、絶対に何かを得るはずだという考え方である。小説の最後は百年が経って、主人公は新たな生活を迎えるが、作者は結局にも書かなかつた。執念はいいことであるか。或いはわるいことであるか。

これは作者が読者に考えさせる余韻であろう。

第三夜…第三夜の中心は「罪悪感」である。つまり、登場人物の子供は主人公の「罪悪感」である。第三夜も第一夜も「百年」という象を使っていた。百年は当然として長い時間を象徴している。誰もが悪事をしたことがあるが、一生覚えていた人はあまりいないであろう。「罪悪感」と対することは「恨み」である。罪悪感他人に悪いことをした時に、心から出ていて、過失をしたときに、自分の心を責める気持ちである。一方、「恨み」は他人に悪いことをされた時に、心から出ていて、他人の過失を責める気持ちである。でも人間という生物は、自分が他人にした悪いことを忘れやすく、他人が自分にした悪いことを忘れにくいものである。この忘れやすい罪悪感が作者が描きたかったことであろう。

第五夜…第五夜の中心は「運命への憎み」である。登場人物の大将は現実の社会を象徴している。女は命を犠牲にしても守りたい自分の夢のことである。天探女は自分を弄った運命のことである。現実の社会に「妥協しないと、殺される」を選択させられても、妥協しなかった。白い馬が走れないなら、自分も文句を言わないはずである。ただし、そこまで頑張ったのに、ただ最後の一步で、運命に弄られたのは許せないことであろう。ゆえに、天探女が自分の敵になることは、「運命への憎み」であろう。

第七夜…第七夜の中心は「社会を生き抜く意志」である。

主人公が乗っている大船は時流の社会である。そのため、最初に話した内容の「此の船は西へ行くんですか。落ちて行く日を追懸ける様だから」はこの社会が悪い方向に向かって行くことを懸念している作者の考えである。最初に主人公に話しかけられた男は社会にいる中華思想の道家のように消極的な人々の考えである。白い半巾で涙を拭いている女は自分と同じ考え方を懐いている人々である。異人とサロンの二人は社会で生きているが、局外者みたいな人々である。理想家の主人公は例の通り黒い煙を吐いている大船を離れた後に、「自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかった」ということを悟った。どのような場合や状況でも自殺しないで、社会を生き抜く意志は作者が伝えたかったことであろう。

### おわりに

以上から、ここは『夢十夜』の「意」と「象」と「言」を端的にまとめる。

意… 夢十夜は人生に関する苦しみ 第一夜の執念や、第二夜の罪悪感、第五夜の運命への憎み、第七夜の社会を生き抜く意志などの課題が描かれている。共通の課題は希望と絶望であろう。

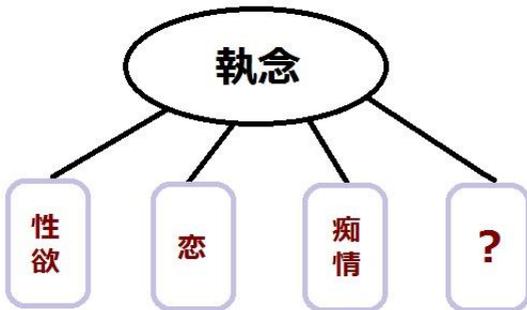
象… 四つの作品の象は分散しているので、共通点というところと色彩の遣いが最も著しいところであろう。希望は白、絶望は

黒を象徴している。

言… 言もいろいろな観点がある。先行研究で言及された視点構造や、時間構造、語りの変化、第三項理論、精神と医学理論、詩経及び他の作品と比較することなど、全部が夢十夜の言である。前節で論及された光線の転移や超現実的な描写も当然として言のことである。

本稿では、「意象言」という分析方法は『夢十夜』を解析することができるかという問題を解明した。きちんと分析することができるとは、さらに多面的な観点で『夢十夜』の謎を解明できることが明らかにな

現在の研究で、『夢十夜』は性欲を描写された小説だという評価がある。ただし、このような観点は主観的な考え方になるかもしれない。この図を見たら、さらにわかりやすくなる。第一夜を例とすれば、夏目漱石は性欲を描きたかったのかも、あるいは文脈のみで見れば、ただ執念のことだけを描写した。例えば、同じ双生児もさまざまな場合がある。結合双生児



や、同性の一卵性双生児、同性の二卵性双生児、異性の二卵性双生児、または特殊な卵性の双生児の可能性もある。作者が双生児のみを書いただけで、結合双生児を推測することは脳内補完かもしれない。そのため、『夢十夜』が性欲を描写した小説だという評価を認められないのである。

都合により、本稿は『夢十夜』の「第一夜」、「第二夜」、「第五夜」、「第七夜」のみを分析した。今後は「他の六夜」、または他の「象」と「言」を更に詳細に分析することもできるであろう。

### 参考文献

日本語(五十音順)

岩田晴之(2017年)『へ教育デザインフォーラム学生発表会Ⅰ C T活用で対話的な言葉を引き出す―漱石『夢十夜』とハーゲン作品を比較して文学を享受・共有する授業―(ポスター発表の要旨)』横浜国立大学大学院 教育学研究科

河原晴樹(2016年)『漱石文学の視点構造―『夢十夜』を軸として』三重大学日本語日本文学研究室

小山千登世(2016年)『第三項理論』に支えられたファシリテーターとして…『羅生門』・『夢十夜』『第一夜』の授業実践報告』日本文学協会

齋藤孝(2016年)『夏目漱石の人生論 牛のようになんぞ進め』草思社

佐藤裕子(1994年)『『夢十夜』小論』フェリス女学院大学

高橋正人(2016年)『『夢十夜』における時間構造について―時制と相(アスペクト)をめぐって』解釈学会

田中実(2016年)『現実と言葉で出来ている』『『夢十夜』

『第一夜』の深層批評』都留文科大

松下彩(2015年)『夏目漱石『夢十夜』論―語りの変化から見る『夢十夜』』信州大学人文学部人文学科松本和也研究室

南富鎮(2016年)『戦後文学拾遺―『夢十夜』、『蜜柑』、『走れメロス』そして浦島太郎』静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会

【300文字小説】第20回受賞作 東京新聞  
<http://www.tokyo-np.co.jp/article/novel/300/1st/OK20170702000180.html> 2017年7月14日

中国語(苗字画数順)  
丁威仁(2006)『意象論』收於『閱讀現代詩―內在形式與外在關聯』東海大學中文系

丁威仁(2008)『語言、意象與結構―一論新詩批評的三項基本法則』《海南師範大學學報》(社會科學版) 第21卷總98期

張健(2008)『文學概論』五南出版社

黃淑貞 (2006年) 《以石傳情——談廟宇石雕意象及其美感》  
國立臺灣藝術教育館

英語 (アルファベット順)

Rene Wellek, Austin Warren (1956) : Theory of Literature

New York: Harcourt, Brace

Thomas F. Cash, Timothy A. Brown (1981) : T. A. Body image  
in anorexia nervosa and bulimia nervosa: A review of the  
literature. Behavior Modification

小説は応募7篇、数は多くないが内容に一定のレベルがあり、また例年に比べても異色作が目について興味があった。

**島田実里**「足ほしのうた」がやや抜けていた。小学校の運動会も開かれた広い砂浜。その砂浜が消えてしまった故郷の海を眺めながら半生を振り返る物語。足ほしのうたと呼ぶものを歌いながら弟と遊んだ日々、ドモリ癖があつて無口な少年は砂浜の運動会は中学校にもある

と思ひこんで口に出しみんなの物笑いになる。その砂浜の思い出を胸に集団就職で上京、夫婦だけの小さな町工場に住みこんで十年間夫婦の親身な励ましで整備士となり、大手の車の販売会社に移るが苦手なセールスを担当して三十数年を無事に勤め上げる。

そんな半生の物語だが砂浜の思い出は、少年の人生に影を落とす。ドモリ癖をひきずりマイナス思考に苦しみなが

らそれをバネに励み、大会社のセールスとなつてその影を克服するという話の流れは、町工場の夫婦や会社の先輩の善意に支えられて甘口の人情話めくが、それが主人公の手柄や努力の反映として読めるので違和感はない。砂浜で始まり終る構成が生きている。児童文学と銘打つて入選した作者の「たまげだタゲシ」に通ずるファンタジーを感じるが、昭和という時代や人への郷愁が砂浜の話にマッチして、より内容のある物語としてしみじみとした情感を誘われる。

**日高光**「ドラーマー」。働き盛りの夫に突然家出された妻と息子。妻は旅館の仲居として働き、息子は仲間とバンドを組みドラーマーとして身を立てる夢を持つ。夫の失踪は営む焼鳥屋の不振と女によるが、もとは夜昼なく働く妻と夫のズレ違ひ生活だった。それは息子への放任にも通じた。学校面談で息子のドラーマー志望を知りいさかひになつた翌朝息子も姿を消す。生活のため懸命に働きながら夫ばかりか息子にまで逃げられるという

妻や母としての女の皮肉なめぐり合わせに物語的興味を誘われる。姿を消して三年、ドラーマーとしてがんばっているという息子の手紙と五枚の一万円札が届く。物語はこの白い封筒の場面から始まり救いのあるオチがついて終る。安定した筆致で話の運びの手際もよく、構成の起承転結もある。残念なのは話のサワリになる転の部分、息子の失踪から三年間の女の葛藤が説明中心で終始しているところ。家族に去られた彼女の不条理な悲しみがもう少し書きこまれれば、冒頭の息子のしわの寄つた一万円札がより効果的になつたと思われる。

**洪逸辰**「眠り盗人」。鉛筆を握つて深夜の街を不眠の鳥人である余が徘徊する幻想譚。非現実の異色作で、午前3時の街を行き交うのは動物や植物を擬人化したものたち。眠れぬ夜をうごめく者の奇怪な雰囲気は漢字熟語を多用した修辞で描く。眠れぬ子供がいるのは眠りを盗む姑獲鳥(うぶめ)のせいだという設定で余は眠りの森に分け入り、眠りの巢

から眠りを貪るといふような話の流れだが、不眠の夜のリアリティをいかに表現するか、趣向を凝らした修辞や文脈で面白く読ませる。ただ日本語の語法がところどころ怪しく文脈の混乱がある。それが非現実の幻想譚であるほど細部の語法や表現の正確さを求められる。漢語の素養をうかがわせるだけに漢字熟語の不必要な多用も気になる。うまく整理すればもつと有効に作品の世界をひき立たせただろう。

**齋藤幹見「昔話」**。生まれつき全身の自由が利かず動かせるのは目線だけ。ディスプレイで意思を伝え人と疎通する主人公の現実。目覚めたらそこは異世界という出来事を期待する日常の中で、医師の勧めで書いた文章が出版社の目に止まり、女性出版者への初恋も経験して一本の詩集となり、さらに作家として認められてゆくという現実の物語になる。その物語はたぶん期待する現実の夢物語として主人公の冒頭の現実に戻るのだろう。主人公の苦境は想像と表現の世界

でのみ自由に解放される。だがそれは文学や芸術表現の本来的な意味でもある。そこにこの作品のリアリティがある。小説としては必要な細部がなく話の運びも唐突だが、たしかな文章の足どりにセンスがあり、昔話とした標題にもモチーフの深味を感じる。高校生の作品。

上記四篇、「足ほしのうた」「ドフマー」を選とし、異色作「眠り盗人」「昔話」を佳作とした。他では、地球の沙漠化でドームで覆われた都市の日常を描いた「スノーダンス」。近未来小説としてはシンプルな話のつくりだが雪を見たことがない少女の話としてまとめた着想と素直で柔らかな文章が心に残った。「怪盗への序曲」は世を騒がせた怪盗の二代目に成長する子ども時代の話。本筋までのあらましに終って話の面白さがない。意欲が先走って筆が及ばないという印象。「春に咲く花」はうららかな日差しの花畑で写真をとりながら母を追懐し、自らの生に思いを巡らす。小品だが心に沁みてるものがあつた。

評論は二作。興味深く読んだ。

**水蘭清「砂山十首」から読み解く「一握の砂」の世界**。作者は前作「啄木の精神分析」で「ローマ字日記」を中心にした分析から日記には神経質的傾向のある啄木が、その天才主義から脱却してゆく自己療法的な意味があることを考察した。今回はその天才主義から啄木がいかに生活者の視線に立つて作風を変化させ「一握の砂」の歌境に至ったか、その過程と歌集の意図を、冒頭の「砂山十首」の考察を中心に論じている。前段は生活者としての認識が啄木の歌を新詩社風のものから自然主義的な日常詠に転換させてゆく道筋が丁寧論じられ、そこから更に「いのちの一秒」という短歌観を「一握の砂」に結実してゆく過程、そして歌集「一握の砂」には明確な編集意図があることを「砂山十首」の分析を中心に具体的に考察している。三行書きの歌の配列や順序体裁に及ぶ具体的な指摘など興味深いが、作者も言う

ようにこれらの指摘や考察にはすでに近藤典彦による手厚い論考があるのでそこに重なる。興味を誘われるのはさらに後段の「砂」に関わる考察。砂には啄木の生きた明治時代後半の都市住民の象徴としての位置づけがあり、その都市空間が「砂浜」に当たるとはならないかという指摘には目をひかれるものがある。その辺にもう少し紙幅がほしい力作評論だった。

洪逸辰『意象言』という分析手法で、夏目漱石の『夢十夜』の特徴を『第一夜』『第三夜』『第五夜』『第七夜』から解析する。趣旨は長いタイトルに要約されているので余計な説明は省くが、「意象言」という分析手法の説明に、半分ほどの紙数を費やしている。しかし作者が言うように説明するほど曖昧な部分が出てくるがここでは立ち入らない。印象的に言えばこれは古典的でオーソドックスな手法である。「夢十夜」で作者が用いた手法に従えば、意は作者の意図であり、象はそれによって選択された記号

言はその記号の具体的な展開の方法である。意象言の分析例として示された超短篇の説明などは手際よく面白いが、肝甚の「夢十夜」の解析が大づかみで拍子抜けする。象や言を用いて色や光線などの使い方から「夢十夜」の意として執念（第一夜）罪悪感（第三夜）運命への憎しみ（第五夜）社会を生き抜く力（第七夜）などが示されるがそれを裏つける各夜の分析が要約的なので論として生きてこない。せつかくの手法への興味をもつと有効に生かしたかった。なお作者は小説でも夢の世界へ意欲的に挑戦している。

評論は前者を選、後者を佳作として評価した。

## 庸人さんに会った 酒を愛した詩人・片平庸人

今田 優 二

雨の日家に籠る。午後からの日課としているジョギングも、早々と諦めて読書をすることにした。古本屋でみつけて買っておいた、ある古典を読むことにする。古典は解説や注記、辞典などで、確めながら読み進むので、遅々として先に進まない。今度もひつかりとひつかりの連続であるが、とにかく読み進むと、ある一節まで来た。それは「そよよ」の囃子言葉で始まる短い一文だが、一句ごとに末尾に囃子言葉がつけられていた。

やな。な。や。な。な。そよな。等々、この囃子言葉と、間のとり方や、句間に流れる韻律と読後に残る余情——に、はてな——と、私は何か前と同じ情緒を味わったことがあると気付いた。誰の作品であったか、読後に流れるこの韻律と余情は、私の体が覚えていた。心の中の一本の糸を動かした同じ韻律だ。私は懸命に記憶を辿る、幽かな記憶の底から浮び上ってきたのは、これだ。「民謡 鴉追ひ」 片平庸人著

それは何年前だったか、或る本を捜しに古本屋に行った時のことである。目的の本はなかなか見つからず、本棚の

回りをグルグル廻り半日もの間、古本屋に居た時のことである。店の奥の隅に床から積み上げられた雑多な本の山があった。面白い本がみつかるかもしれないと、漁り始める。それこそ「掘り出し物」があるかもしれないとの気持だ。出てきたのが薄っぺらな冊子で、切れかかった茶色の表紙に「民謡 鴉追ひ」と手書きされていた。(後日、図書館に行つて分つたのだが、表紙がとれてしまい次の頁に題名を書いた紙を貼つてあったのだ)。

パラパラとめくり走り読みすると、何かもの悲しい旋律が流れている詩集で、独特の間と韻とが感じられた。民謡と書いてあるので、三味線の曲でもつけて、唄われていたのだろうかと思像した。後付けを見ると著者も、発行所も函館で、日付けは昭和一五年とある。ほう 函館で出版されたのかと興味が増した目次から「江差微吟」を見つけて読んでみる。

畑の日子し は

斜めに 寒く

婆が汽車みちや

尿してる ヨン。

この出だしの一章が気に入った。

何と言うおゝらかさ、素材さであるうか。

婆が汽車みちや 尿してる ヨン。の二行で映像がパァッと浮び上った。木古内側か、上の国側の田園の風景だ。私は幾度か、江差線沿いの道路をドライブしたことがあり、その時の風景が脳裏に映し出されてきた。

若い人達には理解出来ないであろう、女の人の立ちション姿は——。実は、昭和二十年代までは普通に見られたのだ。その頃の年配の婦人は、腰巻をまとっていた。着物の裾を一寸まくれば、立ったまゝでおしっこが出来るのである。多分庸人さんが汽車の窓から見たのは、立ち姿でおしっこをする老婦人の姿であつたろう。それをさりと詩にしてみよう。庸人さんがすごい。何か不思議な人に出会った気持ちになった。気に入ったので迷わず買って帰る。五十頁くらいの詩集である。すぐ読み終る。記憶に残ったのは、全篇にも悲しいような、淋しいような旋律が流れて、囃子言葉が随処に使われて、それが独特の「間」をかもしだしていたことである。

それつきり忘れていた。それを今古典を読んで思い出したのである。古典の韻律が、私の脳裏に庸人さんの詩を蘇らせた。本棚から捜し出して、再読してみる。似てる似てる、囃子言葉の使い方、間のとり方、流れる韻律。やはり

共通するものがあつた。やっぱりこれだったと頁をパラパラと捲っていたら、茶色に変色した新聞の切抜きが落ちた。「河野（高）が一躍首位」と大字の見出しが見えた。日本プロゴルフ選手権とある。古本屋に行く前の持主はゴルフ好きの人だったのだ。と最初読んだ時はチラッと見てそのまゝ挟んでおいたのだ。今度は二つ折となっているその内側を見てみる。びっくり仰天、何と、庸人さんの詩碑の除幕式の記事ではないか。これを私はみすみす見のがしていたのだ。「詩を愛し、酒を愛す」の横見出しに、「啄木小公園に詩碑」と縦の見出し。副題は、放浪の歌人片平庸人。未亡人らが出席し除幕とある。日付は、昭和四十六年九月十九日（日曜日）。北海道新聞は、片平庸人の詩碑建立の除幕式を、大きく取扱い報道している。記事の冒頭を抜萃してみよう。

『片平庸人——大正末から昭和二十九年の死まで三十年余民謡、童謡詩人として活躍した。仙台生まれ。昭和になって来函してからは北海道新聞函館支社整理部記者の多忙な中、詩を愛し、酒を愛した。』人そのものが詩（札幌市・中島伊織）といわれ、美しい文体、デリカシーな詩文は多くの愛好者を持つ。』と庸人さんを称えて紹介している。

何と何と、庸人さんの詩碑があつた、それもすぐ近くの啄木小公園にだ。大森浜は、毎度行く私の夏のジョギングコースだ。考えてみると確かに入口の所に小さな石碑があつたの

を思い出した。注目して見ることのなかつたあれが、片平庸人の詩碑だったのだ。

雨が上った翌日、自転車を飛ばして、さっそく行ってみる。あつたあつた、まぎれもなく庸人さんの詩碑だ。裾広で山形をなした自然石に詩文が刻まれていた。

北の海 にび色に かびろく

雲ひくく まろし 砂丘

見の かぎり 茫々

餓えがらす そが雪の上

たゞ あるく

ばつさ ばつさ ナ

これは「忍冬賦」昭和二十八年の作品の一章目である。死の一年前の作品を選んであつた。今まで幾度も此処に来て、通り過ぎがてらに目にしていた石碑が、片平庸人という詩人の碑と分り初めて親しみが湧いてきた。手で触ってみる、裏に廻つて見つめるで感慨無量の思いをいだいて帰る。さてさてよくぞ新聞の切抜を挟んでおいてくれたと、本の持主だった人に感謝する。私を詩碑へと導いてくれた恩人である。この新聞記事を読んで大凡の片平庸人像が解つて来た。だけどもつと知りたいという思いが募つてきた。特に碑の裏の銘板に書かれた「大森浜にて死す」というのが気になった。尋常な死に方ではないのが窺えるからだ。自殺だろうか。はた又他の原因によるものなのか―と、思いを巡らすと益々知り

たい気持がつのつた。

手元に「函館・道南大事典」須藤隆仙監修があるのを思い出し調べてみる。幸運にも、片平庸人の概略が記されていた。この事典で「庸人」の音読みが「つねと」であることを知る。十行ばかりの記事なのでそのまゝ略歴を写してみる。

『片平庸人 明治三五―昭和二九（一九〇二―五四） 民謡詩人。仙台出身。わが国の童謡開花期（大正七年―一九一八）頃から野口雨情・西条八十に私淑し、昭和五年（一九三〇）函館にきて、海老名礼太の「北海詩戦」に参加し、民謡を発表。翌年「北日本民謡」を出し、全国の民謡関係者に知られた。第二次大戦後、三吉良太郎と「濤」を復刊した。北海道新聞函館支社整理部次長も務めたが、愛酒家で、函館大森浜で酔凍死した。没後、大森浜の啄木小公園に詩碑が建つた。民謡集や童謡集がある。』以上事典の記述である。

「酔凍死」であつた。愛酒家とわざわざ記述してあるのをみると、かなりの「のん兵衛」であつたことが窺える。「ふうん」と読後唸つてしまった。詩人の死にしてはいささか格好悪い死に方だ。然しのん兵衛だったと聞くと返つて親しみが湧いた。若い頃酒好きの私は、数々の失敗を繰返してきた、酔い潰れて大道に寝てしまったこともあり、凍死は決して遠い存在ではなかつた。「よおう、庸人さん 一杯いこうか」と声を掛けたくなるような「片平庸人」という詩人を近く感じた。

次に、「民謡集」「童謡集」があるとの記述から、それを  
読みたいとの欲求が出てきた。そこで図書館に行くことにし  
た。出版されてなかったとしても、何か情報が得られると思  
ったのだ。詩人 片平庸人を捜していると言うと、二階のカ  
ウンターで聞くように言われ二階へ。二階に行くのは初めて  
である。階段を上ると右手に本棚が並び左手の奥がカウンタ  
ーになっていた。話すと、すぐ持つてきてくれた。「青いツ  
ララ」と「民謡 鴉追ひ」の二冊、青いツララは表紙に三日  
月と狐が描かれた分厚いものであり、息子の圭一さんが、父  
の遺稿集として編集出版されたものであった。はじめの方に  
青いツララの草稿がおさめられて、次から既刊の四編の詩集  
と、童謡編、民謡編を加えて一冊としたものであった。昭和  
五十三年の出版である。

二冊目は「鴉追ひ」で、私が古本屋から手に入れたものと  
同じ詩集である。表紙は図案化された鳥の絵が目についた。  
(先に述べたように、私が手に入れたものは、この表紙が切  
れ落ちていたのだった)

「これで全部ですか」と聞くと、「資料室には、一般公開  
していないものがあります」との答えである。私は「青いツ  
ララ」を手にとり、これで充分だと思った。この一冊を読め  
ば、市井の一人の好奇心を満すであろうとほくほく顔で借  
りて帰った。

頁をひらくと、函館北高等学校の朱印が押してあり、前歴

は北高の蔵書であったようだ。庸人さんの顔写真があった。  
昭和十二年ごろの著者とある、若々しく、丸眼鏡をかけて、  
スツキリとした綺麗な顔立ちである。

「鴉追ひ」の诗情から想像していたものと、写真の顔の内  
面から滲み出てくるものは、私の心の中で一致した。この顔  
立ちの庸人さんが、昭和五年二月に、『羽織袴に黒マント：  
：然もボヘミアン風なしやつぽを阿弥陀にかむり、孤心その  
もの、私が函館の棧橋埠頭に下りた』のである(本人記述に  
よる)。「人そのものが詩」と言われた庸人さん、それは何だ  
ろうと、この一枚の写真から感じとるべく、暫く庸人さんの  
顔写真に引きつけられていた。一度会いたかったなあと思  
いながら――。

昭和五年に来函した庸人さんは、同九年に、函館大火に遭  
われている。多くの原稿、その他一切のものを消失されたと  
いう。大変な災難を被りながら函館に踏み止まられた。同じ  
東北出身の文人、石川啄木は明治四十年の大火で、妻子を置  
いて函館を逃げ出している。大変な違いである。それだけ庸  
人さんには、函館への愛着があったと思いたい。

庸人さんは来函時すでに、名の知られた童謡詩人だったと  
いう。年譜がないので、「ほうほう・はる」(童謡集)の跋  
文、錫木碧氏の記述から引用する。

『大正八年「赤い鳥」を始め日本に文学としての「童謡」が、  
全国少青年の心駆らした時、私共と一緒に一番始めての日本

で童謡を作り出した狂者の一人である。』とある。

西条八十氏や野口雨情氏に私淑して指導を受けた時期もあった。然し『八十氏の臭いを遂々身につけず彼のものにして通して来た。』と錫木氏は言っている。

『函館に渡ってから、愛する妻子と、頭を下げなくともよい飯の商売を得たと思つたら、この春の大火でホロリとなつた。』とも言っている。昭和九年の大火のときには、結婚して子供が有り「飯の商売を得た」ことになる。飯の商売とは、函館日日新聞のことなのだろうか。大火にあつた次の年、この「ほうほう・はる」は出版されている。来函前の大正十三年から昭和五年までの作品が半数以上あり、仙台の実家にあつたのか、大火を逃れた作品であろう。あとの半数は函館に來た昭和五年から八年までの作品である。何れにしても大火の翌年に、詩集を出版しているのだから、この詩人の意欲は災の却火を、ものともしない力強いものであつたようだ。

#### 高橋掬太郎と庸人さん

庸人さんと高橋掬太郎の出会い、先ずここから始まる。それは庸人さんの「函館詩壇二十年」の中にあつた。昭和五年、来函第一歩の日だ。

『杉並町のそこはかとなき縁辺をたよりに、千代ヶ岱あたりの某新聞店の掲示板にふと歩を止めたとき、函館日々新聞の短評欄なるものが目に触れた。』

当時既に全国的に投書家として著名な海老名礼太（以下敬称略）の詩を、その作品も掲げず七、八行に評したもので、筆者は同紙の記者高橋掬太郎だつたことは後日知つた。』

高橋掬太郎との出会いは、この小さな新聞記事から始まつたが、庸人さんはこの記事がいささか不満だつたようである。書いた記者の不見識を批判的に捉える視線が言外に感じられる。この時庸人さんは、函館日日新聞社に就職することになつていたのでどうかは、不明であるが後日、入社している。そして高橋掬太郎は、職場の上司だつたようだ。

民謡編に、「函館花見踊り」の詩がある。

一等当選歌、片平庸人 作。高橋掬太郎 補作とある。四番まであるが一番のみ取上げてみよう。

ハア

咲いた桜を ハアリアアリア

巴に抱いてヨー

ハヨイヨイヨイヤサト

ミナト函館

花あかり

サテ スットン

手拍子 足拍子

誰方も浮かんせ踊りやんせ

ソレ 踊りやんせ

一読して楽しくなる詩だ。自然とリズムが出てきそうである。昭和十二年函館日日新聞と末尾に書かれているので、高橋掬太郎はその年まで函館に居たのだろうか。

高橋掬太郎のことを、函館・道南大事典（須藤隆仙監修）で調べてみた。

『高橋掬太郎 明治三四—昭和四五（一九〇一—七〇）』

歌謡作詞家。岩手県出身。根室商業高等学校中退。根室新聞記者から大正十一年（一九二二）函館日日新聞記者になり、社会部長兼学芸部長。かたわら詩・小説・脚本を発表。函館の銀座通り華やかかなり頃の昭和五年（一九三〇）、同人誌に「酒は涙か溜息か、心のうさの捨てどころ」の歌を「酒」と題して発表、翌年コロムビアにこれを送って採用され、古賀政男作曲で大ヒット。上京して（昭和八）コロムビアレコード専属作詞家となり、『—とこれが概略』

出身地は函館とばかり思っていたので、岩手県と分って驚いた。然も根室を経て函館に来ていたのだった。

この「酒は涙か」が世に出たとき、この詩は庸人さんの作品ではないかという噂が、函館の詩壇の間に広まったという。庸人さんはこれを強く否定している。「函館詩壇二十年」にある庸人さんの言葉を引用すると、

『私が昭和六年七月創刊した「草・北日本民謡と改題」の同人達で、後に一世を風靡した高橋の「酒は涙か」が始めて発表されたのもこの誌である。この一篇に就いては巷間、さも

私の作の如く誤り伝えられているが私にしても迷惑至極なことで、この機会に同氏の為にも固く訂正して置く。』と書いている。噂が立ったのは、さもありませんかと思う。それは「酒は涙か」の歌詞が、酒を愛した庸人さんにもあまりにもびつたりで、庸人さんの詩の多くの作品と共通するものがあつたからであろう。而も発表されたのが庸人さんが創刊した同人誌である。庸人さん贗品の私としても「実は、あれは……」と展開して欲しかった一件である。以後高橋掬太郎は、中央で名声が上り数々の名作を残す。一方庸人さんは函館日日新聞から、昭和一七年北海道新聞となった新聞社の、整理部に席を置き、ひたすら自分の詩を作った。この時代の庸人さんについて錫木碧氏の心にしみる言葉があるので抜萃する。「ほうほう・はる」跋より。

『童謡は、自分で自分を唱うことに還れ。』

童謡は、情操教育や、家庭愛や、児童娯楽やから分離して、一人一人の寂しい徹生活に還れ。片平の童謡は、いつまでも片平一人に還っていた。否、片平から外方を見なかつた。』

どうだろう。この言葉、時代背景を考えてみよう。「ほうほう・はる」が出版されたのは昭和十年。翌年には、二・二六事件が起きている。世は軍国主義一辺倒の時代だ。文化芸術に携わる人々もこぞって、国策に沿った作品を世に出していた。それだけに跋文を書いた錫木氏の言葉は異彩を放つ。こんな時に庸人さんは、別世界に居た。『うぶすなの山野を

心とする』詩人でありつづけた。純粹素朴に詩の誠のみ追求する求道者であった。

昭和十一年頃に、函館詩壇は大事案件に襲われたらしい。それは特高警察による仲間の大量検挙である。昭和八年には、小林多喜二が築地署で拷問死しており、函館にも地下運動をする一団があつたらしい。或る日、突如として武装警官が八方に飛び、詩友二十名程を一網打尽に検挙したそうである。当時の函館には、反権力、反資本主義のつわものが居たのだ。庸人さんの私宅にも、度々私服がやって来て、あれこれと調べられたと書いている。然し庸人さんは、そんな社会の外に居た。国家協賛の詩も、反権力主義の詩も一切作ることなく、ひたすら自分の為の、自分自身の詩を、体の中から紡ぎ出して、美しい言葉とした。次の詩の中にその庸人さんが居る。

やまのまろさをみていたら　こゝろもまろくな

つちやつた。なんでもあかるくみていたら　な

んでもあかるくなつちやつた。

そらのひろさをみていたら　こゝろもひろくな

つちやつた。なんでもきれいにみていたら　な

んでもきれいなつちやつた。

何という純心さ、何というおゝらかさであろうか。誰にでも作れそうで、誰にも作れないであろう。昭和二十三年に

出版された「不感貧乏」の中の「無題」の詩である。

又、庸人さんは、いたく「良寛」さんを慕っていた。越後を幾度か訪れて、良寛さんの足跡に親しみ、越後の山野を愛した。

民謡の本「沼」では「雨の日の良寛」の一篇がおさめられていて、庸人さんはあとがきでこう言っている。

『越後は、私にとつて永却に忘れ難い、うたのふるさとである。』うぶすなの山野を心とする民謡詩人と自称するも、良寛さんを慕うあまりどつぷりと、越後の山野に惚れこんでしまったようである。

こんな庸人さんを、詩友錫木碧氏はこう評している。

『越後へ渡つては、歌僧良寛にびつたりして全く変つて来た。私は勿論彼のリョウカニズムの宣伝屋になつたことである。』

庸人さんの「良寛」かぶれは相当深いものであつたと思われる。

庸人さんの家族については、情報が少なく少ししか分らない。仙台には、両親と妹が一人居たようだ。作品から得た情報だ。「不感貧乏」の中に、「冬日離情」の一篇がある。父上の逝去で仙台の家に帰り、葬儀が終り母・妹・自分と三方に別れて行く詩だ。一部分素くことにする。

父に逝かれて

ふた七日

別れ わかれの

寒鴉

(中略)

儂も蝦夷地へ

明日発とう

形見の時計の

ねぢを巻く。

一身につまされるといっつか、寂しい詩だ。

この前に『青いツララ』の遺稿の中に「貨車に揺られて」があり、本人の附記で、戦後両親が仙北線の片田舎に、疎開されており、あわてて見舞いに駆けつけたと記している。

北仙台から志戸田ゆきと書かれていますので、志戸田という駅を捜したけど、見つからなくて、仙北線なる路線もない。只仙台から山形県に向う「仙山線」に北仙台という駅があった。もう昔とは変ってしまったのだろう。

一方函館の家族であるが。詩碑除幕式の記事の中から拾うと、イトさんという奥さんが出席、孫三人が幕を引いたとある。遺稿集を出版したのは息子の圭一さん。これ以上の情報は得られず。圭一さんに弟妹が居たかどうかは分らない。

戦中、戦後を生きぬいて来た庸人さんであるが、暮らしては常に、火の車であったようだ。債鬼に追われる詩も作っ

る。珠玉のような詩を作っても、それは金になるものではない。文芸、芸術を志す人の常に直面する問題だ。庸人さんも苦しんだに違いない。自分一人であれば、その日食う物と、寝る所があれば充分であろう。然し家族がいる。養うべき子がいる。愛する妻がいる。美しい着物を与え、子供が喜ぶおもしろいものを食べさせてやりたい。親なら誰でも思うことである。庸人さんは苦しんだ。稼ぎのない自分を恨んだ。そんな自分を自虐的に捉えた詩が、詩集『鴉追ひ』の中的一篇「貧困記」だ。

昭和二十八年には、『師走某日』の題で、正月用の子供の足袋を買い、ブラブラ歩き、白滝橋の上から冬日を見ていたと書き、『げに 無才 銭もなければ』と自分を貶んでいる。

こんな暮らしの中で、母を懐うことが庸人さんの救いであったようだ。『民謡編』の中に「母」の詩がある。多くの人に味わってほしい詩だと思ひ全文を掲載する。

お母さま

— 糸ぐるま

廻してみなさる

お母さま

おつむの白髪 を

抜きましょ か。

— お縁側

日向でよいでしょ

お母さま

干栗にすずめ も

きてます ネ。

— 糸ぐるま

廻しておねむい

お母さま

お肩のつかれも も

みましょ か。

何と又純粹で、おゝらかな詩であることか。澄んだ心、澄んだ瞳でなければ紡ぎ出せない言葉である。四・五歳の幼児が素裸で、母に呼びかけているように感じる。これは死の一年前の作品である。年齢は五十一歳。「人そのものが詩」と言われた庸人さんは、肉体が徐徐に昇華していき、岩清水のように身も心も澄んで透明な人間になってしまわれたのだろう。私はこんな庸人さんを「詩仙」と呼びたい。酒を愛し、詩を愛した庸人さんに最も相応しい呼び名だ。又この詩仙は可愛らしい童謡も数多く残している。作曲家が読んだらすぐわらべ歌となるような詩が沢山ある。どうして曲をつける人

が現われなかったのか不思議でさえある。

話は変わるが、戦後作曲家の、山田耕作は、戦争協賛者として、公職追放の身となったらしい。国策の歌は懲々だと反省したが、仕事がなく無聊を託っていたとき、思いついたのが童謡であった。そこで偶々目にしたのが北原白秋の詩であったという。結果、山田耕作作曲、北原白秋作詞の童謡は、一大ブームを起し、名作として今も歌われている。

振返って、もし山田耕作が庸人さんの詩を見ていたらどうなったであろうか。

庸人さんが亡くなる、昭和二十九年。詩作の意欲は落ちず、遺稿集に数篇がおさめられている。それが十二月になると、庸人さんにある変化が現われてきたという。

青いツララの「序」を書いた、阿部たつをさんの文によると、十二月中旬阿部さんの詩集出版祝いをやったという。場所は護国神社で宮司の真崎さん等と集った。会の音頭をとった庸人さんが一番先に酔い潰れたという。この頃には庸人さんの頭の中に、変化が起きていたようである。以下「序」から抜萃すると、『酒を飲まないといろいろの妄想がおこって苦しくなるらしく、飲めばふらふらと家を出て行方がわからなくなるという。』

家族から聞いた話として阿部さんはこの様に書いておられる。私はこの様な状態に庸人さんを追い詰めたのは、一体何なのであろうかと考えてみた。何か庸人さんに決定的なダメ

ージを与えたものがあつたに違いないと。昭和二十九年、函館の重大事件といえば、函館市民はすぐ思い出すであろう、あの洞爺丸事件を。この時洞爺丸だけで一〇七一人死亡、相前後して沈没した他の船との合計は一四三〇人に上つたという。（「函館・道南大事典」より）

この洞爺丸台風事件が起きたのは九月、函館市民は深い悲しみに沈んだ。一五〇〇人近い死者を、一体どうして処理したのであろうか。新聞社に籍を置く庸人さんは、海難事件のあらましを、つぶさに見聞したのであろう。

一般人が見られない現場や、写真なども見たかもしれない。人の死の生なましさ、無惨さ等々と、あまりにも強い刺激であつた。ここに詩人庸人さんの心を変調させる原因が潜んでいると、思えてならない。

洞爺丸台風は、九月二十六日だ。年の瀬になつても、そのざわめきは未だ続いてきたに違いないが、その頃庸人さんは、自分の詩の世界に入つて行つた。人間世界からだんだん離れて行つて、越後の山里に遊び鶯の声を聞き田なかの螺と話す良寛さまを、遠くから見ていた。「庸人のリヨカニズム」と言われる程慕つていた良寛さまが、身近に、身近になつていたことであろう。庸人さんの脳裏に、その良寛さまの歌が浮んできた。

たらちねの母が形見と朝夕に

佐渡の島べをうち見つるかも

国上山の麓の五合庵を、鉢の子を抱いて出た良寛さまは、村々を廻りながら海辺に出ては佐渡の島影を眺めて、亡きお母さまを懐しんだ。佐渡は、お母さまの古里であつた。

庸人さんは、海辺に佇みお母さまを恋うる良寛さまに、自分を重ねた。酒に酔つて朦朧とかすんだ意識の中で、現実と幻想との区別はなくなり、庸人さんは自分の詩の中に浮遊してふらふらと夜の街を歩いた。足は自然と海に向つて行つた。自作の民謡をくちざさみながら歩いて行つたという。その民謡とは「冬日離情」（不惑貧乏）や、「お母さま」（民謡編）であつたに違いない。

そうだ、俺の古里は海に向うだ、仙台だ。

あゝ父さん母さん妹よ、と頭の中は、仙台の山野が現われ、両親、妹が出てきてグルグル廻つた。砂山を徘徊した庸人さんは、海の方に下りて行つた。海は暗闇の中に溶けこんで見えず、遠く青森の灯がポツン、ポツンと見えた。十二月の風は身を切るほど冷たい、その冷たさを感じる感覚は、なくなつていた。

庸人さんは砂の上にペタンと腰を落した。そして思った。あの灯の見える青森の向うには道があり、鉄道があり古里仙台に繋がっているのに――なあ――。

『うぶすなの山野を心とする民謡詩人』（不惑貧乏、覚え

書」と自称してきた庸人さんには薄れゆく意識の中で、見えない海の波音が、子守歌のように聞えた。両親の前で妹と遊ぶ自分の姿が遠く遠くかすんで見えた。詩人は自分の詩の原点に焦点が絞られるように、その一点に向って行った。

蝶々がひらひら 飛んでくる

屋上庭園

木のベンチ

誰かが 花から

白い手でハ・ハ・ハ オイデ。v

(「屋上庭園」の一節)

呼んでいる、誰かが呼んでいる。消えていこうとする意識の中で、お母さまの声が聞えた。目の前に白い手がスーと伸びて来るのが見えた。「あゝお母さま」とその手を握ると、庸人さんの体はそのままふわりと浮び上り、闇の中に消えていった。

そうだった。「うぶすなの山野を心とする」という庸人さんの詩の原点をたどると、即ち「お母さま」にいきつくことになった。

庸人さんの詩には、常にお母さまがいた。あれほど素朴に、純に、おゝらかに、澄みきった瞳で、詩を作ったのは、お母さまの心を自分の心として、自分の心の世界を言葉として紡

ぎ出したからにはほかならない。

庸人さんにとつての死は、その原点である「お母さま」の所に還ることであつたであらう。

遺稿集を読んで思つた。これほどの詩が、何で広く世に出なかつたのだろうか。心を洗われるような詩が、随所におさめられている。多くの人々に読んでもらいたいものばかりである。世に出なかつた理由は何だろう。一つは、詩を作り、その詩の中に生きた庸人さんの純粹さが、それを望まなかつたのかもしれない。

書き終つて私は思つた。一緒に飲みたかつたなあーと。繩のれんで隣の席に座つて、ボソボソと語らい、肩をたたくて別れる。そういう飲み友達になりたかつた。いや、いや一冊の本の中で、そんな庸人さんに、私は会つていたのだつた。

## 曾祖父

金子 智 昭

「はじめに」

今年の五月末祖父が亡くなった。九十三歳だった。葬儀は私の実家のある東京で行われたので、私も学校を休んで出席だけはする事ができた。

私はこの自分と丁度70だけ歳の離れた祖父の事が好きだった。祖父はとても落ち着いた素朴な人で感情表現も豊かな方ではなかったが、それでもどこか剽軽な所があり、一緒にいるととても居心地の良さを感じた。

祖父はこの世代の他の人々同様多くの事を経験していた。祖父は決して多くを語るような人ではなかったが、私は祖父から昔の話を聞くのが好きだった。私が最初に祖父の父、つまり私の曾祖父について祖父から聞いたのはおそらく私がかつた小学生の時の事だろう。当時はそれほど興味も持たなかったが、私が曾祖父についてその時知りえたのはフランスに住んでいた事があり、頭がよく、ハイカラで、テニスが上手な人という事だった。

高校最初の夏休み、私は丁度第一次大戦前後の欧州史に興味を持っていたので、この曾祖父の事が以前にも増して

詳しく知りたくなった。曾祖父は祖父がまだ幼い時に若くして亡くなっていた為祖父自身もそれ以上の事は知らないと言っていたが、予想に反して遺品が多く残っている事が明らかになった。祖父の家に長年省みられる事無く仕舞われていた遺品の中には曾祖父が外国から出した便箋や絵葉書、古いアルバム、外国から持ち帰ったと思われるSPレコード、更にはパスポートやフランスの労働ビザまであらゆる物が含まれていた。中でも私の興味を引いたのは手紙類である。曾祖父の死後、曾祖母が大事に取っておいたらしく50通以上残っているが、一方で日本から曾祖父に宛てた手紙は一通も残っていない。祖父は大して興味が無かった為か、それらの手紙の内容については知らないと言っていた。曾祖父について詳しく知るには私自身がこの手紙を読むしかないのだといつしか思うようになっていた。こうして私の調査が始まった。手紙は旧字や変体仮名も交じり、読むのに大変苦労したがその内容の面白さに私はどんどんと引き込まれた。

明治以来洋行をした日本人の数は計り知れないが曾祖父

の渡欧した1920年代というのは取り分け興味深い時代であった。4年に渡り続いた第一次世界大戦も終わり、各国は徐々に立ち直りを見せていた一方で、戦争が人々の生活に与えた影響は大きく、過激でより現代に近い文化が急速に形成されつつあった。この時代は狂騒の時代、「ジャズエイジ」とも呼ばれる。曾祖父の体験の中で取り分け興味深いのはこの時代の文化の中心地であったパリに住んでいた事である。この時代のパリは様々な国から来た芸術家達の都であり、日本から初めてやって来た曾祖父にとっても大きな印象をもたらしただろう事は想像するに難くないが、しかし曾祖父が体験したのは依然としての変わらない古いパリの姿でもあったようだ。私は手紙を読みながら、恰も曾祖父と共にこの時代のパリやロンドン、ニューヨークなどを旅しているような気分になる。90年以上も前の出来事にも関わらず曾祖父が直接語りかけてくるような感覚には手紙という物の持つ力の大きさを改めて考えさせられるが、同時に手紙は曾祖父の身に何が起きたのか、何故若くして亡くなるに至ったのかを明らかにする事にも繋がった。今こうしてここに自分が調べて来た細かな事をまとめるのは一つには祖父が亡くなり、自分の中で色々な事に区切りがついたからというのがあるし、また二つに私も昨年外国留学を経験した事から曾祖父への思いを新たにしたいという事がある。

ここに紹介する一連の手紙には大した史料価値などおそらく無いだろう。しかしこの時代の日本人の目から見た西洋という点からはまた何かの一興にはなるかもしれない。そして何より曾祖父の体験を忘却の淵から救い出し、もう一度光を当てる事が今の私にとってはとても大切な事なのである。

#### 「曾祖父の略歴」

私の曾祖父金子万寿男は1895年生まれ。実は元々養子として我が家へ連れて来られた。旧姓は堀越といつて高祖父とは叔父と甥の關係にあたる。子供時代の曾祖父はどろろと相撲に熱中していたらしい。「大相撲取組帳」と題したノートが2冊残っていて、小学校で使ったノートに新聞から切り抜いた力士の取り組み図や写真がベタベタと貼り付けられている。

大学は今日一ツ橋大学として知られる東京高等商業学校を卒業した。在学中テニス部で活躍をした他英語学習にも励み、アルバムには曾祖父が何かの劇を演じている写真も残っている。はつきりとは分からないがどうも英語劇のようだ。

卒業後は今でもある東京の大手商社で働き始めた。曾祖母との結婚は1922年。お見合い結婚だった。パリ支社への転勤を命ぜられ、出帆したのは1924年の7月。この年の3月には既に祖父が誕生していた。英語は出来るが

フランス語は解さない曾祖父に何故白羽の矢が立ったのかは定かではないが、こゝろいつた事は今日でもある事らしい。曾祖父は妻と生まれたばかりの祖父、年老いた両親を残して単身、パリに赴任しなければならなかった。当時曾祖父は29歳。前途には輝かしいキャリアが約束されていたはずだった。

「アメリカ」

最初の曾祖父からの手紙は船中で認められたもので以下のように始まる。

「多数の見送人を横浜の埠頭に残して初旅に立った小生、一時は非常なる寂寞と留守宅の懸念とに心を曇らせた」(7月6日付)

前年には関東大震災もあり、まだその爪痕が濃く残る東京に家族を残してゆくのは実際気がかりな事だったろうと推察する。

当時フランスへ渡るには西回りにインド洋、スエズ運河経由で行くか東回りに太平洋を横断してアメリカを経由する方法があったが、曾祖父の場合後者の東回りで行っている。七月十八日付の絵葉書。「本日午後三時シヤトル入港。船客一同移民局の取調を受け荷物税関検査を終わりとるは四時半」。ここから汽車でニューヨークを目指しアメリカ大陸横断が始まる。曾祖父がまず驚いたのは汽車のボーイに黒人がいた事で「印度人の大きい真黒な奴」(7月24日付)

などと書いている。

この時期の手紙でよく触れられているのが曾祖父に親切に接してくれる現地の人々の事で、例えば同24日付の手紙では

「汽車中では男女を問はず殆ど凡ての乗客と話をしたし、中には極めて親切に色々説明して呉れる人もあつた」

また經由地のシカゴでは

「若いアメリカ人で非常に面倒を見てくれる者がいて此ホテルへ行くと言つたら態々ホテル迄同行して部屋の交渉も全部やつてくれ好都合」(同24日付)

「上陸以来未だ抗日気分を聊かでも味はない。却つて皆が親切」(24日付絵葉書)

こゝろいつた事は私自身外国で少なからず体験した事でもある。

また、当時のアメリカの世相に関しては例えば先の24日付書簡では「アメリカへ入つてからは禁酒国だから少しも酒に接しない」とある。アメリカでは1920年より禁酒法が施行され33年まで続いたが、この間酒の密売が横行し、それがマフィアの資金源にもなった。

「目に付くのは女という女は老人を除くと皆頭髪を短く切り放しにしていること」(7月20日付絵葉書)とあるのは当時流行していたボブカットの事だろう。

また、当時他国に先駆けて自動車社会化したアメリカで

は早くも人々が交通渋滞に悩まされていた。「雑踏は銀座位の騒ぎに非ず浅草のごとし、しかも自動車の行列だからやりきれない」(24日付絵葉書)

いずれも当時の日本ではまだ珍しかった光景である。

ニューヨークでは曾祖父は一週間程を過ごしている。ここでは本場のベースボールの試合を観戦し、当時世界最高層だったワールワースビルや遊園地コニーアイランドも訪れた。アメリカは当時第一次世界大戦後の空前の好景気に沸いていたが、ニューヨークの摩天楼はまさにその象徴とも言えるような存在だった。「丸ビルなどは豚小屋の如きもの」(28日付)などと書いてある事に曾祖父が受けたショックの大きさが読み取れる。

「オリンピック号」

ニューヨークからはイギリスのサウサンプトンまで再び船での航海となった。この時曾祖父は貴重な体験をしている。曾祖父の乗った客船は名前をオリンピック号といい、あの有名な悲劇の豪華客船タイタニック号の姉妹船である。外観や一部内装まで両客船は酷似しているが、それぞれの辿った運命は大きく異なる。ちなみにオリンピック号は第一次大戦中ドイツ軍の潜水艦に遭遇した際、体当たりをする事で逆に潜水艦を沈めるといふ「戦果」も挙げている。

曾祖父はオリンピック号についてまず「船の大きいのと設備の完備していることは想像以上で実に驚いた」(8月2

日付絵葉書)と書き、次いで「船の甲板は六階に分れてエレベーターもあり、テニスコート、体育場、遊戯場、水泳場、娯楽室、バー、読書室、喫煙室、居間、広間等設備整いホテルにいると同じ事。各部屋とも奇麗で実に豪奢を極めていゝ。今日は甲板を歩いていて測量すると船客の歩ける所だけで一直線に一町程もある」(8月3日〜6日付)などとその驚きを伝えている。

更に興味深いのは曾祖父が一等船室を使っている事で「一等船客全部で四百五十余人。内日本人は小生ら三人は少々心細い」と記し、また「晩飯には皆タキシードを着て食堂に出る」「食事の後隣の広間でオーケストラがあるし、九時頃からはダンスも始まる。此方面は吾々唯見物するのみ」「こうした費用を惜しまず払う外国人が相当に多いと思ふ」と如何に生活程度が違うかが判る(いずれも同3日〜6日付)などと西洋上流社会の一端を覗きみた感想がつつづられている。

また8月3日には「明日の晩飯には各自必ず仮装して食堂へ出る様と掲示が出た。小生仕方がないから部屋のパールの服装をそっくり借りて出ることに予定している」とあるがボーイに服は借りたものの結局仮装はしなかったようである。いずれにしても面白いエピソードではないだろうか。

## 「イギリス」

曾祖父がイギリスに到着したのは8月8日のことだった。首都ロンドンでは2週間滞在している。

「アメリカとは大分気風の違うのに気が付く。風俗は一般にじみで気品高く山高帽、シルクハットの多いのが目に付く」「紐育では通る人皆忙しそうに足が早いのに此処では左程でなくステッキを持つものも多い」（8月12日付）などと書いている事からも、急成長を遂げるアメリカと比較してイギリスにはまだ旧態的な生活が多く残っていた事が分かる。また「建物は余り高いものは無く皆黒づんで汚い。寒い冬霧の為にストーブの煙が上らず下の方でさまよおうので煤ける」（同8日付）などは当時のロンドンの様子をよく伝えて興味深い。

## 「フランス」

ドーバー海峡を連絡船で渡り、フランスへ到着したのはようやく8月22日だった。日本を出発してから実にひと月半近くが経過していた。パリでは当初下宿が決まるまでホテルで暮らしていたようだが、25日には早速「町は倫敦より感じよく道の両側に樹木を植えてあるので落付味がある。自動車は倫敦以上に頻繁で道を横ぎるには骨が折れる」などと書いている。

曾祖父がフランス滞在中の大半を過ごす事になる下宿はパリ市中のどこにあったのか判然としないが「素人的な然

も他の下宿人のない様な所（26日付）だったらしく老女が所有する家で「宿の婆さんは恰度お母さん位の年恰好で中々元気で深切にして呉れる」（9月10日付）とある。

下宿が決まっていたからには愈々勤務が始まったがフランス語初学者だった曾祖父は午前中を下宿で勉強に費やしていたようだ。「佛語の先生は一週四回宿へ来て教えてくれる。六十位の爺さんでとても深切。毎日少しづつ語学も進歩している。毎日午前中は宿で勉強して午後会社出勤」（9月10日付）。

フランス語が出来るようになるに従って、現地の人々との交流や仕事の量も段々に増えていった。曾祖父の手紙の中で私が取り分け気に入っているのが下宿での女主人との交流について触れた箇所だ。例えば曾祖父のフランス語について「宿の婆さんも非常に進歩したと言って喜んでくれる」（10月12日付）更には「婆さんも独りにて淋しきと見えチャツキーと称する簡単なる遊戯をしたがること頗々」。「夕食後一時間程を費やすこと有り」（11月4日付）との記述が出てくる。10月21日付書簡ではパリ郊外でボート遊びをした後「帰途宿に近い所で例の『かたつむり』を買って持って帰った。処が婆さん嫌とあつて少々当てが外れたが独りで大分食って残りは下女にやったら大喜び」などと下宿には使用人がいた事も確認できる。もちろんここでの「かたつむり」というのはエスカルゴの事である。ま

たこの書簡では曾祖父が風邪をひいた時の事についての記述があり「婆さん良い薬を作つてやると言う（中略）ベッドに横になっておれと言うからその通りしていると（中略）熱い湯にレモンと砂糖を入れた味のよいものを持って（きてくれた）。「この薬を」グロッグと言っている」とある。更に「下女が部屋へ朝食を持って来てくれた。今日はもう鼻も大分止つたが明日の朝も部屋へ持つて行ってやると頑張るので深切無下にすべからずそのままにして置いた」との記述が続く。異国の地で曾祖父に取り分け親切にしてくれたこの二人には私も子孫として感謝の念を感じる。

#### 「テニス」

大学時代テニスに熱中したという曾祖父は、パリに於いてもテニスを続けている。幾つかそれに関連した手紙もあるが、その中で取り分け興味深いのが9月29日付の手紙で「当地には先頃より御滞在中の東久邇の宮殿下（御伴を従えて）又テニス御好きにて吾々のコートへ御来駕（中略）共々運動の光栄に浴し殿下頗る平民的なる御言葉にて吾々にも恰も友人の如く御扱い下され」とある。この東久邇の宮殿下というのは終戦直後に一時期総理大臣を務める事になる東久邇宮稔彦王の事だと考えられ、「先頃より御滞在中」とあるようにフランスには1920年から留学をしていた。稔彦王は皇族中では自由主義者として知られていたが、「平民的なる御言葉」や「友人の如く」といった所からもそれ

が読み取れる。殿下との交流はその後も続いたようで10月4日付の葉書では「今日は午後例によつて東久邇宮殿下の御相手でテニス。午後七時疲れて帰宅」といった記述が確認できる。

#### 「休戦記念日」

曾祖父が外国で過ごす最初で最後の冬が近づいていた。1924年、既に第一次世界大戦が休戦してから6年が過ぎようとしていたが国民感情の中に占める戦争の影響は依然大きなものがあつたと言つてよい。この大戦でのフランスにおける戦死、行方不明者の合計は140万人近くに上ると言われ、国土の東側地域では未だ戦闘による荒廃が残つたままとなつていた。1924年の11月11日（休戦記念日）を曾祖父はパリで迎える事となる。11月13日付書簡。「昨十一月十一日は数年前欧州大戦の休戦条約締結の日にて佛国は勿論欧米当時の聯合國は皆国民一般に休業する。吾々も当日は休業。」当日は早朝より観兵式に類したる催あり。朝来所々に大砲を放ち多数の飛行機は舞い、午前十一時より二分間全國民沈黙と言ふことに相成居る」。「時々軍隊の小団体等通過。到る所群集を以て埋められ所々辻には（中略）バイリンの如き音楽家達中々多く大道演説的のものも有し或る所にては「あや釣人形」の余興等あり道端には廢兵も混じて小旗、紋章等を売る者あり。学生連中の団体をなして唱歌を歌うものあり」

私達はこの後来るべき第二の世界大戦がある事を知っている。しかし当時の人々にとつて第一次世界大戦は人類史上最悪の出来事の一つとして強く記憶されていた。人類の技術発展の延長にあつたこの大量殺りくはその後の社会の在り方を大きく変えた。ところが私達日本人はややとするとこの第一次の方の大戦を忘れがちである。来年2018年11月は休戦100周年にもあたるのでここで少しこの事を考えてみるのも良いのではないかと個人的に思っている。

### 「リヨン」

1924年11月末から曾祖父はフランス南東部に位置する町リヨン（里昂）を出張で何度か訪れている。リヨンの印象を曾祖父は「巴里から見れば全く田舎でのんびりする。」（11月26日付）「巴里の揚句は全く田舎にて建物も古めかしきもの多く自動車等も巴里の数十分の一なるべく周囲は山多く今尚芝生は青々として眺望は宜敷のんびりと致し別に見物と言う程のものもこれなく唯愛宕山を聯想せしむる如き山に登り市中を瞰下致す位」（12月5日付）などと記している。

リヨンへの出張は翌1925年始めにかけて数度に及び、元旦もリヨンで過ごす事となった。「こう頻繁に腰を落付けて里昂へ出て来れば佛国では小生の第二故郷。何時も同じホテルに泊るのでホテルの主人やボーイ等もすっかり心易

くなつてきた」（1月2日付）。その一方でパリについては「矢張り幾分にも住み慣れたる地は住めば都にて巴里のステーションへ到着の節は自分の家へ帰りたる心地致し」（12月5日付）とも書いている。

### 「発病」

順風満帆とも言える曾祖父の外国生活に突如として暗い影が差すのは1925年春の事だった。この間の動静は未だ十分に読み切れていない書簡も残っており定かではないのだが、4月初頭曾祖父は休暇を取つて南仏カンヌへと出かけている。「多忙で少々過労の傾もあり仕事の一段落を幸ひ休暇を取つて表記の場所へ静養旁々新方面開拓に出かけて来た」（4月3日付）とあり、この文面からは危機感などは何ら読み取れないが、この時既に曾祖父の体は病に侵されていた。

5月にはパリで仕事に復帰しているが依然として自身の健康状態に関する記述はない。「博覧会先月廿八日開催。然し未だ諸設備整はず且さして人氣なし」（5月4日付）との記述からこの時期曾祖父がパリ万国博覧会に関係した仕事をしていたことが分る。同博覧会は別名アール・デコ博覧会としても知られ、当時最新の幾何学的、工業的な前衛芸術作品が一堂に会するまさに狂乱の20年代の先端をゆく博覧会だったわけだが、日本パビリオンは純和風の伝統建築で建てられ、展示品も伝統工芸品が主となった。これに

対しては博覧会の趣旨を読み違えているとの批判が日本国内からあり、客足も思うようには振るわなかったようだ。こんな事も曾祖父の健康に影響を与えたのかもしれない。

5月中旬、東京東麻布の実家に一通の電報が届く。この電報は曾祖父の遺品と一緒に祖父の家で見つかった。左がその内容である。

“ Arriving Kobe 24th June per Kamo-maru leaving Marseilles 19th May, wrote letter Kaneko.”

曾祖父からの突然の帰国通知だった。この電報を打った同日、曾祖父は便箋5枚の手紙も書いている。この手紙には日付が明記されていないが、他の手紙同様20日〜ひと月程で日本に届いたと思われる。その内容に家の者が皆動揺したであろう事は想像に難くない。

手紙は以下のように始まる。

「拝啓陳者小生今般帰朝の事と相成り、船名日取とも決定致した」  
「余りに突然の事として嘸御驚愕の事と相居る。実は徒らに御心配を掛けるは不本意と相じ今日迄御報告申上げず居し処、小生先頃肋膜炎にて就床致す」  
「一時は相当の発熱。水も溜りたるが幸ひ意外に経過良好にて水も薬を施したるのみにて自然に放散」  
「唯御承知の通り此程の病氣は快方として直ちに人並に活動するは宜しからず充分の静養を要する事として先般南岸カン（又）に出かけたは此為にて先月末迄滞在の上帰巴致す」

ここで初めて曾祖父が肋膜炎を発症した事が報告された。肋膜炎とは胸膜の炎症の事であり、他の病氣から続発する事の多い病氣との事だが、1920年代という時代を考えると結核に付随して起きる結核性胸（肋）膜炎だった可能性が高い。曾祖父は自らが結核になってしまった事を恥じて帰国が決まるまで手紙に書き出せずにいたのだろうか。同じ手紙の「常々父上が『心身を大切にせよ』との御真心も空しく軽微乍ら小病を以て帰朝拝顔の義は何んとも申訳なく甚だ心苦しき次第」との記述にはこの辺りの心境もにじみ出ている。

「帰国」

結局曾祖父のフランス滞在は一年にも満たなかった。1925年5月、マルセイユ発の船便で帰国の途につく。帰りは往きとは逆にスエズ、インド洋経由で帰国したようだがこの辺りの詳細は手紙等が残っていない為定かではない。6月9日にシンガポールから出した葉書が一通あるのみである。曾祖父の乗った船が神戸に到着したのは恐らく電報の通り6月の末頃だったに違いない。

「死」

帰国後の曾祖父がどのように生活をしていたかについてはよく分かっていない。祖父によると家族とは一緒に住んでいなかったようだ。先の手紙で「尚帰京後暫く宅へ落付きた上は何れへか当分氣候良好の地にて静養を要すべき」

とあるように転地療養していた事が考えられる。祖父は病床の父親を見舞った時のことを臆気ながら覚えていると生前語っていた。しかし曾祖父が回復する事はなかった。帰国から2年後の1927年7月東京渋谷の赤十字病院において曾祖父は永眠した。32歳だった。遺された曾祖母はその後義両親と共に祖父を育て上げ1994年、私が生まれた直後94歳で亡くなった。生涯再婚する事はなかった。

### 「ワイン」

曾祖父に関連してはこんな後日談がある。曾祖父はフランスから本場のワインを数本持ち帰っていたそうだが、曾祖父の死後それらは軒下の涼しいところに仕舞ったまま忘れ去られた。1945年日本が敗戦し祖父が復員した際、祖父はたまたまこのワインを見つけ何を思ったか通りを歩く進駐軍の兵士たちに振舞ってやったという。日本に持ち帰られて20年も経っていたので熟成し、皆おいしいと言つて評判は良かったようだ。何人かの米兵に至つては後日お礼としてマーガリンやケチャップなどを持ってきてくれたと祖父は楽しそうに話していた。フランスの酒は結局アメリカ人に飲まれたのである。考えてみれば妙な話だが、曾祖父が西洋人の親切さについて書いていた事と何だか重なるところがある。

### 「終わりに」

祖父が亡くなった今、最早曾祖父を直接に知る人は我が

家に一人もいなくなった。思い返せば祖父の存在は私にとつて曾祖父をより身近に感じさせる事に繋がっていたようだ。

祖父の容体が悪化した今年3月、偶々未解読だった1924年12月5日付の曾祖父の手紙を読んでこんな記述を見つけた。

「省坊（祖父の事）写真受取った。早速会社の連中に見せた処成育頗る早しとの定評に甚だ意を強うした。小生出発頃とは全く見違い温和な顔つき。実物は一入愛らしきと大いに期待している」

異国に於いて曾祖父の心の支えになっていたのは生まれたびかりの祖父だった。果たして祖父はその事をどこまで知っていただろうか。また幼いわが子を置いて逝く父親の無念にどこまで気が付いていただろうか。私は最近そんな事を考えている。

## 歌声喫茶との出逢いから

高島 啓之

平成29年の8月も残すところ、あと今日と明日となった。僕はテールに着き窓の向こうの青空を見上げた。久しぶりに広がる青空の下を右から左にウロコ雲がゆつくりと流れている。気が付けば、ずいぶん空が遠くなった気がする。函館の街も秋を感じる景色が多くなったように思う。いつの間にかコスモスが咲いているし、ススキの穂も垂れ始めている。ナナカマドの実もすっかり赤く色付いている。今年の夏は短かった様に感じた。僕は今テールに着き、最近の色々な出来事を文章にまとめようと原稿用紙に向かってペンを握っている。

「さて、今日までの出来事を色々書き進めて行こう。」

今年(平成29年)の干支は酉年。そんな僕も年男、48歳。そして年女で12月に84歳を迎えるはずの日本を代表する歌手、ペギー葉山さん。4月に亡くなられましたが、そんなペギー葉山さんを偲んで彼女の代表曲である「学生時代」(1964年発表)と「ドレミの歌」(1961年発表)を僕が弾くギターの生演奏でみんなと一緒にこれほど歌ったことは自分の人生の中で初めての経験だった。しかもどちらの曲

も僕が生まれる前に発表された曲だ。いま現在まで、僕の心に歌というものがこれほど大きく存在したことはなかった。何故、今、僕の中心に歌があるのか。何故、今「懐かしの昭和歌謡」に向き合うことが出来ているのか。出逢ったきっかけ、そしてやがては僕の中心になり、そしてついに「NHKのど自慢」にチャレンジすることが出来たまでを、ここから書いていこうと思う。

まず、初めに時代背景の部分から簡単にまとめておこう。昭和30年頃を中心に全国にたくさん歌声喫茶が誕生し、歌う人々で賑わっていたという話を聞いた。我が町函館の大門にもそんな店が何軒か存在し、そこではアコーディオンやピアノの生演奏でみんなで声を合わせて歌っていたようだ。それが昭和45年頃になると時代は移り変わり、カラオケが出現。歌声喫茶は全国的に姿を消していき、昭和50年頃にはほとんどの店が閉店してしまっただけのことだ。でも東京新宿には今も「ともしび」という店が残っていて、昔を懐かしむ客で賑わっているというニュースを見た。

僕は昭和44年生まれなので、カラオケが大ブームの世代

で、青春時代はよくカラオケスナックやカラオケボックスに足を運んだものだ。もちろん歌声喫茶の存在は知りもしないし、そんな言葉を耳にしても全く興味もなかった。

でも時は流れ、歌声喫茶の活動を知るきっかけが訪れた。教えてくれたのは僕の歌の師匠である横内氏だった。4年ほど前の出来事である。師匠は4年前のある日、僕に「大門のシニアサロンのカフェくあふおりで歌声喫茶を月2回やっているのだけどギターで伴奏を手伝ってくれないか」と声をかけてくれたのだ。カフェくあふおりは僕の友達の店でもありよく知った場所だった。でも師匠の誘いには正直気乗りはしなかった。100曲以上の歌集を見せてもらおうと、僕の生まれる前の昭和歌謡の数々。手伝いどころか、かえって足手まといになりはしないだろうかと心配にもなった。しかし、亡き父が歌っていた数曲（例えば「青い山脈」や「憧れのハワイ航路」）はわかっているし、当時、とにかく歌好きの父が観るテレビから流れているのを聴いて知っている曲やうる覚えの曲も何曲かあったので、師匠の誘いを受ける事にした。

そして僕は毎月第1・第3月曜日開催の「ムックリ横内の歌声喫茶」に伴奏者として、時にコーラスとして参加していた。毎回カフェは昔を懐かしみ、当時の歌声喫茶を知る年代中心の客で賑わった。師匠は真ん中に立ち、隣に僕を座らせ、更に僕の親友でもあるカフェオーナーのちいにい、店長のアミちゃん、スタッフのモカちゃんにも歌わせたりしながら

らリクエストに応え、みんなであっぶり2時間の歌声の時間を過ごした。

僕は師匠のとなりで3年間この歌声喫茶の活動で伴奏をした。いつしか自分がだんだん歌声喫茶のとりこになっていくのを感じていた。歌・曲の持つ力ってすごいなと実感していた。

歌声の参加者は60〜80代が中心。もちろん若い人も参加していたし、更に90代の方もお一人だけいた。歌集の曲は参加者みんなの青春時代に流行り、歌っていた曲の数々。もちろん僕にとつては、生まれる前の曲ばかりだ。参加者は僕よりも20年も多く生きている人たち中心で、断然人生経験に溢れ、苦労や喜びといった色々な時間・時代を過ごしてきた人たち。歌を通してみんなで声を合わせて歌いながら、当時の記憶や感情までが蘇っているのがこちらにも伝わってくる。時には涙を流している人もいた。毎回同じ曲「青い山脈」をリクエストするKさんという男性がいて、その方のテーマソングであることがわかった。毎回、手で指揮を振りながら大声で歌う姿は正直うるさくはあったけれど、きくとその歌に色々な思い出が詰まっているのだからと思つた。確かに僕にとつてもこの「青い山脈」を聴くと、酔っ払うと決まつてこの歌を歌う父を思い出すことが出来た。

「忘れな草をあなたに」を歌うというより語るように声高らかに熱唱するご婦人もいた。みんなそれぞれ曲への思い入

れは違い、それぞれの覚えた節まわしで自由に歌っているのが歌声喫茶の素晴らしさなのだとわかった。カラオケのように一人の人がマイクをもって曲を歌い、周りの人がそれを聴くとも違う。合唱のように楽譜通りしつかりとみんなが揃って歌うというでもない。歌声喫茶は2時間という時間の中で約20曲をみんなが自由に声を合わせて歌っていく。音が外れていたっていい。節まわしが違っていたっていい。大きな声でも小さな声でも鼻歌だっている。聴いているだけでもいい。

みんな自由に歌う昭和歌謡や童謡・唱歌の持つ力ってとてもすごいのだなと実感が高まっていった。気が付くと僕は歌集の100曲を全て歌い演奏できるようになっていった。

そして更にカフェの音楽活動は広がりを見せていく。

店長のアミちゃんは、少年少女合唱団を経験し今もなおOGとして関わっていて歌への想いの強い人だった。そして僕はシンガーソングライターで高校時代から函館で音楽活動をずっと続けていた。そんな二人で平成27年から音楽ユニット「カポ」を結成し活動を始めた。カフェのオーナーちいいとスタッフのモカちゃんと共に若手中心の音楽活動もカフェくあふおりで展開していった。子どもから大人まで参加してもらえようなクラシック音楽を基調としたイベントも開催したりしていった。

ある日の事。アミちゃんが僕に言った。

「歌声喫茶の活動をもっと広く色々な場所でシニアだけでなく、子供にもお母さんにもお父さんにも、すべての年代が楽しめる活動にできないだろうか。」

僕も「カポ」としてなら、今、それができるかもしれない。そうするべきかもしれないと思った。少年少女合唱団の経験のあるアミちゃんは本当にクラシックから童謡・唱歌をよく知っていて上手に歌えた。もちろんアニメソングもよく知っていて、僕たちが覚えた昭和歌謡100曲と共に、もっと広く足を運び、再び歌声喫茶の素晴らしさを色々な場所で展開していくのは、高齢化も含めた地域全体の貢献に繋がっているとアミちゃんの言葉を通じて感じた。

後日、そのことを二人で師匠に相談した。師匠も自分が伝えた歌声の活動をカポで更に広げていくことを喜んでくれた。「そんな嬉しいことはない。応援するよ。僕はもう年寄りだからここでの月2回の活動で充分満たされているけれど、若い君たちには僕の大好きな歌声喫茶の素晴らしさをこの街にもっと広めてほしい」と背中を押してくれた。

当時の歌声喫茶を知らない世代の僕とアミちゃんは、師匠から学んだ歌声活動を、師匠から離れ独立して始める決意を固めた。

平成28年6月。いよいよ独り立ち。「歌声喫茶」の名称ではなく「カポの歌声カフェ」として知人の経営する元町のカフェスペースを借りてスタートさせた。

10人も入れれば満員の小さなカフェスペースだったが、まだまだ力不足の僕らにとつて成長してゆく大切な始まりの場所となった。ここでしっかりと力をつけて行こう。他の会場を増やしていく力を築いていこうと心に決めた。天気が悪くお客さまが二人という歌声カフェの日もあったが、大門の店から応援してくれている方も毎回のように来てくれたし、新規のお客様も少しずつ増えていった。

秋も過ぎ、冬の便りが近付きつつある10月頃、杖をつきながら毎回来てくれる体に障がいを抱えているSさんが言った。「雪が降る頃は残念だけどここには来れなくなるかな。」

二十間坂を登りきった場所のカフェはSさんにとつて限界を感じさせている事に僕たちは気付き、いよいよ「歌声カフェ」をもっと本格的に色々な場所へと増やすことを決めた。

Sさんには十字街電停から割と近い「函館市地域交流まちづくりセンター」の会場を提案。更に「亀田福祉センター」「七飯文化センター」の会場を地域エリアの拠点にして、カポの歌声カフェを展開していった。今現在は「大中山コモン」(ふらつとDaimon)「北斗市かなでーる」(道新文化センター 神山教室)と会場が増えている。

各会場は時間の積み重ねと共に連帯感が生まれて、「亀田福祉センター」(七飯文化センター)は30人規模まで広がりを持ち始めていた。中には色々な会場に顔を出してくれる方もいた。どこの会場も月2回の開催を目標にして、そのスケジ

ュールに合わせて体調を整え、準備して、毎回足を運んでくれる皆さんに感謝すると共に、笑顔で元気に逢えるのが僕たちの喜びにもなった。

「カポの歌声カフェ」になってからも、更に演奏する昭和歌謡・童謡・唱歌は増えていった。来てくれる皆さんからのリクエストにも応え、レパートリーは新たに100曲を超え、合計200曲以上になっていた。

そして平成29年6月、「カポの歌声カフェ」は一周年を迎える事が出来た。

この頃から僕はあることを考えていた。いつも会場に来てくれて一緒に声を合わせて歌い、今日まで歌の持つ力・昭和歌謡の持つ力を共に感じ一年間応援してくれた皆さんに、何か喜んでもらえる事ができないかと。そしてふと、ある考えが浮かび、僕はある時、アミちゃんに相談した。

「去年、北斗市にのど自慢が来たよね。何人かの友達もチャレンジしてダメだったけど、今度いつか近くに来たらチャレンジしてみたらどうか。歌声の皆さんに出るよって知らせたら、きっと楽しみに観てくれると思うんだ。」

しかし、インターネットで、のど自慢の年間スケジュールを確認すると、道南エリアの会場は無かった。この一周年でのタイミングでは無理かと残念でならなかった。

ところが、数日後、アミちゃんが「7月にのど自慢が知内に来るって今日、NHKで放送してたよ。」と報告してくれた。

あまりのタイミングに言葉を失ってしまった。後で調べると、知内町の町施行50周年を記念してNHK函館放送局との共催で「NHKのど自慢」が知内で開催されることだった。それにしてもなんとというものすごいタイミングだろう。これはチャレンジしない手はなかった。僕とアミちゃんはさつそく、応募の往復ハガキを出した。後日、ハガキが届き、僕とアミちゃんはNHKのど自慢知内町大会へと向かうのだ。これは「のど自慢ものがたり」として次へとまとめよう。

—平成29年7月29日、土曜日

### NHKのど自慢

知内町スポーツセンターにて—

外に出ると涼しい風が静かに吹いていた。汗ばんだ体とほてった心にとても心地よい風だった。木陰に伸びる芝生エリアをアミちゃんと歩いてみると、そこにこっそりと咲くネジ花を見つけた。母の大好きな花だ。「函館山のあの場所にも咲いただろうか・・・来週時間を探して見に行かなければ。」と心の中でつぶやいた。今日一日分の強い日差しは、午後5時を過ぎても芝生の中に残っていた。足元のネジ花は暑さを気にすることなく青空を突きさすようにネジを巻いて伸びていた。予選会場で250組が歌い終えるまで4時間以上かかった。函館市を含めた知内近郊の人たちの参加かと思っていた

が、いやいや北海道各地から、そして東京からのチャレンジヤーがいたことに驚いた。しかもかなりのつわものばかり。僕たちは意気消沈さみではあった。午後5時。予選通過の20組の発表が迫る。僕とアミちゃんは再び会場に戻った。いよいよ発表の時が来るのだ。アミちゃんと一緒の予選通過は理想的だったけど250組の中から勝ち抜くのは簡単なことではないと思った。

小田切アナウンサーがステージ中央に立つと、会場は拍手に包まれる。そして、すぐに静まり返った。緊張感で張り詰める会場の空気を。

「結果が出ました。これから明日の放送に出演していただく20組のみなさんを発表いたします。呼ばれた方はステージに上がり並んでください。それでは発表します。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「9番。青い山脈を歌った高島啓之さん！」一番初めに僕の名前が呼ばれた。僕はガッツポーズと共にステージへと駆け上がった。

そしてアミちゃんの16番が呼ばれるのを切に願った。

しかしアミちゃんの番号は通り過ぎていった。

僕とアミちゃんは、なんとか予選を通過し明日の放送に出たいという大きな願いがあった。その理由は、僕たちが活動している「カポの歌声カフェ」に参加してくれている皆さんに、「1周年のお楽しみ企画として、のど自慢にチャレンジし

ます。チャンピオンを目指しますので、ぜひ期待してテレビを観てください。」と宣言していたからだ。他の友達や仲間たちにも広く宣言していたので、その人数はかなりの数となり、知らせていないのは母だけという状態だった。歌声カフェのみなさんはじめ仲間たちは「テレビ観て応援してるから頑張つてね。」あなたたちならチャンピオンになれるわよ。「テレビにかじりついて観るからね。」と僕たちに声をかけてくれた。

結果は僕が20組の中に選ばれ、アミちゃんの番号は呼ばれなかった。

「最低でもどちらかが残れたらメンバーみなさんに喜んでもらえるねって話していたから、それを実現できてなんと良かった。とっても悔しいけどね。」とアミちゃんと苦笑いを浮かべ話した。

明日の放送につながった事は、日頃参加してくれている皆さんに感謝を伝えるチャレンジ企画として何とか形を作れて良かったのだが、ふと母の顔が浮かんだ。

母は毎週欠かさず、のど自慢を楽しみに観ているので、明日何の知らせもなく、僕がテレビの中にいて歌っていたらあまりの突然の出来事に心臓発作でも起こして倒れてしまうかもしれない。ここは上手に伝えなければいけない。重要ミッションだ。帰りの車の中から僕は母に電話をした。

「はい。高島です。」

「もしもし啓之です。」

「あら、あんた、聞いたよ。のど自慢に出るっていうんでしよう。」

僕のおじさん夫婦が歌声カフェに来てくれた時、今日の予選会のことをお知らせしており、そこからすでに母に情報ももれていたのだ。早い。

「明日知内に応援に行くって勢いだったけど、結果はどうなったの?」

「20組に選ばれて明日、生放送に出ることになったよ。」

母は、

「あら、本当に出ることになったの。これから、おじさんに連絡するわ。」

と言って電話を切った。

僕の予選通過のニュースは、またたく間に親戚を中心に全国へと広がっていった。なんと兄の友達も今日の予選会に出ていたらしく、千葉県に住む兄からは興奮した様子で電話がきた。

「たった今、友達から弟さんがのど自慢の決勝に選ばれたよって電話がきたんだけど、どうなんだ?」と。

のど自慢は本当に国民的な放送なのだと改めて感じる瞬間だった。

そして再び母から電話が鳴った。おじさん夫婦と母が明日、おじさんの運転する車で知内に向かうと決めたというのだ。

80代の三人がのど自慢の会場に向かうとはものすごい行動力だ。全国放送の、のど自慢には80代の年寄りのフットワークを軽くさせる力があるのだ。僕はまだ悔しさ残るアミちゃんにずうずうしくも明日の年寄り三人の世話役をよろしくお願ひしますと伝えた。長い長い今日という一日がこうして終わつた。いざ明日の本番へ向け眠りに就かなければ。

—翌日。7月30日、日曜日

今日も涼しい風が静かに吹く晴れの

知内スポーツセンターの会場

いよいよNHKのど自慢の本番—

12時15分からの放送に向けてリハーサルが行われ、会場は慌ただしく、でも確実にそれぞれの役割を進めていく。舞台監督を中心にしてスタッフ全員が一致団結し番組を支えるプロの力を僕は目の当たりにしていた。僕はそんな放送のほんの一部分として思いを馳せていた。昨日の予選会250組の中から選ばれた20組の一人として僕は今日ここにいる。歌声カフェのみなさん、友達、仲間、親戚、兄弟、そんなみんなが今日テレビの前に座るんだ。目の前に設置された何台ものカメラを通しNHKの電波にのり、僕の姿がそれぞれの家のテレビに映し出されるんだ。みんな、どんな気持ちで観てくれるだろうか。予選会の結果を知らない歌声カフェの皆さんは「果たしてカポは映るのだろうか」という期待感で観

ているだろうな。そんな、みんなの顔を想像していたら、ますます緊張は高まり、心配と欲が湧き出てきた。鐘1回じゃシヤレにならないしカッコ悪いな。一年間、僕たちの「カポの歌声カフェ」を支え育ててくれた感謝を伝えるためにも、チャンピオンは無理でも合格の鐘は鳴らしたいな。いや、合格しないと帰れないぞ…しかも会場には普段テレビでしか観ていない母がいる。おじさん夫婦もいる。そんな三人を世話してくれている、昨日予選会で選ばれなかったアミちゃんのリベンジもしなくてはいけない。こうして自己へのハードルはしつかり高く立ち上がってしまった。

さて、いよいよ本番。舞台監督の合図で生放送が始まるうとしていて。テレビには映らない位置で舞台監督がすべてをひとつにまとめている。満員の観覧者、20組の出演者、ゲスト、小田切アナウンサー、生演奏のバンドメンバー、鐘を鳴らす人。その全てをスムーズに誘導し進めていた。それだけではない。全身を使ったパフォーマンスで会場に來ているすべての人たちを笑顔にさせ、リラククスさせている。その雰囲気は全国のお茶の間にテレビを通して毎週届けられていたんだ。いつもはテレビの画面でしか観えていなかったのど自慢がこんな風に行われているのかと感動しきりだった。

12時15分、NHKのど自慢スタート。知内スポーツセンターの場所から全国への時間が幕を開けた。生放送のリアルタイムで繋がっている歌声カフェの皆さんは僕を見つけて

喜びの声を上げているだろう。アミちゃんがいないと悲しんでいる人もいるだろう。僕の歌う順番は12番目。時間はものすごいスピードで進んでいく。みんながどんどん秒を刻むように歌い終わっていく。プレッシャーは高まり、心拍数は上がっていく。でも楽しんで歌おう。会場の母、おじさん夫婦、アミちゃん、舞台監督、小田切アナウンサー、ゲストの北山たけしさん、椎名佐千子さん、昨日と今日笑顔いっぱい、で気配りをくれたスタッフの皆さん、観覧者、会場全ての人たち、そして全国のテレビの前の皆さんに最高の笑顔と歌を届ける。そしてすべての鐘の音を届けるのだ。

いよいよ僕の番がくる。舞台監督が「次は君だぞ」「所定の位置につくんだ」という合図とアイコンタクトと手まねきで僕を呼ぶ。そして、僕の右手にマイクが渡された。

いよいよ僕だ。「1-2番、青い山脈」僕の挨拶と共に演奏が始まる。

会場は割れんばかりの拍手で僕を迎えてくれる。母とおじさん夫婦とアミちゃんの顔も見える。笑顔で応援してくれている。いつも歌声カフェで歌っているように口三味線で前奏から歌い始めた。「チャンチャンチャン」。「みなさんも一緒に」テレビの前にいるすべての仲間は今持っている力を全部、歌声にして届けるのだ。

あつという間に時間は過ぎ去っていった。ワンコーラスを全て歌いきると同時に運命の時が訪れる。息をのむ。

キンコンカンキンコンカンキンコンカン。すべての鐘の音が鳴り響いた。

歓声に包まれる。

小田切アナウンサーが「おめでとー」とステージ中央へ駆けつける。

ガツチリと抱擁で合格の鐘を称えあった。小田切アナウンサーが僕にマイクを向ける。

「亡きお父様がよく歌っていたという青い山脈で見事合格です。どうですか、届きましたね。」

「はい。父の歌を超えられたと思います。」と僕も元気に答えた。ゲストの北山たけしさんもコメントをくださった。

「とても透明感のある声でリズムもしっかりしていて素晴らしい歌声でした。」

うれしいお褒めの言葉だった。歌声の仲間たちとの約束を果たせた瞬間だった。歌声の仲間に一年の感謝を伝えられた瞬間だった。自分自身へのハードルもしっかりと超えられた。いや、まだ放送は続いている。僕も含めたすべての仲間たちにチャンピオンになれるかもしれないという期待が芽生えた瞬間でもあった。放送終了間際、チャンピオンの発表が迫る。僕は会場の天井を見上げ、広い空の下で「合格した」「鐘が鳴ったよ」「すごい」きつと色んな思いを持って観てくれているすべての仲間に「やったよ、ありがとー」と伝えた。

結果、僕はチャンピオンにはなれなかった。そして放送は

全て終了した。

充足感に満ちていた。歌声カフエの皆さんや仲間たちと逢うのが楽しみだ。チャンピオンのトロフィーは手にすることが出来なかつたけど、放送はみんなの目に焼き付いている。

放送終了後の閉会の席で舞台監督が素敵な演出を準備していた。出演者の20組みんなに「みなさん、お疲れ様でした。みんな素晴らしかったです。チャンピオンのトロフィーは一人の手に渡つたけど、今日ここにいる250組の中から選ばれた20組全員がチャンピオンです。今日のこの記念に全員にトロフィーを渡します。」と伝えてくれた。涙が出そうになるほど嬉しい言葉だった。手渡されたトロフィーはとても小さかつたけど、とてもとても重たく感じた。歌声カフエのみなさんに見て触ってもらえるものを持ち帰れるではないか。

会場を出ると、日がだいぶ傾いている。芝生のネジ花をカメラに納めると、ふと「せつかく母が会場に来たのにネジ花が咲いていることを伝え忘れてしまった」と心の中で後悔した。母が一番好きな花が咲いていたというのに、僕としたことが歌うことだけで、いっぱいいっぱいになってしまったことな。函館山のネジ花も確認して写真と共に、後日、今日の報告とお礼を伝えるに母の所へ行くことにしよう。

僕は知内スポーツセンターに一礼をし、アミちゃんの待つ駐車場へ向かつた。

こうしてアミちゃんと計画実行した「のど自慢ものがたり」は終わった。

いや、終わったのか。むしろこれからのかもしれない。そんな想いが芽生えていた。この瞬間が始まりなのではないか。この二日間を通して僕が見たもの感じたものは、これからの生活や活動に活かしていこう。

のど自慢は昭和21年から毎週土曜日・日曜日とどこかの街で開催されてきた。それは、これからも続いていく。その街に住む人たちが予選会に挑み、そして観覧者として会場に足を運ぶ。その全ての人びと、スタッフを舞台監督は一つにまとめ上げ、会場を盛り上げ、全国へと放送を届ける。そんな時間を体験してきた僕はこれからもっと自分らしさを大事にして生きられるはずだ。そしてもっともっと今以上に歌声活動を楽しく元氣に出来るはずだ。

僕らの乗った車は海岸線を走り函館へと向かつている。函館山の背中が少しずつ迫ってくる。千畳敷に咲いているであろうネジ花を想像してみる。

僕は運転に集中しているアミちゃんに声をかける。

「また函館近郊にのど自慢が来たら、今度はデュエットで出てみようか。そしたら、チャンピオンになれるかもしれないよ。」

「私は、もういいな。」

「そうだよね。もう、いいよね。」

そうだね。本当にそうだねと思えた。予選会を通った僕にも、通らなかつたアミちゃんにもこの二日間は今まで経験したことのない長くて長くて、途方に暮れるような長い時間だった。一緒に歌声活動をやっていて、お客様を喜ばせようと、のど自慢チャレンジ計画を立て、ハガキを書き、返信ハガキが届き、会場へ向かつた。予選会は僕が通り、アミちゃんは通らなかつた。僕は生放送へと向かい、アミちゃんは年寄り三人の世話役。そして僕は本番出場、アミちゃんは応援。

こんな時間の経験は今回で充分だ。  
こんな貴重な時間は二度と体験出来ないだろう。大切な時間を手にしたのだ。

NHKのど自慢。知内スポーツセンターははるか遠くへ。函館の街はこころよく僕らを待っていてくれた。この街をもつと元気に出来るかもしれない。そんな想いが僕に芽生えていた。

歌声喫茶は、のど自慢とほぼ同じ年代で流行し始め、全国的な広がりを見た。でも、のど自慢は今も続いているのに、歌声喫茶は昭和50年頃にはほとんどすべての活動が消えてしまった。

比べることは出来ないけれど、歌声喫茶には歌声喫茶にしかない良さや素晴らしさがあつたことを僕は教えてもらった。そしてそれを一年間「カポの歌声カフェ」として実践してきた。だからこそ、昭和歌謡や童謡・唱歌を見つめ直した。歌

声喫茶の活動は地域に必要なのではないかと改めて感じている。それを僕たちは「カポの歌声カフェ」での2年目の活動に更に工夫してやっていこうと思っている。のど自慢のように僕たちカポで色々な場所に向くのだ。昭和歌謡や童謡・唱歌に出逢い、この素晴らしさに気付き、これは日本の自慢で宝だと思っている。僕たちはこれからも生のギター演奏と、生の歌声で、来てくれる皆さんと会場で声を合わせ一緒に歌っていく。それはやがて色々な花を咲かせるのだ。色々な場所に花を咲かせるのだ。

## 北海道人はどこから来たのか

木村 裕俊

一、はじめに

北海道の歴史は、私たちが教科書で習った歴史の流れとは少し違っています。元々、日本の歴史というのは、全国一律に同じ足並みで発展してきたわけではありませんので、当然といえば、当然のことなのでしょう。

古代、日本列島の歴史が始まった時から文化の傾向は、大きく三つに分けて考えられるといわれています。一つは「中央の歴史・文化」です。その範囲は、おおむね本州と四国それに九州が該当するでしょう。二つ目は「北の歴史・文化」です。これは北海道を中心に、北東北やサハリン（樺太）あるいはクリル（千島）諸島などを範囲としています。三つ目が「南の歴史・文化」です。こちらの方は、沖繩を含む南西諸島だと考えることが出来ます。こうした文化の違いは、それぞれの地域の気候・風土・地形など環境の違いによって特色が生まれます。そして、それぞれの文化の境目には、双方の文化の影響が入り混じった、まるで、グラデーションが懸かった「ボカシの文化」が存在しています。古代人たちは、それぞれの地域間で交流していたので

す。

私たちの祖先である「古代の北海道人」は、ある日遙か彼方からやって来たのでしょうか、それはいつ、どこから来たのでしょうか、何を求めてやって来たのでしょうか。「古代北海道人」がどんな冒険をして北海道に辿り着いたのか、北海道ではどんな生活が待ち受けていたのか。北海道という土地は、彼らに幸せをもたらしたのか。こうしたことを考えていると、「古代北海道人」への知的興味は、大きく膨らんで来るのです。

今日の北海道考古学の発展は目覚ましく、数々の新しい遺跡群の発見と新技術を駆使した調査結果から、先史時代における私たちの祖先の生活の様子を解き明かしています。考古学は、遺跡や遺物から人類の歴史を知る学問です。先人たちが使った形跡のある生活器具などから、その暮らしぶりを推測しようとするものだといえます。

私たちは今、ヒトが誕生してからのどのような冒険を経て、いつ・どこから北海道にやって来たのか。北海道に定住するようになったのはいつのことだったのか。考古学や人類

史学などの成果を訪ねながら、ヒトの誕生や移動の様子を振り返って見たいと思います。北海道の先史時代である旧石器時代から縄文時代にかけての黎明期の「古代北海道」の歴史を訪ねてみることにしましょう。

## 二、人類 冒険の旅へのはじまり。

### (一) ヒトの誕生

想像もつかないような、とてつもなく古い時代にヒトはアフリカの地で誕生しました。それは、およそ五百万年余りも前のことだといわれます。最近の調査では、六百五十年前とも七百万年前であると主張する科学者もいるようです。ともあれヒトは、チンパンジーやゴリラなどの類人猿から進化した動物でした。この五百万年前に生まれたヒトが、世界の隅々にまで至る壮大な旅を始めるには、まだ随分と長い時間が必要でした。

アフリカの地では、猿人から原人へさらに旧人やネアンデルタール人といった古代型新人へと、何代も変化を繰り返していました。ジャワ原人や北京原人などの原人は、今から百五十万年ほど前になって初めて生誕の地であるアフリカを離れてアジアに向かったのです。しかし遺伝学の立場からは、世界に広がっていった原人や旧人たちは、遠い昔に絶滅してしまっただと考えられているのです。

進化のすえ、再びアフリカの大地で誕生した人類があり

ました。それが現生人類の「ホモサピエンス」でした。ホモサピエンスとは、「知恵ある人」を意味するラテン語ですが、まさに彼らこそが私たち現代人と直接つながる共通の祖先だったのです。ホモサピエンスは、ネアンデルタール人から数十万年前に分かれたと見られています。その形跡は見つかっていないのです。これまでの調査で二十万年前まで確認されてきましたが、先日のニュースでモロッコから三十万年前の化石が発見されたと報じられました。また一つ、現代人への長い道のりの一端が明らかになりました。

しかしこの人たちが、アフリカでどのように広がっていったのかなど、まだ分からないことは多いのです。ただ世界各地の考古学上の成果から、アフリカに長く留まっていたのですが、ある日母なる大地を旅立つ一派が現れたのです。それは、今からおよそ十萬年前のことだといわれます。

彼らは中東の死海地溝帯に一旦は留まり、徐々に外の世界に適応しながら、やがてある者はヨーロッパへ、またある者はアジア各地へと拡散していったのです。いま、世界の隅々にまで暮らす現代人たちに繋がる長いながい旅は、ここからはじまったのです。「古代北海道人」となる人々が繰り返した旅の記録も、この大旅行の中の一ページに刻まれているのです。

## (二) 世界への拡散と三大人種

人類学の領域ではかつては世界の三大人種をネグロイド、コーカソイド、そしてモンゴロイドと呼んでいましたが、今日ではそれぞれの主な居住地域から「アフリカ人」「ヨーロッパ人」「アジア人」という呼び名で分類しています。

「アフリカ人」とは、人類がホモサピエンスとして誕生して以来、ずっと故郷の地に暮らし続けてきた肌の黒い人々のことです。「ヨーロッパ人」とはアフリカを旅立した後、西に向かい、ヨーロッパに住み着いた人々を指しています。そして、東に向かった私たちの祖先は、太陽の昇る方角をひたすら目指して進んでいったのです。アジア大陸を北のルートと南のルートに分かれて、長いながい旅を続けた集団が私たちの祖先とつながる「アジア人」だったのです。

共にアフリカを出発して、西に進路を取った「ヨーロッパ人」と、東を目指した「アジア人」が分かれたのは、遺伝学の分析によると今からおよそ五〜六万年前のことだといえます。アフリカを旅立つときは「ヨーロッパ人」も「アジア人」も皆、肌の色は黒かったのです。それぞれが偶然選択した地域の環境によって、肌の色が変わっていったのです。

陽光の弱いヨーロッパ大陸の人たちは、次第に紫外線を遮断する皮膚のメラニン色素が抜けて白くなり、「アジア人」

と呼ばれる人たちも地域によって多少異なりますが、大まかにいって黒人と白人の中間的な色合いの人間になっていったのです。前近代的なヨーロッパの価値観で「肌の色によって差別する」という行為は、たったそれだけのことだったのです。

地球の歴史の中で十万年という単位は決して大昔のことではないでしょう。生命が誕生して三十五億年余りが経ちますが、これを仮に人の一生として八十年に例えると、僅か二十時間前ではないのです。つまり、つい昨日までみな黒人だったのです。人類に差が無いことは、DNAからも分かっているのです。

アフリカ大陸で、東部と西岸に棲むゴリラやチンパンジーの遺伝子を調べると、同一種でありながらその違いは人類同士の場合に比べて、圧倒的に東西の類人猿の方が遺伝子の変化に富んでいるということです。一見全く同じに見える東と西の類人猿よりも、人間の黒人と白人の方がより近い遺伝子を持っていたことになるということです。たまたま企画された「アフリカ発のツアー」に参加するかしないか、あるいは行先が違っていたために、そして旅先での九十九%の偶然と一%の知恵によって、今生きている人々の形態にほんのわずかの差が出ただけのことだと思ふのです。

## (二) 北海道を目指したヒトたち

私たちの遠い祖先たちが日本に向かった道筋は、大きく二つのルートに分かれていたようです。故郷のアフリカと同じような温暖な気候を求めつつ進んだ「南方ルート」と、極寒のシベリア平原へと進んだ「北方ルート」でした。「南方ルート」は、西アジアから南アジアのインドネシアを経由しつつ、中国南部から朝鮮半島を抜けて対馬海峡を越えるか、あるいは琉球諸島を北上するルートを辿った人たちでした。「北方ルート」は、シベリアを越えてサハリンから北海道に到着するか、モンゴル・中国北部を経由しながら朝鮮半島を通って日本に到達する道を選んだ人たちでした。この二つの別々の道を歩んだ祖先たちはそれぞれの旅の途中で、人類史上燦然と輝く偉大な記録を残していたのでした。「南方ルート」を歩んだ人たちは、陸路でしか移動することが出来なかったのですが、海を渡る技術を獲得して、初めて陸地から遙かな大海原へ出ることに成功したのです。また「北方ルート」にコマを進めた人たちは、温暖地地しか生きられなかった人類にとって、初めて寒冷地を克服することが出来たのです。この二つの偉業を成し遂げたのが、いわゆるモンゴロイドと呼ばれた私たちアジア人の祖先だったのです。

この「アジア人」の仲間のうち最も長い旅路を歩んだのは、南米大陸の南端まで到達したアメリカ先住民の一派で

した。彼らはシベリアからベーリング海峡を越え、アラスカを抜けて北米大陸を南下し、さらに南米大陸をも一気に下って最南端のアルゼンチン・フエゴ諸島まで達したのです。西アジアを出発し、北極付近を経由して南極の入口まで地球を縦走し、実に五万キロメートルにもおよぶ大移動を成し遂げた人々だったのです。

私たちの住む北海道は、日本列島の北の端に位置しておりその広大な地域には様々な気候や地形、植生が広がっています。北は宗谷海峡や間宮海峡を介してサハリン・シベリアへと続き、東はクリル（千島）諸島沿いにカムチャツカ半島とつながっています。そして、南は津軽海峡を経て本州へと連なっているのです。まさに「北の文化」の交差点だったのです。

遙かな昔、「原始日本人」たちは様々な地域から、この日本という大地にやって来たのです。ある者は南に広がる大海原を渡ってやって来たのでしようし、またある者は西の大陸から山脈を越えて辿り着いたのです。さらにまたある者は極寒のシベリアからサハリンへ、そして陸続きであった北のルートを歩いてやって来たのです。こうした様々な人たちがこの列島に辿り着き、互いに長い年月をかけて融合しながら今日のニッポンというクニを作り上げたのでした。

私たちの祖先である「古代北海道人」もまた数の多寡は

別として、いくつかのルートを経てこの地にたどり着き、濃淡はあるでしょうが、「原始日本」の文化の一つを作り上げたのでしよう。

### 三、旧石器時代の「古代北海道人」

#### (一) シベリアから来た「古代北海道人」

私たちの祖先である「古代北海道人」は、ある時期にシベリアから北海道に渡つて来た人たちでした。彼らは、なぜシベリアから北海道に渡つて来たのでしょうか。

シベリアに棲息していたマンモスは、およそ二万年前に日本列島に南下してきました。その時、「古代北海道人」もまた、マンモスを追つてシベリアから渡つて来たのです。

マンモスは、長い氷河期を通してシベリアに棲息していた動物です。しかし、シベリアの最も北側に位置する北極海沿岸地域では、ある時期にマンモスが全く棲息していないという、空白地帯になった期間がありました。

今から二万年前頃の数千年にわたる期間でした。この頃は氷河期の中でも最後の氷期で、最も寒い時期でした。今より平均気温が十度以上も低く、夏は草木に覆われていた豊かな土地も、岩と氷だけの「極地砂漠」と呼ばれる不毛の大地に変わってしまったのです。

この気候変動に追われるようにマンモスは東のベーリング海へ、南のサハリンへと移動を始め、その一部が北海道

まで南下してきたのです。この時に、「古代北海道人」になる人たちもマンモスを追いかけて一緒に南下し、ついに北海道までやって来てしまったのです。

氷河期といっても常に寒かった訳ではありませんでした。最近の研究では、ある周期で暖かい時期と寒い時期が繰り返して訪れていた事が分かってきました。暖かい時期には今とそう変わらない位まで気温が上がっていたようです。逆に最も寒い時期には、冬の内陸部では零下八十度にまでも下がったといわれています。こうした考えられないような大寒波が襲ってきたのです。人類がシベリアに進出を果たした後の、二万二千年前から一万八千年前の頃にかけての出来事でした。

氷河期のシベリアは、疎林の間に草原が幅広い帯のように広がるという、豊かな緑の環境でした。この「オープン・ウッドランド」と呼ばれる空間が、シベリアの東西に長く連なっていたのです。近年の化石の研究で、この豊かな草原には数多くの大型動物が暮らしていた事が明らかになっています。全身に毛の生えた毛サイ、凶暴な肉食獣のホラアナライオン、そしてバイソンやジャコウウシ、ヘラジカといった草食獣も群れを作つて草原を駆けまわっていたのでしよう。その中でひとときわ目立つ巨体の持ち主、それがマンモスでした。氷河期のシベリアは、幾種類もの大型動物が登場する動物王国だったのでした。そして、シベリ

アから南下した私たちの祖先となる「古代北海道人」もまた、この大型動物を捕獲することが目的だったのです。

北海道に渡る最も主要なルートは、大陸からサハリンを経て北から北海道に渡来するルートでした。氷河期の最も寒冷であった時期は、地球の広い範囲が厚い氷で覆われたため、海面が現在よりも百メートル以上も下がっており、大陸とサハリンの間宮海峡やサハリンと北海道の間の宗谷海峡は、陸化していたのです。北海道千歳市の遺跡からは、およそ二万年前の細石刃が見つかっています。これは、シベリアのマンモスハンターの強力な狩猟具であり、彼らがこれを携えてやって来たという確かな証拠なのです。北海道にやって来た人々の南にはさらに未知の陸地が広がっていました。それは本州です。津軽海峡は水深が一四〇メートルと深く、最寒冷期でも陸化することはありませんでした。しかし、厳しい冬の寒さの中では、津軽海峡あたりでも零下三十度以下にまで下がり、海峡が凍りつくこともあったため、北海道にやって来た祖先のうち、さらに本州に渡った一派もいたと考えられています。つまり「旧北海道人」の人たちは、北海道だけに留まったのではなく本州にも渡っていたし、あるいは向こうからもやって来たという、交流があったことを想像させるのです。

## (二) 旧石器時代の生活環境

旧石器時代の人々は、移動性の高い生活を送っていました。それは、石器の製作・消費過程からも分かっていたことです。こうした生活の場所を変えながら移動する形態を「遊動」と呼んでいます。縄文時代に入って、堅穴住居という固定した場所に長く暮すのとは、大きく異なる生活スタイルでした。

旧石器時代の遊動生活とは、当てもなくさまよっていたのではなく、季節変化に合わせて食料資源のある場所を巡回し、石器材料のとれる場所などをうまくつないだ生活サイクルを作っていたのです。この時代の遺跡では、大きな遺跡、小さな遺跡、石材をたくさん持ち込んだ遺跡など、遺跡にも個性があつて遊動生活の中でも場所ごとに作業の違いが見られたのです。

東北の宮城県仙台市に「地底の森ミュージアム」という博物館施設があります。今からおよそ二万三千年前から二万年前の遺跡だといわれています。仙台市の街中で発掘されたこの遺跡を、発掘面からすべてをドームで覆い、保護復元したのです。館内には、二万年以上前の「旧石器人」の生活の痕跡が生々しく遺されています。たき火の跡、散らばった石器、その使用跡等々があります。この遺跡は自然の森か低湿地に埋もれて残されたものですが、いくつかのナイフ形石器も出土しており、人間が活動した跡だと分

かります。ここには多くの樹木の株も残っていますが、トウヒ属・カラマツ属・モミ属という、今では北海道北部やサハリンなど北方に残っている寒冷地の針葉樹林帯でした。旧石器時代はすでに述べたとおり、気候は現在よりはるかに寒冷で、植物もそれを食べる草食動物の種類も、今とは大きく異なっていました。岩手県花泉や長野県野尻湖の遺跡などで実際に動物の骨が発掘された所の例では、ナウマンゾウ、オオツノシカ、ヘラジカ、バイソンなど、現在では見られない大型の草食動物が主体だったようです。

### (二) 石器の用途と発展

石器の名称で「ナイフ形石器」というのはナイフの形をしているということで、必ずしも実際の用途がものを切るナイフであったわけではありません。石器の用途を正確に示すことは難しいのですが、ナイフ形石器はそのほとんどは先端が尖っており、木の柄を付けるために基部に加工が加えられています。そしてやがて槍先形石器へと変化していくことから、これらは狩猟用具であったということが分かります。

旧石器時代には、これらの道具が石器全体の中で大半を占めていましたから、この時代の主な生業は狩猟であったと考えられます。またこの時代の遺跡で、多くの落とし穴が発掘されています。何列にも重ねて配置された大規模な

ものも発掘されています。おそらくは幾つかのグループの人たちが集まって、共同で落とし穴の列に獣を追い込む方法で狩りを行ったものと思われる。

後期旧石器時代には東アジアから日本にかけて、細石刃文化が広く分布していました。細石刃石器は約二万四千年前にシベリアで生まれた独特の石器で、二万年前には北海道でも広く使われていたようです。細石刃とはごく小さな短冊状のカミソリ刃のような石刃のことで、これをたくさん作り、骨や木の軸にはめ込んで槍のようにして使用したと考えられています。

遊動生活をしていた旧石器人にとって、最も障害になったのは荷物の運搬でした。彼らにとって狩りの道具は、決して減らすことの出来ないものです。そんな時に小さくて軽い細石刃は、持ち歩く石材の量を大幅に節減できる大きなメリットをもたらしました。細石刃は、原石から薄い石片を何枚も剥ぎ取るというやり方で作るため、少ない原石でこれまでよりはるかに多くの石刃を作ることが出来たのです。

## 四、生き残りをかけた縄文時代

### (一) 日本と世界の微妙な時代区分

日本の時代区分では縄文時代が始まる前までを「先石器時代」といいますが、「旧石器時代」ともいいます。どちら

も同じ年代を表現していれば問題ないのですが、実際には微妙にずれているので混乱します。

本来日本の時代区分は、先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という歴史区分で分かれています。一方世界的には、旧石器時代・中石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代という時代区分になります。この時代区分はヨーロッパで考案されたものですが、考古学が世界各地で行われるようになると、それぞれの地域でもかなり無理をしながらこの時代区分が当てはめられるようになっていきました。日本ではむしろそのような動きにとらわれず、独自の縄文・弥生・古墳という時代区分で行っているのです。

ヨーロッパで考案された「旧石器時代」は、本来「氷河時代の中で、打製石器だけを使っていた時代」と定義されていました。しかし日本では、氷河時代にはすでに磨製石器も使われていたため当てはめにくかったです。現在は地球全体を対象にして、百八十万年前の氷河時代から約一万年前の時代に適用することとして分かりやすくしました。それでは「新石器時代」はどうなるのでしょうか。本来の定義は「磨製石器が使われていた時代」でしたが、その後には農耕牧畜という食糧生産の開始が人類の歴史に大変重要であるという認識から、このことをもって定義するようになったのです。しかし氷河時代から現在に至るまで、世界中で一斉に農耕牧畜を開始したわけではなく、最初は僅

かな先進地域に限られていたのです。そこで現在に至る時代になっても農耕牧畜が始まる前の、いわば隙間の時代を「中石器時代」と呼んで調整したのです。

日本の時代区分はどうなるのでしょうか。「縄文時代」は土器の出現で画され、「弥生時代」は水稻耕作の開始で、「古墳時代」は前方後円墳という墓の出現によって画されています。つまり、縄文時代の「草創期」とは一万年二千年前から九千五百年前頃までをいい、まだ世界の旧石器時代の終わり頃であったのです。日本では縄文時代以前を正確には「先土器時代」と呼んでいます。このように世界の旧石器時代と日本の先土器時代は微妙に異なっているのです。ですから「旧石器時代」という用語は、世界の時代推移と対比して語られる場合に用いることが多いのです。

また日本の考古学では「新石器時代」という言葉は余り用いられていませんが、食料生産が始まった時代であるとの定義から、森林の環境を人工的に管理するようになった、縄文時代前期からの時期を日本の「森林性新石器時代」と呼ぶこともあるそうです。

## (二) 先土器時代から土器時代へ

太古の日本列島にあつてナウマンゾウやバイソンなどの大型の草食動物が、ある時期を境に絶滅してしまいます。もともとそれほど動物数が多くなかった北海道では、貴重

な食糧源であった大型草食動物がいなくなることは大変な問題でした。

地球上の氷河期はおよそ2万年前の最寒冷期を境に終わりを告げることになりましたが、およそ1万5千年前から1万年前頃になると今度は急激に世界各地を温暖化の波が襲います。気候の変化は大地に生える植物の生態系を大きく変え、ナウマンゾウやバイソンが食べていた草木が一斉に姿を消し、草原であったところが一面の深い森に覆われるようになったのです。

こうした環境の変化で大型草食動物たちは徐々にその数を減らしていきました。そして最後のとどめを刺したのが、私たちの祖先の人類、だったのです。日本列島のこの頃の遺跡数の増加でも分かるように、2万年前以降はヒトがどんどん増加し、シベリアの大地から持ち込んだ「細石刃」を手に、食料となる大型動物の乱獲が盛んに行われていったのです。環境変化と乱獲、このダブルパンチでついに北海道の大型草食動物は絶滅してしまっただけです。

二万年前にマンモスを追いかけて北海道まで来た私たちの祖先「古代北海道人」たちは、驚いたことでしょう。豊かな獲物を求めてやってきた未知の土地にやつと慣れ、自分たちの同胞を増やしていった結果、突然マンモスの絶滅となるのですから、ある日トランプの「ババ抜き」で突然ババを引いてしまったような気になったのではないでしょ

うか。もし情報社会であったなら、北極ベーリング海を目指した人々を大いに羨んだことでしょう。

大型草食動物が絶滅した深い森の中で、私たちの祖先「古代北海道人」はどう生き延びていったのでしょうか。大型草食動物が絶滅してからしばらくして、ハンターたちの象徴であった細石刃は姿を消していったのです。そして代わって登場するのが、石の鏃でした。大ききわずか一〜二センチメートルほどの鏃を矢の先端に取り付け、森の中に住むシカやイノシシなどの小動物を捕まえて飢えをしのいでいたのだと想像されます。

縄文時代を象徴するものは、内陸にまで迫る海岸線や森に覆われた環境であり、多様な土器類でした。日本列島の「縄文時代」は、土器の登場とともに開始されるのです。日本で最古の土器は、細石刃文化の末期の遺跡の中に見られます。年代は一万五千年頃と測定されています。

私たちの祖先にとって幸運だったのは、食料の入手方法を狩猟や漁労のほかに、植物採集をも身につけたことです。春の新芽、秋の木の実、アクの強いものもアク抜きをすれば食べることが出来ました。古代北海道の地で再び息を吹き返したのです。遺物である土器の内側に黒々とこびりついた焦げ跡は、植物の実を煮た跡だと考えられています。祖先たちにとって、土器はまさに「生き残り」をかけた道具だったのです。

地球は温暖化と共に、暖温帯の落葉広葉樹や照葉広葉樹の森に覆われていきました。ブナ、ナラ、クスギ、トチやカシ、シイノキなど、秋になると木々の多くはドングリという木の実を豊かに育んだのです。この鬱蒼とした森が、新たに人類の食糧庫に変わり始めたのです。ドングリはそのままでは、アクが強くて食べられません。ドングリを煮て、アク抜きをして食べることを思いついたのです。こうして土器の出現が、森を食糧庫に変えていったのです。

同じ時期の一万年前頃、アフリカ発北回リルートを選んだ私たち祖先の「親戚たち」はどうしていたのでしょうか。シベリア平原に留まった人達は、動物を飼い馴らす「放牧」という知恵を身に付け、極東に住み着いたオホーツク海沿岸の人々はトドやセイウチなどの海獣狩猟に乗り出し、大河アムール流域の一派は魚を捕る漁労を体得し、ずっと南に下った中国南部の人達はムギやイネといった植物を栽培する農耕に取り組み始めたのです。およそ一万年前を境に、人類は住み着いた土地の環境に合わせて、それぞれ生業を獲得していったのです。

### (三) 縄文の時代区分

縄文時代は一万年を超える長い時代でしたので、その間の文化の変化は非常に大きいものがありました。そのためこの期間を大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期

の六つに区分しているのです。主に土器形式の変遷を基準にした分け方でした。分類されたそれぞれの時期の継続年数は、均等ではなく古い時代ほど長い傾向にありました。

#### ①草創期

縄文時代の草創期とは、およそ一万二千年前から九千五百年前までをいいます。地球温暖化が始まって、旧石器時代とか先土器時代といわれる時代から縄文時代に移って行く途中の時期です。この頃から土器が使われ始めるのですが、まだ定住化が確立されず、住居と貝塚が設置されていましたが、季節によって遊動生活も送っているようで、半定住段階であったと想定されています。この時代の人たちは、主に狩猟・漁労・植物採集の三つを生業の基本として、その生産力を飛躍的に発展させた時期でした。

#### ②早期

縄文早期という年代は、およそ九千五百年前から六千年前頃までをいいます。この時代は、やや冷涼な気候で、弓矢による狩猟と沿岸の漁労によって定住が確立してきた時代だといえます。猟場に近い各地の海辺や低地の海岸段丘には、竪穴住居が作られムラが営まれるようになります。竪穴住居には炉が作られ、生活も安定してきたようです。食料の煮炊きに土器が使われ、魚介類や植物などの食料が飛躍的に増えた時期でした。

### ③前期

縄文時代の前期とは、およそ六千年前から五千年頃までをいいます。気候がより温暖化して、海面が上昇し縄文海進が始まります。気温の上昇により植物資源や水産資源が豊富になりました。ムラの中には貝塚が形成され、クリやドングリ、ブナなど植物質食糧が安定して獲れるようになり、人口が増えて大きな集落が出現してきます。前期の中頃になると、道南部と青森では共通の土器文化が繁栄していくのです。

### ④中期

縄文時代中期は、約五千年前から四千年前頃までをいきました。温暖な気候が続き、安定した狩猟・漁労・採集生活が営まれており、内浦湾沿岸や三内丸山遺跡に代表されるような大規模なムラが形成されました。この時期は生活が豊かになり、十メートルを超えるような大型堅穴住居も造られます。縄文中期後半から後期の前半にかけては、津軽海峡を通じて道南の文化と北東北の文化の交流が、より盛んになって来たようです。

### ⑤後期

縄文後期という時代は、約四千年前から三千年前頃までをいいます。気候がやや冷涼になってくるため、人口や集落が減少します。陸上の動物も減少して、再び貝塚が造られ始めます。海獣類やシカ類は、複数のムラによって共

同作業が行われるようになりました。

ストーンサークルや共同の墓域は、集落を少し離れた別の場所に作られるようになります。死者の埋葬に甕棺が利用されるなど、北東北との強い交流を感じさせます。また土器も、特徴的な縄文土器が多くなり、縄文人の社会生活に精神的な変化を感じさせます。

### ⑥晩期

縄文晩期とは、およそ三千年前から二千年前頃までです。気候は再び寒冷な気候となり、海面が下がって海岸線が後退してきました。そのためこの時期の人たちは、汽水湖や砂丘上、低湿地などにも生活範囲を広げていきます。生活用具には、木器や漆を利用したものが利用されるようになります。道南地域では北東北の「亀ヶ岡文化」の影響を受けて、曲線を多用した繊細で華麗な文様の、精巧な土器が登場します。

### (四) 縄文人の交流と交易

日本列島の北端に位置する北海道は、北は宗谷海峡・間宮海峡を隔ててサハリン・シベリアに、東は千島列島を介してカムチャツカ半島に、南は本州へと連なり、まさに文化の交差点でありました。

私たちの住む道南と北東北は縄文時代にあつて、いつの頃からか津軽海峡を通じてそれぞれ固有の文化を持ちなが

らも、一定の共通性も有した縄文文化圏でありました。そしてそこには、人々の交流と交易が盛んに行われていたことが分かります。つまり縄文時代の「古代北海道人」には、津軽海峡は地域を分ける分布境界線ではなかったのです。

おそらく縄文の頃までには、舟で海を渡る技術が発達していたものと思われます。それは、何よりも特定の場所しか産出しないモノが、遠くまで運ばれた形跡があるからです。本州の日本海側をはじめとした遠方地域との交流を物語ります。

例えば鮮やかな緑色で不思議な輝きを放つヒスイは、新潟県姫川の下流・糸魚川地域から全国に運ばれていました。原石を磨いて穴を穿ち、勾玉などに加工していました。

アスファルトは、狩猟用具の石鏃・石槍などを柄に固定する接着剤や、破損した土器・土偶の補修材として使用されました。何でも付着させるアスファルトは、主に新潟県や秋田県の日本海沿岸地方で産出していました。

黒曜石は、火山の溶岩が急激に冷やされて出来た黒色の極めて硬い火山岩です。黒曜石は先土器時代から細石刃などに使っていました。縄文人は、ガラス状に鋭く割れる黒曜石を利用して鋭利なナイフを作り、道具の加工や獲物の解体・調理など多様に利用していました。道東の遠軽町白滝産の良質な黒曜石が、道南や青森県北部の遺跡でも発掘されています。

土器に煮詰めて作った塩が内陸の遺跡で発見されるなど、交易の範囲は想像以上に広いものでした。

ストーンサークルは、縄文時代後期頃を中心に、主に北海道と北東北に分布した墓域・祭祀施設と考えられています。縄文人の葬送儀礼や祭りなど、自然に対する畏敬の念が読み取れます。

### (五) 縄文文化の伝統

縄文文化の伝統は、その後の弥生文化に入っても薄まりながらも続いていました。特に西日本より東日本の方にその影響が強く残っていました。北海道ではさらに強く、生業の基本やその上に立つ社会のあり方がほぼそのまま残り「続縄文時代」へと続いていったのです。

### 五、おわりに

アフリカで生まれた人類が、長い年月をかけて世界中に拡散し、私たちの祖先が北海道に辿り着く頃には、様々な体験と生きるための技術を身につけていました。旧石器人は環境変化や資源の乱獲による食糧危機から脱し、植生食料を手に入れて土器を使った縄文時代という新しい未来を手に入れたのです。

縄文人の狩猟・漁労・植物食の採集をする、その様々な方法を見ると、彼らが北海道の多様な環境と食料資源をき

め細かく開拓・管理し、自然によく適応した生活の形を作り上げていたことが分かります。それは旧石器時代の乱獲を反省したわけではないのですが、自然の営みをよく理解し、乱獲を避け、自然と共存したものであり、出来ればその資源を増やしていこうとするものでした。このような縄文人の知恵と生き方は、現代のわれわれにも大いに学ぶべき点があるのではないのでしょうか。

(了)

## 景福丸の航跡―玄海の女王から海峡の女王へ―

齊藤 満

## 景福丸の誕生

一九二〇（大正九）年、鉄道省は下関と釜山への関釜航跡の旅客増加に伴い、連絡船三隻の新造を計画した。三菱重工業神戸造船所で、一九二二（大正十一）年四月、景福丸型第一船として誕生し就航した。まさに「玄海の女王」にふさわしく、船体は貴品にあふれ旅客の人気の的となった。

姉妹船の徳寿丸は同年十一月に就航し、さらに昌慶丸は翌年の十二年三月に仲間入りをした。総トン数、三千六百一九トン、全長百十四・三メートル、蒸気タービン二基二軸、速力約二十ノット、乗客定員は九百四十五名であった。煙突の特徴は細く二本、煙りを吐きながら航行する船影は、玄海灘を行き交う船の注目をあびた。

釜山―下関の距離二百四十キロ、釜山―博多間は、二百十キロであり、釜山と下関は昼八時間、夜九時間に短縮されたことと記録にあるが、それまではもつと時間がかかっていたことになる。釜山までの海峡は景福丸にとっては、厳しい航路であった。

しかし、景福丸にとって名譽なことがあった。それは、大正天皇の皇太子、裕仁親王（のちの昭和天皇）は、攝政を務める直前の一九二二（大正十）年三月から九月にかけて、イギリスなどヨーロッパ各国を歴訪した。

その返礼として一九二二（大正十一）年四月二十二日、イギリスの国王ジョージ五世の皇太子エドワード・アルバート（のちのイギリス国王エドワード八世）が来日の際に、お召船として瀬戸内海遊覧の大役を果たした。

玄海の女王として脚光をあびたことは、船長はじめ乗組員の誇りでもあった。その喜びも束の間だった。一九二三（大正十二）年九月一日午前十一時五十八分、関東大震災が発生、マグニチュード七・九だった。鉄道省は直に同船を被災地へ派遣を命じた。震災は相模湾の北西部・家屋倒壊の高かったのは湘南地方であり、東海道本線、東京―三島間が不通となった。

あまりにも大きな震災に、乗組員も驚くばかりであった。支援の主な任務は一般客、被災者、救援物資の海上輸送は九月七日から十月二十八日まで続いた。

連絡船に限らず、船は常に動いていなければ船の役目は果せない。定められた期日に、船体の整備検査、いわゆる船舶検査が義務づけられている。ドックに入る以外は休むことはない。

景福丸は特に命ぜられた場合を除き、ひたすら関釜連絡船として活躍し、朝鮮半島に、満州国・中華民国へ渡る人たちのために運航を続けた。

一九三八（昭和十三）年一月二十三日、思わぬ海難事故が発生した。姉妹船の徳寿丸と下関海峡の巖流島付近で衝突したのだ。徳寿丸は浸水し沈座したが、浮揚して修理を完了したのは七月であった。

その後も関釜航路、博釜航路に復帰した。

### 戦争末期と船の運命

関釜航路も米軍による機雷封鎖が、現実となり、景福丸も肌で海峡の潮の流れの変化を、感ずるようになってきた。空襲警報が発令されたり、人の動きも少なくなってきた。船舶の数も減ってきている。ついに一九四五（昭和二十）年七月に予感していたとおり、機雷封鎖で航行中止となった。日本が戦争に負けることが確実になったことを、船長・乗組員が語る言葉もなくなってきた。

八月十五日、船長と共に終戦を船上で知った。関釜航路に

命を懸けた仲間にとつて、矢折れ力つきた男たちが甲板の上で、しばらく動けなかった。この先どうして生きていけばよいか、すでに心の中で覚悟をしていたが、現実となれば新たな覚悟はいるものだ。

それから目を待たずして、船長から話があるというので、乗組員は甲板に集合した。

船長は次のように話した。

「戦争は終わった。諸君はよく頑張った。玄海灘に命を懸けた君たちの強い精神力に、船長として心から感謝する。よく頑張ってくれた」と、二度も語った。「しかし、諸君、北の青函連絡船は空爆で壊滅したのだ。その航路を直ちに確保しなければ、明日の日本再建の動脈が切れたままになる。先ほど電信を受けた。」船長の声は海軍の艦長のようになった。

「私と再び海の男として、行動を共にしてほしい。夕方まで航海長に返答してくれ……。」

立ちつくしたままの乗組員の顔は紅潮していた。解散後仲間には三々五々話しながらその場を去った。

夕方になった。再び乗組員が集合した。

船長が語った、先ほどの返答を航海長から聞いた。多くを語らないが、諸君の心意気に感動した。これほど感激したことはない。明日出航とする。「立つ鳥あとを濁さず」だ。速やかにスタンバイせよ！

それにしても早い出航だった。なつかしい玄海灘ともお別

れた。時が来た。汽笛が鳴って間もなく、「出航用意、さすが銅鑼の音はないが、見送る人も限られていた。

対馬海流に乗って景福丸は北に針路をとった。海図を見ても函館までは遠い。八月の日本海はおだやかだから、航海には楽なほうだ。

船長の心の中は、「わしがやらねば誰がやる、今やらねばいつできる」座右の銘としている。この言葉が浮んできた。

日本海の沿岸を航行しているが、この際、船長は海図を広げながら、山口県の長門の近くの川尻岬、島根の出雲大社の近くの日御崎を過ぎて、丹後天橋立の経ヶ岬を北上して、若狭湾の福井の越前岬、坂井の東尋坊を右舷に見て、石川の能戸半島の輪島を航行、珠洲の突端、禄剛崎と珠洲岬を海図に印していた。

航路は沿岸を走るわけではないので、佐渡島は右舷から眺めるだけにした。一日、一夜で函館に着くことはできないので、仮眠をとりながら岬・崎の灯台の先をみながら、秋田の男鹿半島の入道崎を越えると、青森の深浦・鱸作崎を確認してから、船は面舵いっぱいの状態に入る。ここまでくれば津軽半島の竜飛崎・指呼の間に、道南の山なみが連なり、白神岬の灯台の白さが鮮やかに見える。

津軽海峡の波もおだやかだった。対馬海流から分流した津軽海流も、海峡の流と同じように航行中は速度調整の参考となるのだ。

左舷に緑濃い山が突き出た矢越岬を見て、上磯の葛登支灯台を過ぎると、函館山が湾内を包むように船を迎えてくれた。古くから、天然の良港として国内外に、別名「巴港」で親しまれてきた港だ。

速度を減速し赤灯台をかわして入港スタンバイにかかった。長い航海であった。乗組員も久し振りに笑顔を見せたが、終戦になって三・四日目だ、心なしか息をひそめているような棧橋に、ダグボートに右舷を押しされ、船体は岸壁に着岸した。ここが母港になるのだ。

函館港に連絡船が来たぞうー。市民の声が潮風に乗ってやってきた。関係者の歓迎のあいさつもそこそこに、航路の確保ができたことで、一安心した顔が見つけられた。

下関と全く異なる異国情緒を感じる風情は、北の玄関として繁栄してきた港町を、乗組員は感した。

日を持たずして、八月二十日、景福丸は青函航路に就航した。休む暇もない、これが海に生きる者の宿命にも似たものがあり、内地という本州に、黒い煙りを吐きながら津軽海峡を走ることになった。

同僚船は壹岐丸（二代目、客貨船）、十一月に稚泊連絡船であった、宗谷丸が就航した。

## 景福丸と同型船名の由来

玄海の女王として活躍した景福丸の船名は、旧朝鮮時代の王宮、景福宮の名をとり、船名とした。

景福宮は現在、韓国ソウルの中心部、特別区の中に五大宮の一つとして、朝鮮王朝の正宮として六百年の歴史があり、この宮の創始者「太祖・李成桂」が高麗の首都を移転した際、新しい王朝の宮殿として建てられた。

次に、徳寿丸の船名は王宮徳寿宮に由来している。慶運宮（徳寿宮の当時の名称）。また昌慶丸も同じく王宮から船名を給わったことは忘れてはならないと思つた。

特に、徳寿丸は戦後も関釜・博釜航路で引き揚げ船として航行し、また洞爺丸台風による青函航路に來港している。昌慶丸は有川棧橋に係留され一時期訓練船として使われた。

景福丸三姉妹船であつたことの、函館港に停泊していたことを再認識した。

## 景福丸 松前へ

一九四八（昭和二十三）年八月一日、景福丸は新青函連絡船の就航により、海峡の女王として活躍していたが、停泊することも多くなつてきた。松前町の要望もあり、この日六百名の観光客を函館から乗せて、正午弁天島沖に停泊した。町

民は大船が來た、大きな汽船が船入潤の近くに入港したことに、驚きをおくしきれなかつた。

戦前は特に汽船が津軽海峡を往來し、白神岬ぎりぎりに航行していたので、景福丸という青函連絡船がこの海辺の沖に投錨したことは、わが船が、わが町にやつてきたようで、話題はひろがつた。

この大きな船が六百名を乗せて松前に來航したことを、口づてに私が知つたのは、二、三日たつてからのことであつた。

幾たびも船はつねに分乗して、最北の城下町に見学（觀光）に來たということは、二十八キロも離れた集落の私たちにとつては、なぜか自慢できるような、誇りにさえ思つた。私が十三歳の夏の日のことであつた。当時、集落は松前町と合併していなかつたので、大島村からは近くて遠い城下町であつた。

觀光は古くからの神社仏閣が多いところであつたので、束の間のの滞在であつたようだが、松前・福山城は時代を物語つてくれる。

その翌年の昭和二十四年六月五日、真夜中に起きた火災で、国指定史蹟松前奉行所跡と国宝松前城（史蹟指定名称は福山城、正しくは松前福山城、一般では松前城と呼ぶ）は、二つの重要建造物を焼失するという大事件があつた。（概説松前の歴史）

## 船へのあこがれ

生れ育った集落の海辺で少年期から青年期に至るまで、海を見ない日はなかった。私は左の水平線上から右へ見渡す習慣になっていたので、左の沖に浮かぶ渡島小島の灯台の明かりがともるところまで、沖を行く汽船、機帆船を眺め、渡島大島の夕日が空をこがし、波に金銀の光りが映る風景が、母が夕食の時間を告げるまで涙にたらずんでいた。

いつか大きくなったら汽船に乗りたいなアと思っていたが、終戦近くになってきた頃、北へ進む大船が潜水艦の魚雷をうけて、船尾を立てるように海に沈む光景を幾度か見た。十歳の八月十五日、天皇陛下の玉音は、集落は電気がなくラジオもないので、学校の先生が教えてくれて終戦を知った。

貧しい生活が続いた。中学生の二年から、午後からイカ釣り船に乗ることが多くなり、同級生はほとんど父たちの漁船に便乗した。先生方は黙認するほか術すずはなかった。

やがて十八歳頃になり、沖に出ることが当然のようになり、一人前になって家計を助けることは当然のことになった。

一九五四（昭和二十九）年九月のはじめ、あれほど船に乗ることを胸にしていたのに、その前年の夏頃から、津軽海峡に機雷浮遊のニュースが流れ、青函連絡船は夜間航行を中止することになり、イカ釣り船も安全でないことになり、当分の間、海に出て生計を立てることを断念した。

前浜の沖に浮かぶ渡島大島は、日本で無人島では一番大きな島だ。六十キロも離れているが、天気予報に活用するにはよかった。雲が島の頂上に笠をかぶると、風が吹く前兆だとか、大船の数が減つてくると気象の変化があるとか、海は一日たりとも同じ日はない。

この年の七月に、北洋漁業再開記念北海道大博覧会（以下北洋博）が開かれた。総予算約三億円、函館公園、五稜郭公園を会場に八月三十一日まで、延べ五十三日間開催された。入場者は約八十万人を数えた。

私は陸に生きる道を求め、岩見沢市から三笠町幾春別の桂沢ダム工事に採用され、その途中に函館公園の会場に行った。

集落から出てきた人間にとつて、とてつもない博覧会の大きさに驚いた。その時、記念に買ったネクタイピンが、今も大切に保存している。北海道の型にH Fの浮き文字があり、六十三年前のタイプピンだ。どこか保存してくれるところがあつたら寄贈したいと思っている。

その年の八月七日、天皇皇后両陛下の行幸啓、お召船洞爺丸で本道第一歩を函館に印せられた。

叔父が青函連絡船に乗務していたので、その当時の函館駅、栈橋駅などの歓迎は、私の想像を超えるので書き記さないことにする。

## 景福丸の終航

はるばる下関港から戦後の青函航路の立て役者として、船長はじめ乗組員の奮闘により、行き交う旅客を、時には定員の二倍、二千人を乗せたという景福丸、機関の故障で十時間余も海峡をさまよったこともあったという記録に、同船の果たした功績は後の世にも伝えなければならない。人間と同じく老いは必ずやってくるものであるが、豪華客船も破損も著しくなってきた。一九四九（昭和二十四）年七月三十日に惜しまれながら終航となった。

神戸造船所で誕生してから、二十七年間の長い航路の記録を作ったのだ。そして青函航路三年十一月の船歴を残した。私は松前町に観光客を乗せてきた景福丸を一度見たいと思いい、何年も経つてからのことだが、終航してからの同船と巡り合った。この船がやってきたのだ、函館棧橋駅の南岸壁に、函館山に船首を向けて、岸壁に寄り添うようにしていた。

## 日本ではじめての海上ホテル

一九五〇（昭和二十五）年一月九日、景福丸は日本ではじめての海上ホテルとして、係留場所ので船体を活用することになり、同年一月二十五日に開店披露式が催された。正式に許可されたのが六月三十日であった。函館の港に新名物、唯一

のユニークな海上ホテルが大きな話題となった。

この計画について、持ち込まれた市側でも「国鉄市議」と「旅館市議」に分かれ、利害をめぐって激しい議論が交わされた。（函館市史による）

ホテルの広告には横文字で、「日本で唯一の海上ホテル、旅館部、洋食部、和食部、喫茶部、理髪部とあり、景福」とある。もう一枚のポスターには、これも横文字で、「函館棧橋駅横、海上旅館景福とあり、船のシンボルともいわれた細長い煙突の中央に女性が甲板の鉄枠から岸壁を見ている光景だ。暖房室内電話完備の案内も当時を思い出される。

ホテルとはいっても福祉事業的な性格が強く、売店や船内食堂などを請け負っていた。鉄道弘済会が船を借り受けての営業であった（『鉄道弘済会北海道支部史』）。

市史によると、また地元紙には開店当初、戦災未亡人やその子弟が、女中、ボーイとして働く慣れない仕事ぶりとともに、宿泊客の中には函館に居るような気がしない。アメリカへでも行っているような気がして、とても愉快ですよと、感想が報じられている。

その後、設備の不備による食堂以外の一時休業や、海底への土砂の堆積により、船体が次第に傾斜するなど、海上ホテルならではのトラブルがでてきた。

棧橋待合室との間にオーバリーブリッジが掛けられたり、三等雑居室を団体客向けに模様替えるなどこの状況を、「函新」

「道新」が記していた。

私が同ホテルに宿泊することはなかったが、船の周辺の海の水はよどみ、大小の浮遊物がまつわりつくようになっていた。ホテルに入るためには大きなタラップ、これは船が航行中のときと変らないように見えた。そつと渡つて入口の受付のところまで行き、すぐ引き返つてきたが、瞬時の体験であった。

終戦後、すでに時は経っていたが、古い漁船、だるま型の大きな船（船）が多く港内でただ浮かんでいるだけで、雑然としており、その船尾を見たらそこに住み込んでいる人もいたようだった。

人の姿と短い煙突から、かすかに黒い煙りが立ち昇っているのが見えた。

現在の朝市場はそのときの海であり、駐車場はバラックと物置き小屋があった。海上ホテルの船の位置を思い出すと、今の大きなホテルの近くまでさざ波が打ち寄せていた。

北洋博覧会の宣伝は、まず函館駅周辺から観光都市函館の玄関口として、美観が先決問題であった。

海上ホテルもこの問題に真剣にとり組むことになった。宿泊者へも協力を求めることにもなった。客室は和室五室、洋室十四室、収容人員は一般客四十六人、団体客二百八十人の計三百二十六人で、一般宿泊料が九百五十円となっていた。

駅や棧橋からはすぐ目の前であり、珍しさもあつて連絡船

や鉄道の待合い客、見送りや出迎えの人たち、修学旅行生、観光客に利用され、食堂でのクリスマスパーティー、送別会、各種の宴会が催され、市民の自慢のホテルとして存在が高かつた。

しかしながら、老朽船であったために、維持費が経営を圧迫し、年々赤字を抱える状態にあつたため、ついに一九五六（昭和三十一年）年末に休業の止むなきに至つた。

『鉄道連絡船一〇〇年の航跡』古川達郎著によると、その後は船体の処置をめぐつて、しばらくそのまま保留されていたが、船としての活用策もなく、スクラップとして売却されることになり、一九五八（昭和三十三年）年にその生涯を閉じたと市史にあつた。

私はあの景福丸の最期が函館であつたのかと、思いを新たにしながら、枯れるように静かに幕を閉じたことは無念であつたに違いないと、心の中で合掌した。

ある日、中央図書館で「函館駅百年物語」（堀井利雄著）を一読して驚いたことがあつた。それは次のような文面があつたからだ。

・・・一九五〇年に廢船となつたが・・・鉄道弘済会が海上ホテルを開業。しかし船体の安全や排水の問題で一九五六年廢業。その船体は函館港中央ふとう造成埋め立てに沈められた。有為転変、身にしみて哀れをさそう景福丸のテール・エンドであつた。」と著者が書き記している。この文章をみて私

は、スクラップとして売却されたほかに、函館港の港湾中央埠頭の造成の礎になったことに、まさかこのような事態があったことを、知らせないか、話題にしなかったか、景福丸の名譽のために公表することをさけたものと、私なりに考えてみた。

今は話題にもしない言葉だが、

・人は死して名を残す

・虎は死して皮を残す

ということを耳にしたことがあった。

景福丸は船体を捨てて埠頭の礎になったのだと、思っている。何か記念の碑が残っていたら、人情の厚い函館人として納得できたかもしれない。

先ごろ、久し振りに埠頭の先端に立ってみた。そぞろ秋風が港の中を走り抜け、打ち寄せるさざ波は、岸壁を洗うように小さな三角波となっていた。

この場所に函館港湾合同庁舎があり、函館駅から徒歩約二十分、函館海上保安部がある。町名も海岸町であり市民にとって馴染みの深いところである。

青春時代の一時期、いか釣り船に乗っていたが、渡島小島沖も機雷浮遊であり警戒海域であった。ある夜、群なす漁船の中に白い船体の巡視船「だいおう」が近づき、機雷の発見と漁船の安全操業のため、サーチライトが海面を円を描くように照射している。その雄姿に私は海を守る男たちにあこが

れた。

どれほどか青函連絡船にとつて、津軽海峡の守り神として感謝したことだろう。

函館の港は寂しくなってしまった。連絡船がなつかしくなってきた。先輩・上司の転勤で三十年にわたり歓送迎係のように、桟橋での再会、別れのドラマに立ち会ってきた。

集団就職で上京する金の卵、中学を卒業して笑顔の中に涙を流して、ドラの音に切なさをこらえる姿も見た。連絡船の上り便は不安と悲しきを乗せ、下り便は故郷に錦を飾る人たちの姿が印象に残っている。

この人たちの年齢も間もなく、団塊の世代、高齢者の仲間入りとなるのだ。

### 夢の中の夢

私は函館が好きだった。もう一人の叔父が船の機関士であったので、ときおり故郷の父母のところに来ていた。子ども心にも頼もしかった。

都会の函館の話はよく耳にしていたが、用事もないのに函館に行くこともない。祖父母は、孫の私に、いい子にしていたら「ハコダイ」に連れていくぞ！口ぐせのように語っていた。小学生になる前、一九四一（昭和十六）年の春のような気がする。半日がかりで祖父と一緒に「ハコダイ」（函館のこ

と)にやってきた。とにかく驚くことばかりであった。その年の十二月八日、日本は米国に宣戦布告をした。昭和十七年四月、国民学校初等科一年生に入学した。

前浜の沖を行き交う汽船の数が増えてきた。父は樺太に出稼いでいない。右の方に奥尻島が見える。祖父は北へ行く船影を指差して、樺太へ行く船だろう、黒い煙を吐く汽船、近くに見えるのは小樽方面だといった。

時代は大きく変化してしまった。語ることは山ほどあるが、船酔いのする私にとって、沖の船を眺めることだけで、のちにいか釣り船に乗るまでの時の長さは辛かった。

これも夢ではなかったが、夢のような気がしてならない。短い夢の中にこんなことがあった。

焼玉エンジンが故障したいか釣り船の機関士が、函館に部品を買いに行った時の話だ。

時間があつたので、二、三日函館に泊まった時に、カフェに行きそこで聴こえたレコードのことであつた。

一九四九(昭和二十四)年に、歌手田端義夫が歌った「玄海ブルース」が、船乗りによく歌われた。三節を記したい。

「嵐吹きまく玄海越えて

男船乗り往く道やひとつ

雲の切間にキラリと光る

星がたよりの人生さ」

玄海灘の厳しい様子が分かる。海上ホテルになった頃の歌

だから、当時の乗組員も口ずさんだことだろう。私もいか釣り船で歌った。

夢はまだ続く、函館棧橋駅と本駅はすぐ近い、夕暮れの大門通り、松風町周辺のネオンがきらめく頃になると、若い人たちはどこからとなく集まってくる。繁華街が活気づく時間だ。行きつけの酒場に入つて行くのが見える。

函館の夜の街で飲む酒はうまい。地元の歌がレコードから流れると、酒を飲む者にとっては、心が安らぐものだ。海の町だけに函館を題材にした歌詞の歌が多く、一九四四(昭和十九)年の「函館ブルース」がある。小野由紀子が歌った。今も歌われている。

私の心に今も残っている歌は、二〇〇〇(平成十二)年六月、瀬川瑛子が歌った「函館の雨はリラ色」だった。どうしても一節だけ記してみたい、函館の心の一端を感じるからだ。

「うれしいときも涙がでると  
おしえてくれたあのひとと

いっしょにぬれた朝の雨

おもいだします大森町の

白い渚なみさきにしみとおる ああ

函館の雨はリラ色」

父、瀬川伸は一九一六(大正五)年に函館に生れ、函館商業学校を卒業後に上京し、歌手になり函館の歌も歌っている。

瀬川瑛子は歌手となり数々の歌を歌い続けている。

瀬川伸は二〇〇四（平成十六）年三月、満八十七歳で逝去した。私は母が瀬川伸と同じ年であるので親近感を抱いていた。今年、母は百一歳になる。施設で過しているが、記憶は衰えていない。夢と現実が入り乱れてきた。目が覚めてきたようだ。この歌はまだ夢の中だった。

人も船も、波乱万丈の生涯を送ることになるが、これは運命であり自然に従わざるごとだと、感ずるようになってきた。

書き残しておきたいことがあった。

景福丸が関釜連絡船に就航のある時期に、仲間の客船崑崙丸級四隻と、貨物船吉岐丸級六隻が就航したことにより、運用から外れたことがあった。

当時、海軍に目をつけられ、極秘で「日本海軍実験船」として徴用された。場所は「函館ドック」で改造された記録がある。景福丸は函館とはゆかりの地であった。

ときおり、旧棧橋近くに係留されている、「函館市青函連絡船記念館摩周丸」を訪ね、往事をなつかしく思い出している。ここは海の駅であったのだ。この近くから大型フェリーが行き交う船影を見ることがができる。

私の好きな季節があった。六月頃海霧が港を包むようになると、霧笛が鳴くように周囲にこだまする。函館の風物詩となるのだ。

巴大橋を通ると港が一望できる。潮の香りが漂うばかりだが、深呼吸もまたよいものだ。

終わりに

景福丸の航跡を綴りながら、栄光の日々もあり、終戦時に青函航路を守り抜いてくれたことは、函館市民として時を経ても忘れることはできない。私は二十三歳に空知郡上富良野町から函館に転勤してきた。定年後も函館人として今日に至っている。人生の終着駅をこの地に定めた。一度も転勤しないですんだ。

函館の人は人情に厚いといわれてきた。この伝統を引きつけたくて仕方がなかった。

若い頃に一読した方丈記を、もう一度ページを開いてみた。胸が打たれてしまった。

行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

玉敷の都のうちに、棟を並べ——中略——

昔あり家は稀なり・・知らず、生れ・死ぬる人、何方より来りて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り誰が為に・・言はば、朝顔の露に異ならず、或は、露落ちて、花残れり。

残るといへども、朝日に枯れぬ 或は、花しぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

この世の無常を書にした、平安時代の末期から鎌倉時代にかけての日本の歌人・随筆家、鴨長明に身震いを改めて感じた。

人の一生のはかなさをかみしめながらも、現実から目をそらすことはできない。

函館港の天空に、上弦の月さえてかすかな光に尾花が揺れ、中央埠頭の片隅に秋の草があった。

もう一度、景福丸に触れてみたかった。「玄海の女王、海峡の女王」であつた在りし日をしのびたい。私は忘れない。

終わり

#### 参考文献

函館市史 通説編四卷

概説 松前の歴史

函館駅百年物語

青函連絡船物語

パソコンから景福丸検索

## エキストラのように

佐藤 健

はこだてフィルムコミッションに登録して半年が過ぎた二〇一七年五月二十九日、ようやくエキストラ募集のメールが事務局から届いた。事務局は函館市役所内に設置されている。

昨年十月二三日の北斗市市民合唱団による「創作合唱劇アズキの花」に出演させていただいて、演じることの難しさを知り、それ以上に一つの舞台を創り上げるために多くの関係者の陰の力があることを身をもって実感した。海上自衛隊を定年退職してから舞台上立つことになった経緯は、昨年の投稿に書かせていただいたとおりである。

みんなで何かを創ることの喜びを知った私は次なる挑戦の場を求めて、かねてから興味のあつたことをネット検索してみた。「エキストラ 函館」で検索すると「はこだてフィルムコミッション」の登録画面が表示され、そこには過去の映画やテレビ、CMのロケの記録があり、多くの作品で函館が使われていたことに驚かされる。迷うことなく登録フォームに必要事項を記入して送信すると間もなく登録完了の返信メールが届いた。ここでのエキストラは、ボランティア・エキストラである。

今回の募集内容は、函館出身の作家「佐藤泰志」の小説「きみの鳥はうたえる」の映画化である。本作品は、佐藤が五度の芥川賞候補になった中で最初の作品である。二人の男と二人に愛された女の三人の若者のひと夏の物語であることが新聞に紹介されているのを読んだだけで、原作は読んでいない。監督は札幌市出身の三宅監督である。オール函館ロケで、六月下旬までの撮影予定である。

募集は三十回以上に分けて行われ、メールには撮影日時と男女の別、対象年齢が示される。その中で条件に該当して参加可能な日時のものに返信する。この段階では、場所と役柄はわからない。依頼される場合には、二日ぐらい前に集合場所と服装を指示するメールが届くシステムである。最終確認のメールを返信して手続きは完了する。募集も終盤になると依頼も一切も前日といったこともあった。私は、基本的には仕事に影響が出ない土日で五七歳の年齢が対象となる募集に応募した。年齢不問の条件も多く、時間が許す限りの募集に返信した。

事前にエキストラについて調べようとネットで検索した

「エキストラの心得」は、次のようなものである。

その一、集合場所への移動は公共交通機関を利用する。

その二、指定された集合時間の十五分前に到着する。

その三、「おはようございます」と元気に挨拶する。

その四、現場入りしたら携帯電話の電源を切る。

その五、撮影中や待機中の私語は厳禁である。

その六、役者さんに話しかけたり、サインや握手を求めない。

その七、芝居は「カット」の声がかかるまで演じきる。

その八、撮影時間は予定通りには終わらない。

その九、スタッフの指示に従う。

その十、出演者には守秘義務が課せられる。

集合場所には事務局のM氏が待っており、撮影が終わるまで立ち会っている。仕事とは言え土日や時間に関係なく、ロケ先を調整してエキストラの手配するのは大変なことである。前半は雨が多く、予定変更の対応が最も大変だと話していた。

現場では基本的に、助監督が世話をしてくれ、役柄や服装の指示を出してくれる。三十歳前後の小柄な女性だった。助監督は偉いのかと思っていたが、テレビドラマで見たことのある番組制作のAD（アシスタントディレクター）と同じように、腰に様々な色のガムテープを通した紐を巻き付けて忙しく現場を動きまわっている。時には大声で怒鳴られることもある。監督ではない他のスタッフからの叱責である。段取

りの悪さを指摘されているようだ。その場面だけを切り取るならば、セクハラ、パワハラのオンパレードである。助監督だけでなく、音声や照明の助手と思われる若い男の子も同様である。映画も現場で覚えることが多いのだなど舞台を経験してわかったような気になる。助監督をはじめ、それぞれが上を目指すための修行の場なのだと思得ているからこそ何を言われても耐える事ができるのである。ハラスメントを全面的に肯定するものではないが、受け手側次第によることも大きい。もしかしたら、撮影が終わればみんな酒でも飲み、その席上で先輩達から「お疲れさん」や「〇〇は良かった」などの労いや次につながる言葉を掛けて貰っているのかも知れない。

私が海上自衛隊時代の話で恐縮であるが、個人の技量（スキル）の低下が問題視され、教育のやり方が検討されたことがあった。技量の低下は直接戦闘力の低下につながる重要事項である。その検討項目の一つに、旧海軍からの伝統を引き継ぐ「徒弟制度の廃止」があった。徒弟制度は、海軍に限ったことではなく職人と呼ばれる職種の中で脈々と引き継がれていくものであり、それを否定するものではない。基本的な知識は入隊直後に教育するものの艦隊勤務に必要なシーマンシップに代表される艦を運用するための気象・海象などの自然に対する知識や予測は経験によって培われるものであり、先輩の背中を見て体で覚えることが求められる。しかし、そ

れには多くの時間を要した。自衛隊の任務の拡大と人員不足の時代のことである。また、新人類と呼ばれて久しい若者たちに愛のムチが通用しなくなった時代でもあった。鉄拳制裁は決して許されることではないが、危険が伴う場合は大声で指導することもある。しかし、それで相手が委縮して教育の成果が得られない現実もあった。理路整然と説明することが求められるようになり、「言われたとおりに黙ってやれ」では人は動かない時代になったのである。いや、それが本来の姿なのではあるが・・・。

話を元に戻そう。撮影現場は緊迫感に満ち、それが私にも伝わって来るのがわかる。テストと本番が繰り返される中で、シーン番号の読み上げとカチンコは助監督の仕事である。監督の「ヨイスタート」の声でカチンコが鳴ってカメラが回される。皆の目が役者に注がれ、監督の「カット」でカチンコが打たれるまで全神経を集中する。ちなみにカチンコの役割は、シーン番号のフィルムへの表示と映像と音声を別々に記録する場合の編集時の同期をとる起点にするためらしい。自分の映画を撮る日を夢見て頑張る彼女はカッコイイと思う。

撮影期間中、三回のエキストラの依頼があった。

第一回目

撮影日時 六月五日(月)二二〇〇～二三〇〇

撮影場所 ジャズバー〇〇(松風町)

集合時間 二二〇〇

服 装 カジュアル(上着二種類準備)

その日は定時に退社し、一旦家に帰って夕食をとり風呂に入って身嗜みを整えて午後の八時半過ぎに原付バイクで撮影現場に向かった。店の前には事務局のM氏が待つていて、前の現場での撮影が少し遅れていることを告げられる。男の役者さんが来るらしい。それにしても今夜は冷える、六月とは思えない寒さである。そう言えば、日中は職場の事務室でも石油ファンヒーターを付けっぱなしだった。店の中で待つように言われて入ってみると店は通常営業中である。三人ほどの客が出て行ったばかりで、カウンター席に男女一人ずつの客が離れて座っている。マスターとママの話しぶりから常連客のようである。窓側に置かれた三つのテーブル席にもそれぞれ男と女が座っている。空いている手前のテーブル席に座って店内を見回すと店内にはジャズと思われる音楽が流れていてジャズに関するポスターが貼られている。ジャズなど全く知らない私にとっては、今までに足を踏み入れたことのない店である。三十分ほどして、ロケチームが到着すると前の現場から引き続きのエキストラの人たちが合流する。続いて入って来た小柄な女性が、マスターとママに挨拶した後、「助監督の〇〇です。今日はよろしくお願います」とこちらに向かつて挨拶してくれたが、早口で名前を聞き取れなかった。少し遅れて監督も入って来て、店側への挨拶の後で私たちにも丁寧に挨拶してくれた。助監督から店の客としての設

定が付与されたがテーブル席の二人もエキストラであることがわかった。服装については、夏の設定であることからジャケットを脱いで半袖シャツになることを指示された。合流した他のエキストラの人は、表の通行人の役であるらしく二組のカップルが出来上がっている。もう一人の女性は、スマホを見ながら足早に歩くOL風の役である。一瞬女優さんかと思っただぐらい端正な顔立ちの女性で初めてではない雰囲気があった。半袖ではないが薄着の彼女たちは寒い中で動きのテストを繰り返している。

店内から外を見ると左側から店の前をスマホの女性が通り過ぎ、その後右側からカップルが通り過ぎる。同じタイミングでもう一組のカップルが道路を挟んだ向こう側を右側からゆっくり歩いていく。店の中では、カメラの軌道が設置され照明が調整される。台本もなく原作も読んでいない私に関係なく、それぞれのプロが小気味よい動きで準備を進めているが、照明の調整に時間がかかっているようだ。カメラが店の奥からカウンターとテーブル席越しに道路に面した大きな窓ガラスに向けられていて、窓のブラインドが開かれて表が見えている。どうやら中から通りの様子を撮影するようだ。

結局、カウンターで飲んでいた年配の男性客はそのままで、エキストラの女性がその横に座り、窓側のテーブル席に私ともう一人の男性が向かい合って座る事になった。静かにジャズを聴いている客という設定である。もう一人の妙齢な女性

の客は、撮影スタッフが到着する前までは、「映ったらどうしようか」などと心配しながら満更でもないようだったが、いつの間にかカウンターの奥に引込んでしまっている。私たちの前には麦茶が入ったグラスが置かれているが、カウンターの本当の客はウイスキーの水割りをお代わりしていた。おまけに隣のエキストラの女性と一緒に飲もうと誘ったりしている。中の準備が整う頃になって、どこかで待機していた二人の男の役者が現れて監督と話をしている。一人は半ズボンとTシャツ、もう一人もTシャツ姿でいかにも寒そうであるが、二人とも丈の長いダウンコートを着ている。東京に比べれば真冬の寒さに思えるだろう。半ズボンじゃないほうが主役でありテレビで見て知った顔である。両親が有名な個性派俳優であり弟もテレビでよく見る役者一家である。役者と店の中の準備ができたところで、いよいよテストの開始である。時計は午後十時半に近い。表のエキストラの通行人の通過後、主役の役者が左側から店の前を通って店のドアを開けるシーンである。カメラは店の奥から窓側に近寄ってくる。これでは私の後ろ姿しか映らない。もしかしたら頭の先しか映らないかも知れないアングルである。通行人と役者の歩くタイミングが細かくチェックされる。店の中では、マスターがサックスでギターとセッションしてジャズバーの雰囲気盛り上げていている。私に対しては特段の指示はなかったが、一度だけ助監督から指示が出た。「量が多いので少しグラスの中身を減

らして下さい」ちよと喉が渴いていたので美味しくいただいた。何回かのテストを経て二回の本番撮りで無事終了した。最後に監督やスタッフからの「お疲れ様でした」の声に送られて店を出た。時刻は丁度二三時、予定どおりである。撮影は場所を変えて続くようで、忙しく片付けている。翌日鼻詰まりの症状が現れ、どうやら風邪をひいたようだが体調管理も自己責任である。

## 第二回目

撮影日時 六月十日(土)〇八三〇～二〇〇

撮影場所 ハローワーク函館(新川町)

集合時間 〇八三〇

服 装 普段着(ハローワーク利用者)

天気予報どおりの雨である。ハローワークに入るのは初めてである。私は、前職を定年退職して再就職したが、幸い前職のOBのご尽力を得て今の仕事に就いている。服装は、利用者らしく実際の仕事で着ているグレーの作業着を着て行った。企業のロゴの付いたものはNGなので左胸の会社のマークは同色の紙を貼って消した。入口を入ると左手にパソコンがたくさん並べられたエリアがあり、個人で求人情報を検索できるようにになっている。普段はどれくらいの利用者があるのかわからないが、そこにエキストラが集められていて男女十五人ぐらいいいた。間もなく助監督が現れてその中から職員役の人を指名していき奥の相談窓口に配置する。残った人

が利用者役となり、相談窓口や資料ラックに配置する。最後に残された数人が待合室の長椅子に座らされる。最後に指示された私が座る位置は、一番奥まった椅子の端である。カメラは入口側から撮っており、一番遠い場所である。役者は、先日のロケの時に半ズボン姿だった彼だ。彼が入って来て受付機で受付をして待合室の椅子に座るシーンである。と、その彼が私の左側に座った。台詞はなく、何度かテストが繰り返される。ついに私も銀幕デビューかと期待が高まった瞬間、スタッフから声が掛かった。「すみません、場所の移動をお願いします」黙ってスタッフの指示に従う。次の配置は、入口に近い長椅子であるが後列だ。まあ、カメラに近くなったからいいかなと考えていたら、年配の男性が先ほど私が座っていた席に案内された。しかも役者に向かって飴玉を差し出して「飴たべる？」の台詞付きである。どう見ても役者ではないが、大人の事情があるのだろう。その後、何度かテストが行われ、その度に役者の彼は飴玉を口に入れては吐き出していった。その間に少し冷静さを取り戻してエキストラなりの自分の役作りを考えてみる。実は、昨日の仕事終わりに散髪屋に行って夏らしく髪を短くしたが、髭剃りを断った。市内の工場をリストラされた無精ひげの工員をイメージしたものだ。よって、うなだれた姿勢で椅子に座っていたところ、そこに今度は、監督が近寄って来て話しかけて来た。「僕なん

かこんな所で待っていると眠くなっちゃうんですよね。椅子の背にもたれて寝ちゃいますか」指示どおり首を少し左に傾けて目を閉じる。自分のイメージとは違うが、監督の指示は絶対であり、大役を逃した私への気遣いだったのかも知れない。

役者の彼が私の前を通り過ぎる。カメラにどのように映っているかはわからないが、映画の中では、ストーリーには関係しない背景のようなものだろう。一回目の本番の後に再び監督が来て「今度は首を右に傾けてみましょうか」と言われ、監督の映画の世界観に触れたような気がした。二回目のカットがかかると監督から「よかったです」と声を掛けられた。引き続き役者の彼が椅子に腰掛ける場面を正面から撮ったが、あのままの席だったら私もアップで映ることになっただろうか。十時三〇分、ここでの撮影は終了である。今回もスタッフの「お疲れ様でした」の声に送られて初めてのハローワークを後にした。雨は降り続けている。

### 第三回目

撮影日時 六月十七日(土) 一四〇〇〜一七〇〇

撮影場所 弁当屋〇〇店(港町)

集合時間 一四〇〇

服 装 普段着(弁当屋の客)

天気快晴、久しぶりの青空である。気温も二十度を超えてようやく初夏らしくなって来た。現場が普段はあまり行かな

い場所であるため少し早い午後一時に家を出る。三十分前に到着、こんな所に弁当屋があることを知らなかった。未だ誰も来ていない様なので近くのショッピングモールで時間を調整する。五分前に再度行ってみるとM氏が迎えに来てくれた。

前の現場が遅れているようだ。場所は、すぐ近くの市立函館病院らしい。今日の役者は女優さんであることが告げられる。両親が有名な役者であることも教えてくれた。私にとつては母親が若いときに演じた「涼子先生」が思い出深い。倉本聰の脚本「北の国から」の富良野の小学校の分校の先生である。

思わず心の中でガッツポーズをとる。店の中で待たせてもらうことにする。その間にもお客さんが来て弁当を買っていく。その様子を静かに観察して役作りの参考にする。ここでのエキストラは男女各二名で、私が一番年上のようなのである。待つこと一時間、ようやく先発のスタッフが到着して、店内の確認を始めた。企業ロゴやキャラクターのポスターと人形が外される。準備に時間がかかるようで、ロケ車の黒いワンボックスカーでの待機を指示される。もちろん案内は助監督で、エアコンまで入れてくれた。しばらくして助監督が呼びに来て途中で衣装を積んだ車の前で上着を脱いで茶色のエプロンを着せられる。もしかして店員役になったか。案内されて店に入るとそこには、若い二人の女性が監督と談笑していた。きつと入口側に座っている女性が例の女優さんであろう、若い頃の母親の面影が感じられる。ゆつたりとした青いシャツ

を着ており、同じ年頃のもう一人の女性は白いシャツを着ている。きつと彼女も女優であろう。そんな光景を横目で見ながら店の奥に進む。厨房に居ても何も映らないように思うが、厨房の小窓から弁当を出す役なのであろう。もう一人の女性もエプロンを着けていて弁当の種類を指示されている。彼女が接客するようで、しかも台詞付きである。すると助監督からエプロンを外して外に出るように言われる。エプロンを着けていないOL風の女性と一緒にいる。今度は、店の前を通り過ぎる通行人役である。大いにながかりするが、近くのスタッフが冷たい麦茶を勧めてくれ、女性には椅子まで用意してくれた。程なくして、再び助監督の登場で中に案内され、今度は女優二人の横に座れと言う。監督が寄って来て、「この間の方ですよ」と声を掛けてくれた。それだけで、何か特別な気分になるが、今度の役は注文した弁当を待つ客である。白の半袖のポロシャツだったが、隣の女優のシャツの色とかぶるという理由で、薄い生地作業着風のものを着用することになる。手にはカウンターのの上にあつた市内のフリーペーパーが渡される。店員に「ヒレかつ弁当の方」と呼ばれたらカウンターに行つて弁当を受け取り「どうも」と言つて店を出る段取りである。入れ違いにもう一人の男性エキストラが入つて来て注文済みの弁当を受取つて出て行く。その間、二人の女優はなにやら小さな声で会話をしているのである。最初のカットは、女優二人と私の三人が座っている正面からの

撮影である。もしかしたら自分もフレームの中に入る可能性が大きい。本番は彼女たちの会話以外は無音で撮る。弁当のビニール袋の音にも注意を払う。日差しが強くなり込むようになれば、すかさず遮蔽板が設置される。表のスタッフは、車両と歩行者を止める。次のカットは私の隣に座っていた女優がカウンターで弁当を注文して席に戻るシーンである。タイミングを計つて弁当を持った私が出た。入れ違いにもう一人が入つて来る。三つ目のカットは、女優二人のアップであり、顔のすぐ前にカメラのレンズがある。当然、私はフレーム外で関係ないと奥での待機を指示されたが、再び呼び戻されて弁当を受取る動きをエアーで行う。絶対にフレームからは外れた動きであるが、これにどんな意味があるのかはわからない。最後のカットはカウンターの中からの撮影で二人の女優が弁当を受取つて店を出るまでである。同じシーンの撮影で、カットを変えながらも同じに演じる役者はすごいと思つた。女優二人とは近かつたものの、あまりに近すぎて顔を横に向けて直視するのもはばかられ少し残念に思う。

また、何回もテストと本番を繰り返して、その度にスタッフが駆け寄つて髪や化粧を直したり衣装の乱れを直したりと忙しそうである。喉が渴いていないかとか暑くはないかなど、スタッフの役者への気遣いは細かい。音声担当は無理な体勢でマイクの竿を伸ばしている。そう言えば、以前二十歳前の女優がテレビ番組内で「どうして音声や照明の仕事をしよう

と思ったんだろう」とスタッフを見下すような発言がネット上で非難されていたが、最初から注目された彼女にとつては素直な気持ちだったのだろう。運動会で順位を付けず皆で手をつないでゴールしたり、学芸会での主役を複数人で演じたりする偏った平等教育が一因にあるのかも知れない。今回の二人の女優さんは、スタッフにケアされる都度「ありがとうございます」と声に出していた。その姿勢が大事だろうと思う。

誰もが主役をやるわけではなく才能や運が必要であろう。しかし、主役だけでは映画は成立せず、脇役や裏方あつての主役なのだということを学ぶ必要がある。いや、主役に限ったことではなく、脇役やスタッフが事件や不祥事を起こして映画の公開が中止になったり途中で打ち切られるなど言語道断である。役どころは違つても関係者としての責任は平等である。それを考えたら軽はずみな行動はとれないはずである。今日の撮影は、エキストラが弁当を受取るときの台詞を録音して終了である。

店員 「ヒレかつ弁当のお客様」

客1 「どうも」(私の台詞)

店員 「空揚げ弁当のお客様」

客2 「はい」

これだけの録音であるが、厨房でフライを揚げる油の音が入るといふことで揚げ終わるのを待ったときにプロの仕事を

見たと思つた。時計は午後六時になつていた。

今回エキストラの体験を通じて勉強させていただいたことは多い。エキストラは、単に背景や置物ではないが、その存在が邪魔になつてはならない。むしろ居なくてもよい存在である。でも、自らを主張しないが、居たら居たでその場の雰囲気が出るとか、場面に動きや奥行きが出るといったものであると思う。その精神は宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に似ているように思う。これ以来、テレビドラマを視るとき、奥の人物が気になるようになった。喫茶店の奥の席に座つて話をしている男女は、ピントがぼやけているが楽しそうだと、か、役者越しの窓の外を何人かが行き交うのを視て、どこへ行くかとしていのかを想像したりして物語には直接係わらないけれどもその個々の人生にまで想像の翼を広げて楽しんでいく。

これからの人生は、エキストラのように生きたいと思う。

今回の経験を機に視線を家庭に向けてみた時、改めて妻への感謝の念が沸いてくる。今は子供たちが家を出て夫婦二人暮らしであるが、これまで私が仕事で長い航海や単身赴任で家を空ける中、一人で子供たちを育て家庭を守ってくれたのは妻である。仕事に専念できたのは妻のおかげであり、私が主役になり得たのは、妻が裏方として頑張ってきたからに他ならない。今後は、妻の心がより豊かに暮らせるように、私の出来る限りのことをしようと思う。

第一に健康に気を遣うことに努力しようと思う。生活習慣病予備軍であることから、妻が作ってくれた食事を感謝して食べ、妻が薦めるドクダミ風呂に入り、レモンジュースを飲む。糖分と塩分を控えるために、ご飯を減らし醤油を減らし、マヨネーズを絶つ。でも楽しみも必要なので、ときどきは大福をこっそり食べることを見逃してもらおう。死ぬまで自分の足で歩くことを目標にして介護の心配を軽減する。

最近の妻の関心は「野ブドウ酒」である。どこかで肝機能回復の効能を聞きつけてきたらしい。野ブドウは、地方によつては「イヌブドウ」や「ウマブドウ」などと呼ばれて、古くから民間療法として利用されているようである。鹿部に住む義父に聞けば、昔は北海道でも多く見かけたものらしいが、最近ではあまり見かけないようである。今でも山菜採りなどで山に入ることがあるらしく見つけたら採っておくと言われたが、八十歳も半ばなので無理をしないで欲しい。

この映画の公開は、来年の秋ごろの予定である。もしかしたら、私が出た部分が全てカットされているかも知れない。もちろん初めからエンドロールにクレジットが出ないことも承知している。せいぜい撮影協力「函館市のみなさん」ぐらいだと思っが、それでも今後は、そのクレジットに恥じぬ「函館市民」として人生を送ろうと固く決意する。私はこの映画の撮影でほんの一瞬かも知れないが、カメラの前に立ったのだから。例えエキストラであつても監督や役者やスタッフ、

関係者の思いを共有できたと信じるからであり、その責任は重いと思っ。

来年の公開が待ち遠しい。

## 選評

### 竹中征機

今年も良い作品が多数集まり、大変嬉しかった。

優劣が付け難く、選外の作品の中にも捨てがたい味があった。

今年の入選基準としては、作品の学問的論理性も重要であるが自身がどのように関わり日々の生活の中でどう生かされたのかということである。その点フイクションとの違いは厳しい客観性と検証の思考が求められる。

### 「歌声喫茶との出逢いから」

高島 啓之

最初にあげる高島さんは歌声喫茶構築を情熱的かつ実践的に描き読み応えと説得力がある。そのスローガンの中に「歌声は青春 歌声は若さ・・・覗いてみて 仲間たちが待つてまゝす」とある。元々は政治的、あるいは庶民のガス抜きとみなされるが、逆にいうならま

に楽しみのためと、大げさに構えることのない活動報告はとても新鮮に感じた。唯、書きたいことが沢山あったとしても、必要以上の前書や冗舌をさげ省く勇氣も大切になってくるだろう。

### 「庸人さんに会った」

酒を愛した詩人・片平庸人

今田 優一

越後のアンデルセンといわれた庸人はいつとも子供たちに囲まれていたそう。なにせ、越後出雲崎の良寛に憧れていた。

そのあたりの経緯と函館に至るまでが、とても分かり易い。

高橋翔太郎の「酒は泪か溜め息か」昭和六年の作だが、これは酒好きの庸人さんをモデルにしているといわれる。かつて息子さんと思われる先生と席を共にし、とても教育熱心なかたであったと記憶している。

特に、文中感心したのは具体的詞の一節を提示し優しく解釈されているのが

実的に射ている。浜風の誘うような自然の風土とそこに生きる呼吸が飾りない「らしき」をつくっていることを見事に見抜きまとめている。

### 「曾祖父」

金子 智昭

人の命は長いようで短い。曾祖父と会うことはめつたにないことだ。それは一つの運命だから、大切な体験といわねばなるまい。

昔の大人は大げさに吹聴することを嫌い古武士のように多くを語らなかつた。わたしの祖父もそうだった。

金子さんの曾祖父の青年期は廃墟から出て、いわゆる三種の神器、電気冷蔵庫、洗濯機、テレビジョンが出回りはじめた頃の事だろうと推察する。あるいはもっと先かも・・・

曾祖父からの一家の系譜は祖父へ、そして作者へとつづくわけだが、曾祖父においては、分かりやすく項目にわけ人となりを掘りこみ見事に構成している。

エコール・ド・パリの高まりとモダニズムとパリコレクションの喧騒を想像させられる。

### 「景福丸の航跡

—玄海の女王から海峡の女王へ—

齊藤 満

景福丸は一九二十年（大正十一年）に就航し「玄海の女王」ともてはやされた。気品あふれた船体は人気を集めたようだ。

皇太子裕仁親王のヨーロッパ歴訪を担い、国王来日にはお召船の役目を果たした。  
かような来歴は実に栄光に満ちあふれていたのである。

昭和十三年事故を起こしてから、戦争の影に巻き込まれ、さらに敗戦の色が濃厚になってゆくのである。

やがて、青函航路が壊滅的打撃を受ける。その補充のため景福丸は危険を承知で日本海沿いに青函航路に就航する。

景福丸の波乱に満ちた航跡は敗戦迫

る国情に重なるものだった。

学生の頃しばしば景福ホテルなどと、目にし、耳にしたがこんな歴史があったのかと、学ばせてもらい改めて青函航路の曲折を思ったのである。

### 「エキストラのように」

佐藤 健

職業柄退職が早く、その時間を湯水のように使うのはもったいないし、隠居を決め込むのは社会ロス。持ち前のねばりとで次々と新しいことに挑戦する佐藤さんの底無しのチャレンジャー精神に感嘆する。映画撮影の現場の経験はないがそんな雰囲気であろうことは想像できる。何事も真摯に立ち向かう姿勢がよい。

### 「北海道人はどこから来たのか」

木村 裕俊

定説となるには、いくつかの実証が必要なのは歴史では欠かせない。南茅部町教委に勤務のころ、埴輪がみつかった

という話があり、土偶だとすぐわかった。明らかな縄文と茶褐色の肌合いがそれだ。

作者は人類の発祥をアフリカとし、ホモサピエンスを始原とする。と論考を展開する。その流れは、ヨーロッパ・アフリカ・アジアの三大人種の流れだ。日本に至っては、南方ルートと、北方ルートにわかれたという。

そのあたりを分かりやすく説いている。たとえば、園芸をやる際、実践によって気付くことが多い。瓜類の苗は実に似ている。そのため間違われる事が多い。きちんとその特徴を調べておくことがミスをふせぐ予防になると同時にこのように整理と統一が大切だろうと木村さんに敬意を表する。

本年も沢山のご応募に心からお礼申し上げます併せて健筆を祈ります。

詩

入選

音

坂本 千代光

君は胸の中の本枯らしを

聞いた事があるか

それは空しい音であり

哀しい音である

嬉しさの中で聞く事はない

幸せの時に

聞こえる音でない

それは冬木立の中に立って

聞く音だ

ひゆうと揺すぶる音だ

胸が震える音だ

孤独の中を走りゆく

魂の音でもあるのだ

仲天

星の降る夜である

胸の中

木枯らしの音がした

原爆の詩を読んだ夜だった

詩

入選

言葉

斉藤 奈央

私はあなたと出会いたい

私の生きる時代には

あなたはもともといないけど

私の憂鬱な視界に

ひとつの宇宙を映し出し

私の淀んだ心の川を

優しく走らせてくれた人

私はあなたに出会いたい

あなたが生きぬいた時間は

私の生まれるずっと前

だから私はあなたの声も

唇の色も知らないんだ

知らないあなたの睫毛の長さを

独り想って眠るだけ

だけど、

私は。

私はあなたの頭の中と

あなたの世界を知っている

あなたに綴られた文字は

時の流れじや錆びつかず

私の時代にも届いて

あなたの作った時間も景色も

私のために見せてくれる

限りなく遠いあなたと私を

限りなく近くしてくれる

私たちをひとつにするもの

言葉

詩

佳作

雨

玉掛 公恵

雨が降っている

雨の音で目が覚める 激しい雨だ

その激しさが 心穏やかにする

リタイヤした身には

雨の機嫌を取る事もない

いつもと同じ 時間が動き出す

激しい雨音が 心穏やかにする

遠い過去へフィルムを戻す

若き頃の「掬」 // 後ろを振り返らず //

あの気負いは どこに行つたか

老いて顔色の悪い

窓ガラス 一枚に守られて

窓の向こうの両脚を眺める

時間が――

時間の流れが――

一瞬の後に 昨日と今日を切断する

切断された昨日と今日は

手当てをしても復元しない

昨日までの昨日は

荒々しい「過去」に取って替わった

激しい雨の ほんの透き間に

「過去」が透ける

あの「過去」――

私を痛めつけた

気性の荒いあの「過去」は

今は一役終ひとやくえて 休やすんで居るのか

あの時 痛めつけられた体と心の叫びを

この雨が想い出させる

嗚呼

切断されたあの「過去」を

指から手放す事によって

この安穩とした時間を

私は「過去」から奪ったのだ!!

詩

佳作

環境部

沼崎  
洋

そこには 長年市民のゴミを燃やしてくれているおじさんがいました

「今までどんなゴミを燃やしたんですか？」

「そうだねえ 今まで胸が張り裂けそうなくらい

もつたいないと感じたものもあつたしどうして早く

燃やさなかつたんだろうなあ というものも あつたなあ」

「そうなんですか・・・」

「仕事だから我慢して燃やしていたけど

でも長年働いていると 価値のあるものないものが  
分かってくるんだよ」

「本人に教えてあげれば 良かったじゃないですか……」

「教えてあげたいと 思ったさ でも 今価値がないものが  
いざれ価値がでるなんて なかなか信じられないものなんだよ  
価値がでると分かってても 返すわけにもいかないし……」

「今なら オークションがあるから 持っていればいいのに……」

「所詮 時の運でね それが付加価値というものなんだよ」

「でも もったいないなあ…… これから価値がでるものって  
分かるんですか？」

「分からんねえ でも 不思議なことに 本当に価値のあるものって  
燃えないんだよ」

「本当ですか……じゃあ お金は？」

「燃えちゃうね」

「写真とか」

「好きな人のならね」

「…綺麗でしたか？」

「そりゃあ みんな 綺麗だよ だって 真心が

こもっているんだもの 日付けていうと そうだなあ

正月 お盆 クリスマス とかだろうねえ」

「そんなときに ゴミに出す方が おかしいですよね」

「でも 渡す訳にはいかないから そのままにしておくんだよ  
するとね 朝出勤したら一人で 無くなっているのさ」

「きつと 元の場所に 戻って行くんですね」

「……おじさんは にこつと笑っていました」

「さあねえ……。人は現世では納得いかないかもしれないけどね……」

死ぬときに 誰に強く思われ 誰が大事だったのか 分かるんだろうね

だから来世で その人たちに 会いに行くの

ところであんたは その人たちに 会いたいのかな？」

目を覚ますと わたしは

駅前のバスの終点にいました

## 選評

鷲谷峰雄

今回の詩は46作品が集まりました。近年にない盛況です。当然ながら水準も上がっています。

詩は添削からはじめます。余分と思える言葉から削っていきます。すると随分と無駄な言葉をつかったと思えることもあります。

### 入選 「音」

坂本千代光

音にも様々な聞え方がある。哀しい音、空しい音もそうです。その時の環境によって、音が変化します。

幸せの時に聞える音ではなしに、冬木立の中に立って聞く音なんです。胸が震える空しい音であり、やるせない音です。人間の胸の中には経験によって、あれこれと音があります。作者はその中の哀しい音に意味を求めています。

だから、胸の木枯らしは自分の音であって自分の人生です。その音はいつかし

ら、自分の詩になっているのです。

### 入選 「言葉」

斉藤奈央

言葉を考察すると、よく考えることですが、詩もよく考えて作ることで。そして言葉とは、限りなく遠いあなたと、私を限りなく近くしてくれる。私たちをひとつにしてくれる。それが言葉です。

もしも、この世に言葉がなかったのなら、私の心もなかったでしょう。言葉はあなたとの潤滑油なんです。

詩や小説も生れていてあなたに感動をあたえてくれます。言葉はあなたの先輩なのです。過去の体験を文章で伝えてくれます。

あなたの文章も錆びつかず、いづれは古典として、のちの世まで伝えられることが、あるかも知れません。言葉は感動を運ぶ船なのです。

### 佳作 「雨」

玉掛公恵

雨が激しく降っている。その激しさが、かえって心を穏やかにする。

でも、あの時に痛めつけられた心と体の叫びが雨を想い出してくれる。安穩とした時間を私は「過去」から持ちかえった。

作者は雨をきっかけに「過去」をコントロールできるようになった。「過去」は荒々しくはなくなった。「過去」に勝ったのです。その癒やし方もわかったのです。

記憶は自分の人生をも決めてしまうので「過去」を早目に癒やすことが心の苦しみを助けることになるでしょう。

### 佳作 「環境部」

沼崎洋

散文詩です。生活感が作品から滲み出ています。

長年、市民のゴミを燃やしているおじさんがいた。

「もったいないと感じたこともあった。価値あるものと、ないものが分かってくる。」

「今価値がないものが、いずれ価値がでるものかどうかも分かってくる。」

「今ならオークションがあるから持っていていけばいいと思うけれど仕事だから燃やす」

でも、不思議なのは本当に価値あるものは燃えないという。お金はすぐ燃えるが、心を入れた写真とかは、なかなか燃えない。真心がこもっているからだろう。

おじさんがバスの中で目覚めると、駅前のバスの終点だった。環境部での心温まることがあるから、明日もまた出勤する気力が湧くのだろう。

真心が入ったものはなかなか燃えないという、そこにポエジーがあります。

短歌

山県庸美選

入選

わが骨の始末を語る妻と娘の明るきゆえに落着かず居り

菊地 利春

紫の夏着好みし母想い鉄線咲きいる露地に足を止む

小松 榮子

秋たけてわが住む野辺の栗の実を恋ふがに待てば今し弾ける

石岡 繁雄

佳作

久々に会ひたる姉の車椅子押しつつ回る近江町市場

竹田 光彦

五月雨の滴に濡れて石楠花が友の名残か華麗に咲けり

三橋 暁子

カサカサと風に押されて上り坂枯葉は我を追い越して行く

柴田 泰子

夕暮れに番となれぬ赤トンボ亡き夫思う現し身のわれも

石寄 章枝

朝に着くバスで帰省の子らふたり朝食を終え忽ち眠る

水関 清

## 選評

### 入選

わが骨の始末を語る妻と娘の明き

ゆえに落着かず居り

第五句、このままでは字足らずなので「明るきゆえに」としたい。作者は「明き心」を省略されたのか。羨ましいご家族だ。結句が効いている。

紫の夏着好みし母想いてっせん咲

きし露地に足を止めたり

結句の字余りが気になるので「紫の夏着好みし母想い鉄線咲きいる露地に足を止む」としたい。紫の夏着と鉄線の紫の重なりに母を想う作者。

秋たけてわが住む野辺の栗の実を

恋ふが待ては今し弾ける

四句が字足らずなので、「恋ふがに待てば」とした。「野辺」は素直に野と解釈して良いのか。この様な風景もただ

ん少なくなってきた。

### 佳作

久々に会ひたる姉の車椅子押しつ

つ回る近江町市場

滋賀県の近江まで行き、体の不自由なお姉さんの車椅子を押しながら回る市場。高齢者社会のひとつまか。

五月雨の滴に濡れて石楠花は友の

名残りに華麗に咲けり

三句、「石楠花が」四句、「友の名残か」にした。

カサカサと風に押されて上り坂枯

葉は我を追い越して行く

情景の捉え方が素直なので読み手に伝わってくる一首。

夕暮れの番になれぬ赤トンボ亡き

夫思ひ現し身のわれも

初句と二句を「夕暮れに番となれぬ」としたい。番となれぬ赤トンボに寄せて、

先立たれた夫と、残された作者が重なってくる歌。

朝に着くバスで帰省の子らふたり

朝食を終え忽ち眠る

お二人の帰省のバスは、「一緒だったのだからか。下の句の捉え方がなんとも言えない。「朝」の重複は寛容の範囲か。

今回の、応募作品数は七七点、一八名

と言うことで、昨年に比べ三割強の減少し楽かなと思つたらどうかい。

入選作が直ぐに決まらない。常連と思われる作者の歌は安定感があるので採りやすい反面、インパクトのある歌が少ない。その中であつて初めての応募作品かと思ふ歌に出会うと何とか採りたいとスリルと緊張の連続となる。

無理に新しさを求めなくても、生活者としての歌は身辺にあると思うので次回も懲りずに是非応募して下さい。

選者詠

山 県 庸 美

疎開地の母の故里「広島」と聞くだに懐かし年経て吾は

無職となり束縛なき日々を夢見しに病院通ひあり九十二歳の義母在り

瞬く間に行者葫葉を広げ今年も天麩羅食べ損ねたり

厚生大臣の社会福祉「功労章」われ亡き後は妻も忘るらむ

廃炉への道筋未だ立たぬのに東京オリンピックへと躍る人々

俳句

熊澤三太郎選

入選

生まれし函館山の花めぐり

眠る児の拳ゆるみ夏座敷

万緑やルルドへ誘ふ露風詩碑

佳作

病窓に朝一番のつばめかな

きりきりと山冷える程照る紅葉

息詰めて合図を待ちぬ昆布採り

天高し香具師のタミ声津軽弁

山眠る遠き空見て母思ふ

伊藤静子

水関清

大沼洋子

菅原暘子

田中瑩子

竹田光彦

澤田寛之

欠端一機

## 選評

### 入選

#### 恵まれし函館山の花めぐり

平明な句です。一見するところ凡庸な句かと思われそうですが、実はそうではありません。この句はことばを選びに選んだ上に詠じた平明さです。先づ上五の「恵まれし」がいゝですね。「し」は過去の助動詞「き」の連体形です。俳句ではよくこの「し」が使われます。単なる過去ではなくて回想の意で使用されています。天候に恵まれたばかりではありません。家族と一緒に花見の出来る「恵まれし」自分がそこに居るのです。加えて家族の誰れかれも恙なく健康で花を巡ることの出来る仕合せを感じているのです。次の語「函館山」をとり入れたのも素晴らしいと思います。私達はいつも「函館山」を見つゝ暮らしていると言つても過言ではありません。そこで一気

に「函館山の花巡り」と表現しました。公園の花巡りとか山のふもとのとか言っていないのです。「花巡り」もよかったですね。「花見かな」と詠嘆しないのがよかったです。

#### 眠る児の拳のゆるみ夏座敷

「拳のゆるみ」と「夏座敷」の取り合せが、とてもいいですね。それに「拳のゆるみ」の表現が面白く際立っています。乳幼児、赤ちゃんですね。目を覚ましているときは拳を固く握りしめています。お乳を貰っておなかいっぱいになり満足して深い眠りに入ったのでしょうか。その「拳のゆるみ」を作者は目にしたのです。赤ちゃんが夏座敷に眠っていると云うことで、この句からいろいろな情景が想像されますね。例えば息子夫婦の赤ちゃんとしまししょう。その息子夫婦が父親の家を訪ねたと想像してみます。赤ちゃんと

夏座敷を開けて孫の「眠る児の」様子を見て、この句になったと私は想像してみました。

#### 万緑やルルドへ誘ふ露風詩碑

トラピスト修道院一帯が山も地も「万緑」なのです。「万緑」の季語がびたりと当てはまりましたね。「ルルド」へ登る森の径も清々しいですね。ところが「ルルド」と云うのは町の名です。ちょっと句の評からそれますが、フランスとスペインの国境を東西に分かつピレネー山脈があります。そのフランス側の北麓に標高約四百メートルの地にある町の名だそうです。この町に伝えられた有名なお話が羊飼の少女ベルナデッタですね。今も巡礼の地として多くの人が訪れているそうです。当別三ツ石のルルドはそのジオラマ（模造）ですね。さて、句は万緑のルルドへ「露風詩碑」が誘っているようだと詠じています。三

木露風は、ここ修道院から洗礼を受けたと碑にも刻まれています。またこの院の文学講師になったとも記されています。

夕やけこやけの赤とんぼの歌詞でつとに名の知られた詩人でした。この句は右のような事柄のいっばい詰まつているもので、入選とさせて頂きました。

## 佳作

### 病窓に朝一番のつばめかな

「つばめ」は春の季語ですね。春に渡来して子を育て秋の彼岸のころ南方へ帰ると歳時記にあります。「岩燕」「燕の子」は夏、「燕帰る」は秋。また家の軒や土間の梁などに巢をかけて人に親しまれているとも記されています。ビルの谷間を風を切つて飛んでいる燕を見かけることもありますね。この句の「病窓」は入院の窓から眺めた「つばめ」かも知れませんが、「夏燕」と云う季語もあるのですが作者は「つばめかな」と詠嘆しました。「朝一番の」の面白い表現の中に早く回復したい願いがこめられています。

### きりきりと山冷える程照る紅葉

作者は「照る紅葉」としていますね。それでもいいのでしょうか、歳時記では「照紅葉」（てりもみじ）です。それはそうとして「きりきり」の思い切った擬音語に注目しました。きりきりと音立てるように山が冷えてゆくと云う表現です。それにつれて、きりきりと色鮮やかに美しくなつてゆく照紅葉への感嘆。

### 息詰めて合図を待ちぬ昆布採り

「昆布」は夏の季語。面白い句になりました。「昆布採り」の旗が上る合図で一斉に舟が出勤する。その合図を「息詰めて合図を待ちぬ」と表現しました。私の持っている歳時記が古いのか、このような昆布採りの合図の例句がありません。新しいにはあるかも知れませんが、ただこのような昆布採りの様子を見たことも聞いたこともない人がいるとすれば、理解し難い句かとも思います。

### 天高し香具師のダミ声津軽弁

秋の澄みきつた空「天高し」に「香具師」(やし)を配しました。「縁日など」人の多い所で見世物などを興行し、また粗製の商品などを売ることを業とする「など辞書にあります。その「香具師」が「津軽弁」の「ダミ声」口上で商品を売っていると云う面白い一句が仕上りました。「天高し」と「香具師のダミ声」の対照の面白さです。

### 山眠る遠き空見て母思ふ

「山眠る」は冬の季語ですね。あらゆる活動を止めて眠っているかのような冬山のことです。その「冬山」と亡くなった「母」を取り合せたのです。人は幾つになつても母を想ふものです。私など、ふとしたはずみに母を想います。一所懸命働いて私達を育ててくれました。平明な句ですが、それだけに心打たれる句になりました。

選者吟

熊澤三太郎

乗初の市電の席を譲らるる

駄句駄句と蛙が鳴いてをるやうな

籐椅子を離れきて用忘れをり

とんがりの駒ヶ嶺乗せてゐる花野

秋高し函館山と共に生き

池さとし

入選

やさしきは薬に勝り効いてくる  
ありがとう五文字に心ありったけ  
花火のよう消える光とこの命

佳作

履歴書に書けない過去の意地がある  
臥して知る亀が這うよな恢復期  
親の老い認める勇氣応援歌  
耳の中お喋り好きな友が住む  
同窓会老け過ぎ誰だか分からない

坂本千代光  
岩本真穂  
塩谷玲菜

中村宵星  
水島悦子  
本間総子  
白井靖孝  
山根裕二

## 選評

### 入選

#### やさしさは薬に勝り効いてくる

実際には、あり得ない事なのかもしれないのに、うん、そんな事有るよなあと、ついつい頷いてしまいうような作品。

風邪をひいた時の、母親の熱心な看病の様子を思い浮かべてみると、妙に納得してしまう。

#### ありがとう五文字に心ありつたけ

感極まった時の、さまざま光景をこの句に当てはめてみると面白い。

「ありがとう」は、日常生活に欠かす事の出来ない、非常に重要な会話の一部なのだが、それだけになかなか川柳の題材になり難い。上手に捌き上げたのが手柄。

#### 花火のよう消える光とこの命

十六歳の少女の作品。

研ぎ澄まされた感性の冴えに裏打ちされて、この作品は存在感がある。

比喩の扱い方が抜群で、惚れ惚れする是非これからも川柳を続けてほしい。先の楽しみに川柳に触れる事が出来非常に嬉しい。

### 佳作

#### 履歴書に書けない過去の意地がある

だれもが持っているに違いない傷。心の奥底に封印したままで、時効など有る筈もなく、時々は大波になったり、さざ波になったりして押し寄せて来る事さがある。そんな心の一ページのよう気をする作品に仕上がっている。

#### 臥して知る亀が這うよな恢復期

若い時は、風邪に罹り寝ていても一日か二日もすると、嘘のようにケロッと治ってしまったものだが、今のこの身ではすっかり恢復するのに何日もかかってしまう。

中七の「亀が這うよな」の比喩が効果的でお見事。

#### 親の古い認める勇気応援歌

自然の摂理とは言うものの、何時までも若く元気で居て欲しいと願うのは、誰でも一緒である。

そんな親を思う気持ちだが、応援歌となったのである。妙にじめじめしていないのが、作品を魅力的なものにしている。

#### 耳の中お喋り好きな友が住む

おそらくは、耳鳴りに悩まされている

に違いない。

その事をかくもユーモラスに表現して成功している。

日常の一光景をかくの如く表現した力量を高く評価したい。

### 同窓会老け過ぎ誰だか分からない

何十年振りかの同窓会、お互いに当時の面も影も無くなるくらいで、名前を聞くまで誰だか分からなくなってしまうていた。

そんなシーンをそのままストレートに表現している。

選者吟

池  
さ  
と  
し

ひらがなの一つに打ちのめされている

既に完熟やがて崩れる首洗う

溺れてもいいさ詩の海泳いでる

亡母に似た石を探している河原

残りの命不戦を叫び続けよう

審査員紹介（\*本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師

対馬 俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東 璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師

文芸誌『海光』代表

竹中 征機

詩

日本現代詩人会会員

北海道詩人協会理事

鷺谷 峰雄

短歌

北海道アララギ地方編集委員

道南歌人協会顧問

山県 庸美

俳句

函館俳句協会会長

『ホトトギス』同人

熊澤 三太郎

川柳

函館川柳社主幹

池 さとし

あとがき

『市民文芸』第五十七集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆二十四編、小説七編、文芸評論二編、ノンフィクション十編、詩四十六編、短歌七十七首、俳句百一句、川柳百

十二句、計三百七十九点となりました。

今年度も昨年を上回る応募があり、嬉しい限りです。そ

の中でも応募された市民の方々の中に、高校生の応募が昨

年の倍以上あったことも特筆すべきことと思います。

昨年も施設やお店を廻り、市民文芸冊子を置いていただ

きました。ご協力いただいた方々、ありがとうございました。

市民文芸が広く市民の方に浸透するべくこれからも取

り組んでいきたいと思えます。

最後になります。各審査員の先生方にはご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 — 第五十七集 —

発行日 平成30年3月17日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者TRC函館グループ

(函館市五稜郭町26-1) TEL(〇一三八)三五―五五〇〇

題字 木下 順一

表紙 旧市立函館図書館

## 【 応 募 要 項 】

### 募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

## 【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）
2. 原稿は未発表のものであること。
3. 原稿には ①応募部門  
②住所  
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）  
④年齢・性別  
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）  
⑥電話番号 を明記してください。
4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。  
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。  
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。  
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。
5. 応募原稿は返却いたしません。  
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。
6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。

